



図 170 包2-C~G層出土 石器(2)

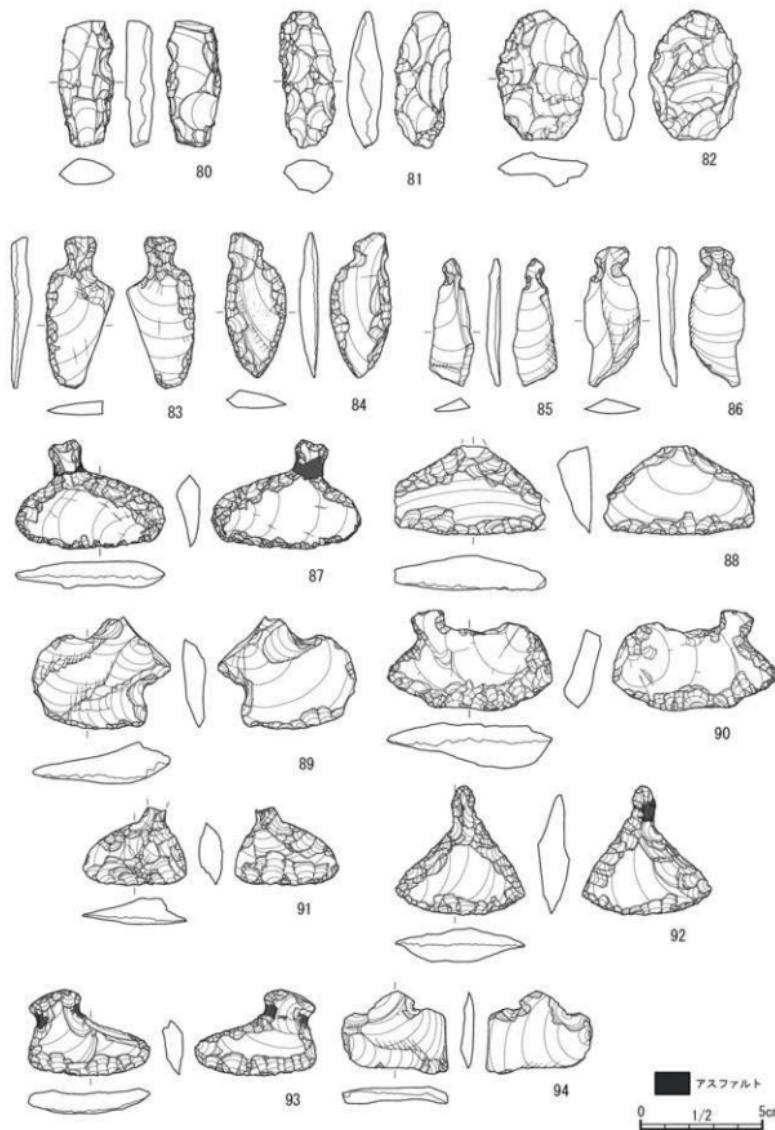


図 171 包 2-C~G層出土 石器 (3)



図 172 包2-C~G層出土 石器 (4)

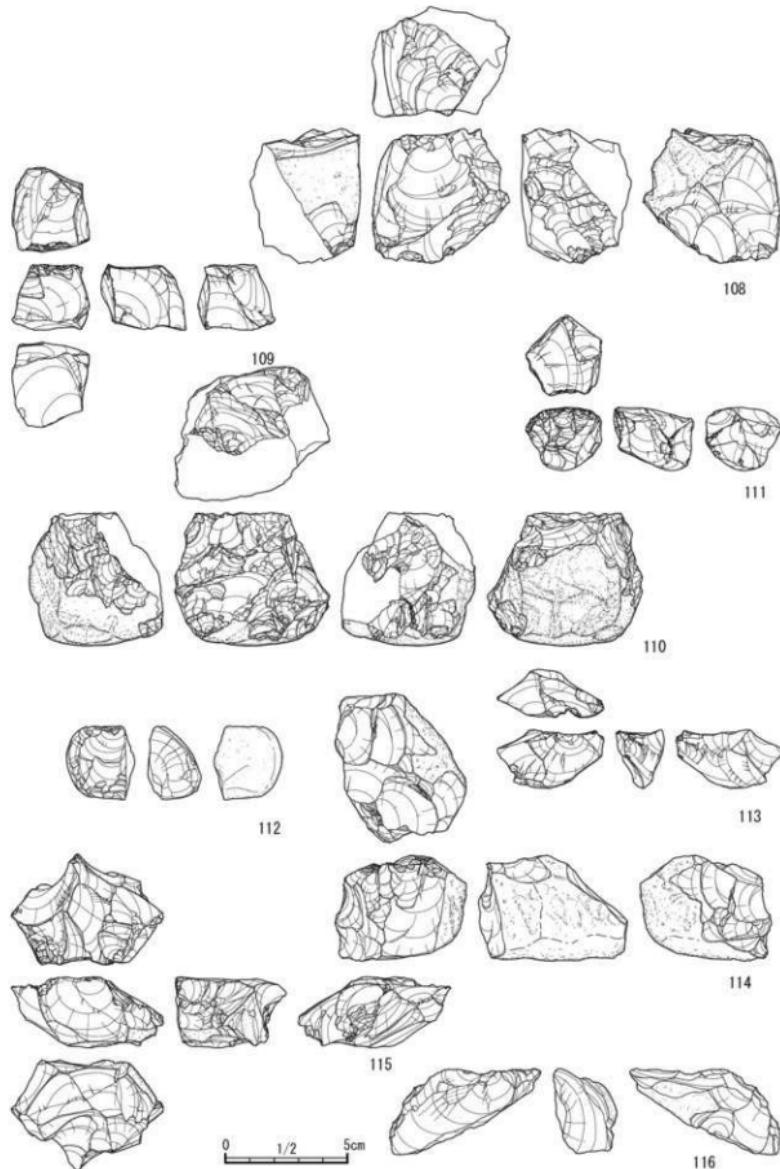


図 173 包 2-C~G層出土 石器 (5)

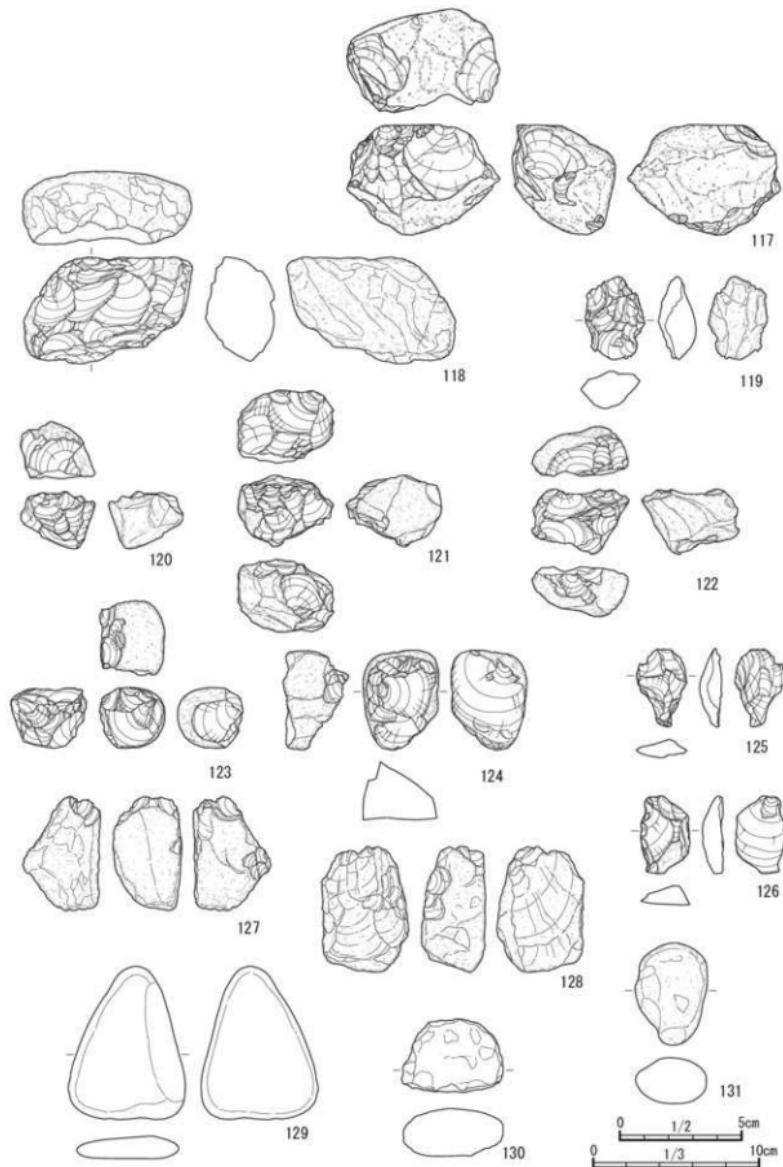


図 174 包2-C~G層出土 石器 (6)

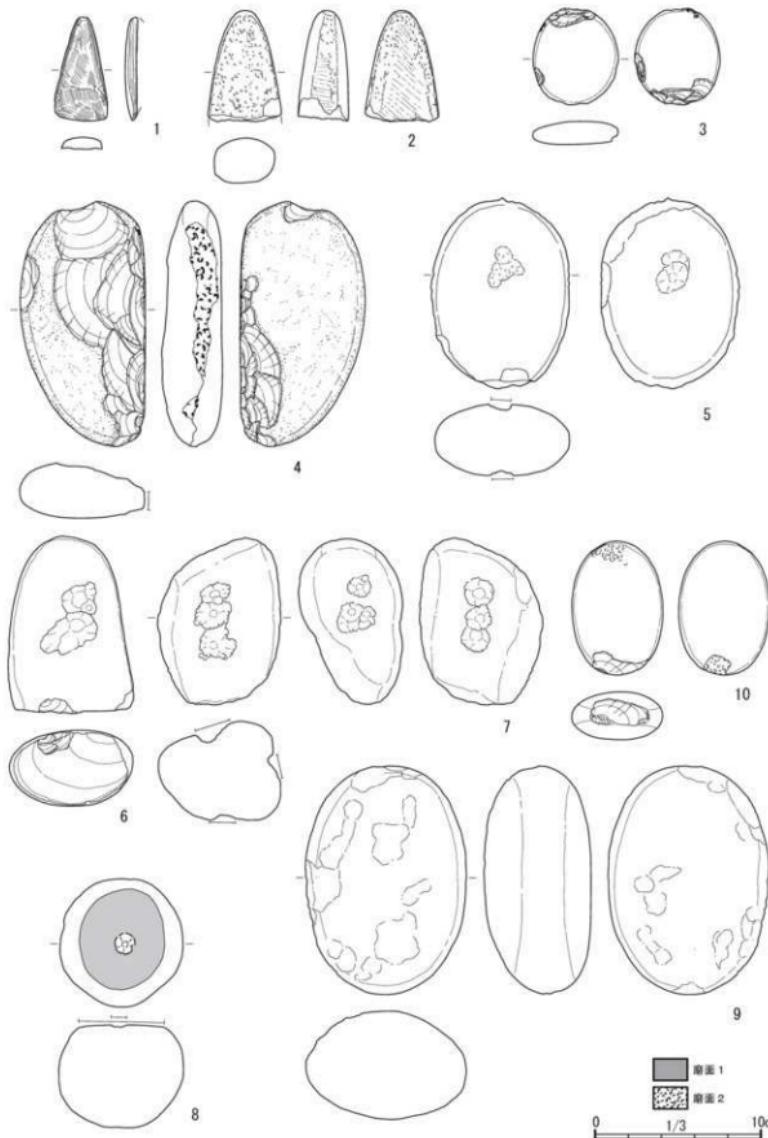


図 175 包 2-C~G層出土 石器 (7)

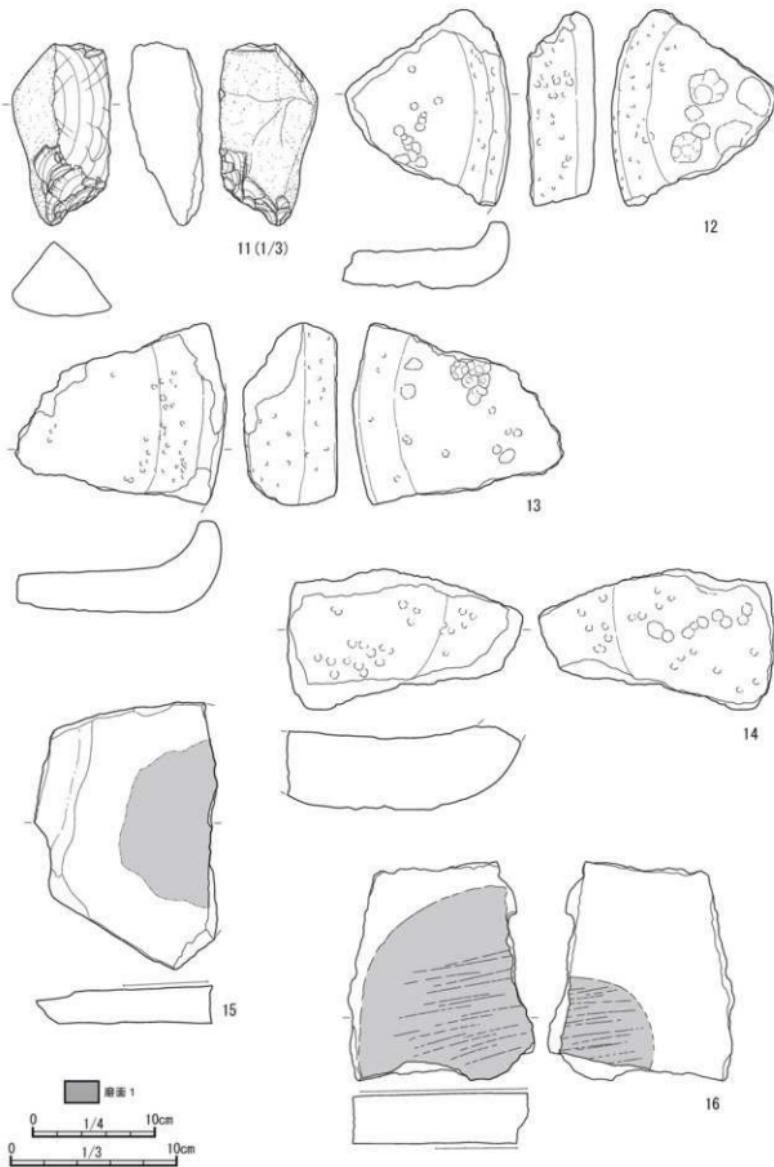


図 176 包2-C~G層出土 石器(8)

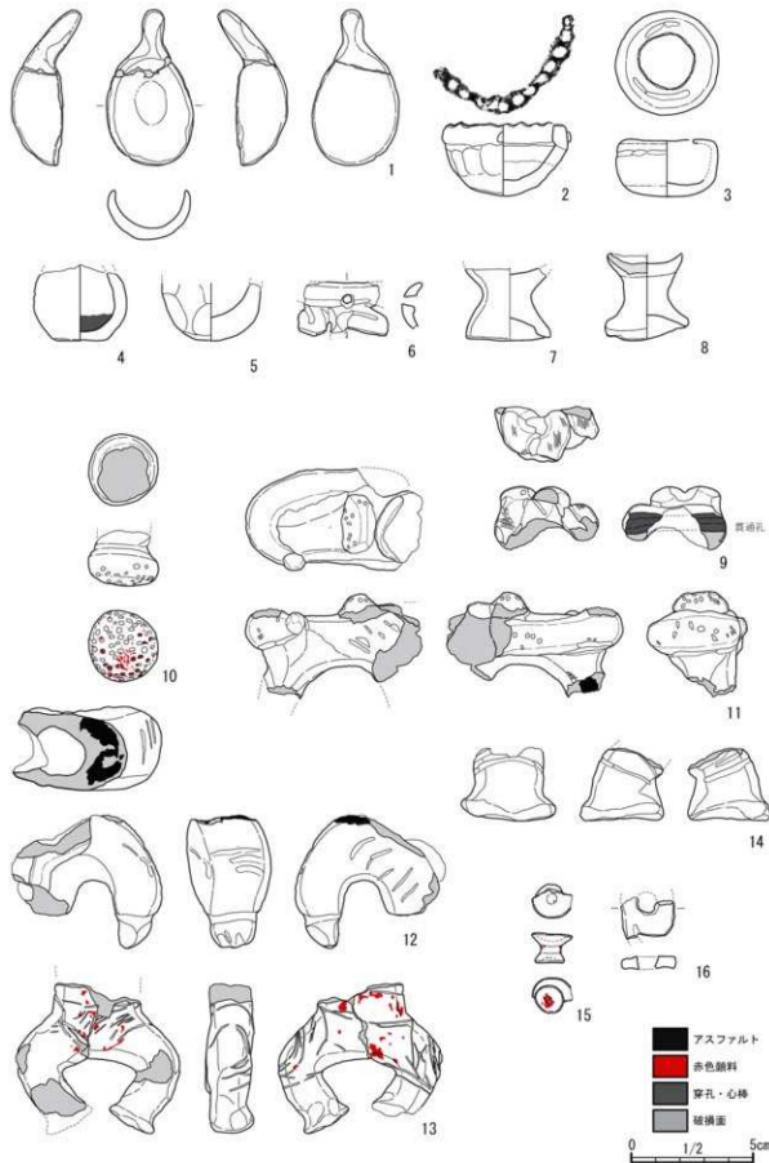


図 177 包 2-C~G層出土 土製品 (1)

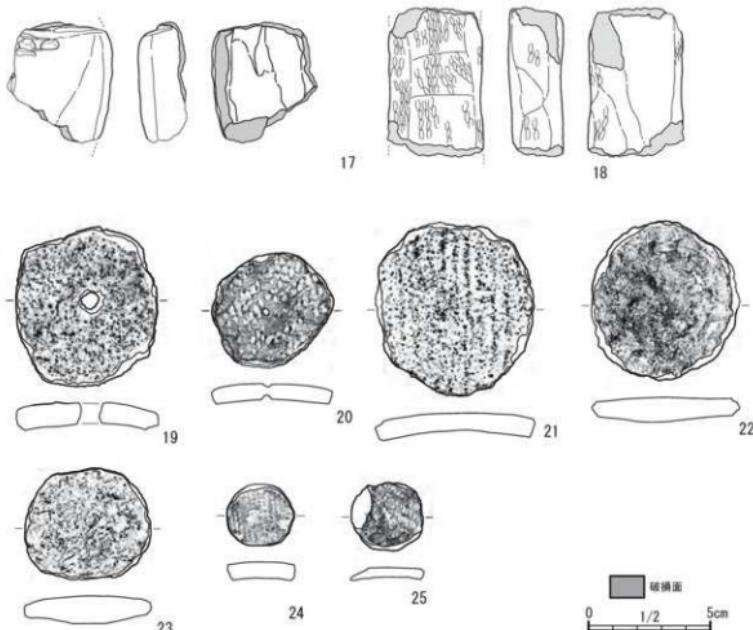


図 178 包2-C~G層出土 土製品(2)

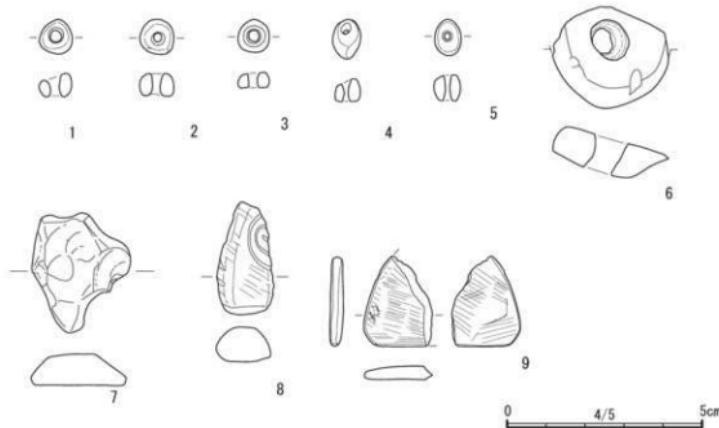


図 179 包2-C~G層出土 石製品(1)

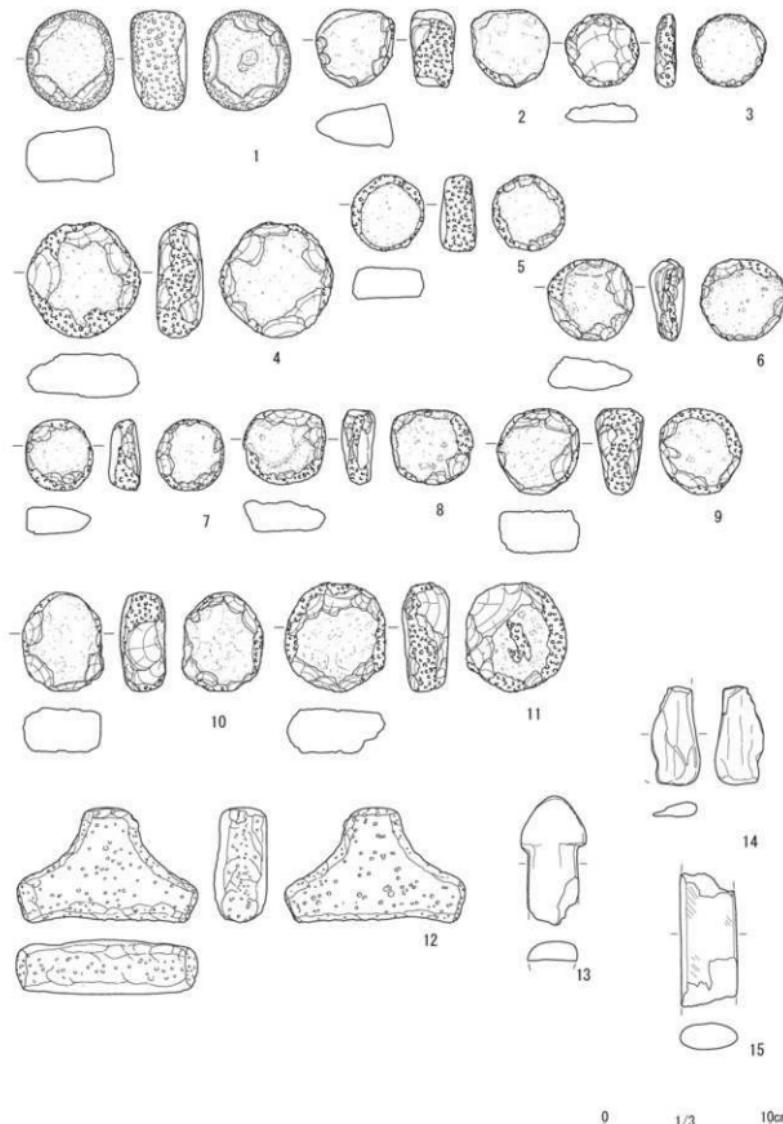


図 180 包2-C~G層出土 石製品(2)

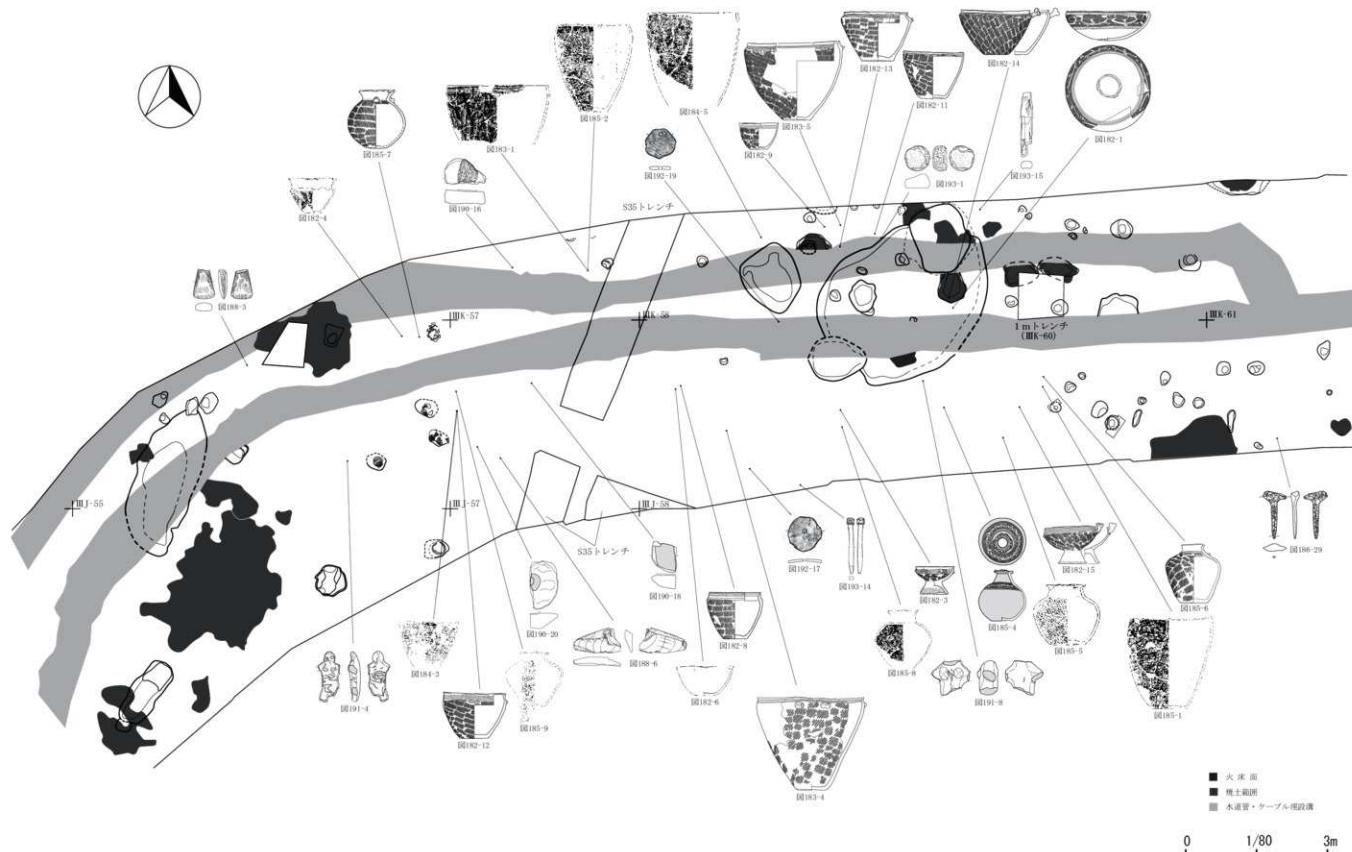


図181 包2-H層遺物出土状況図

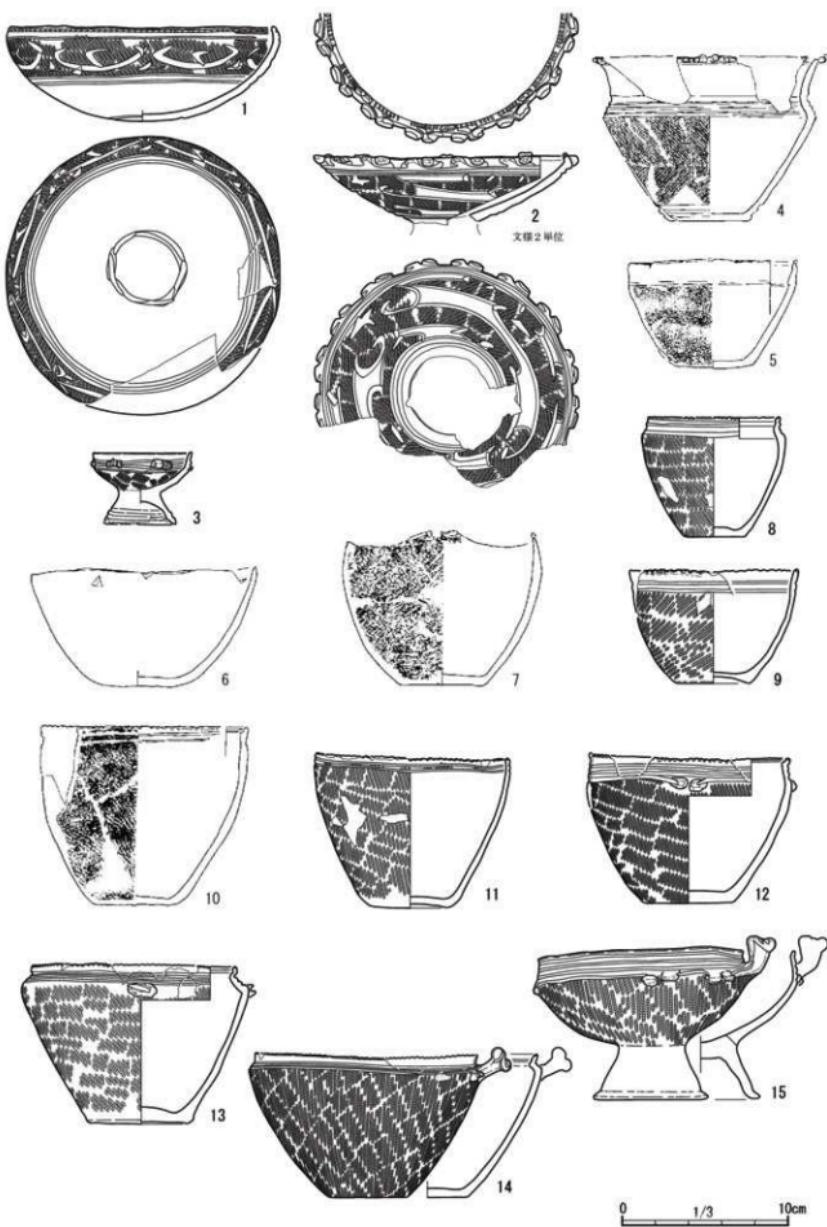


図 182 包 2-H 層出土 土器 (1)

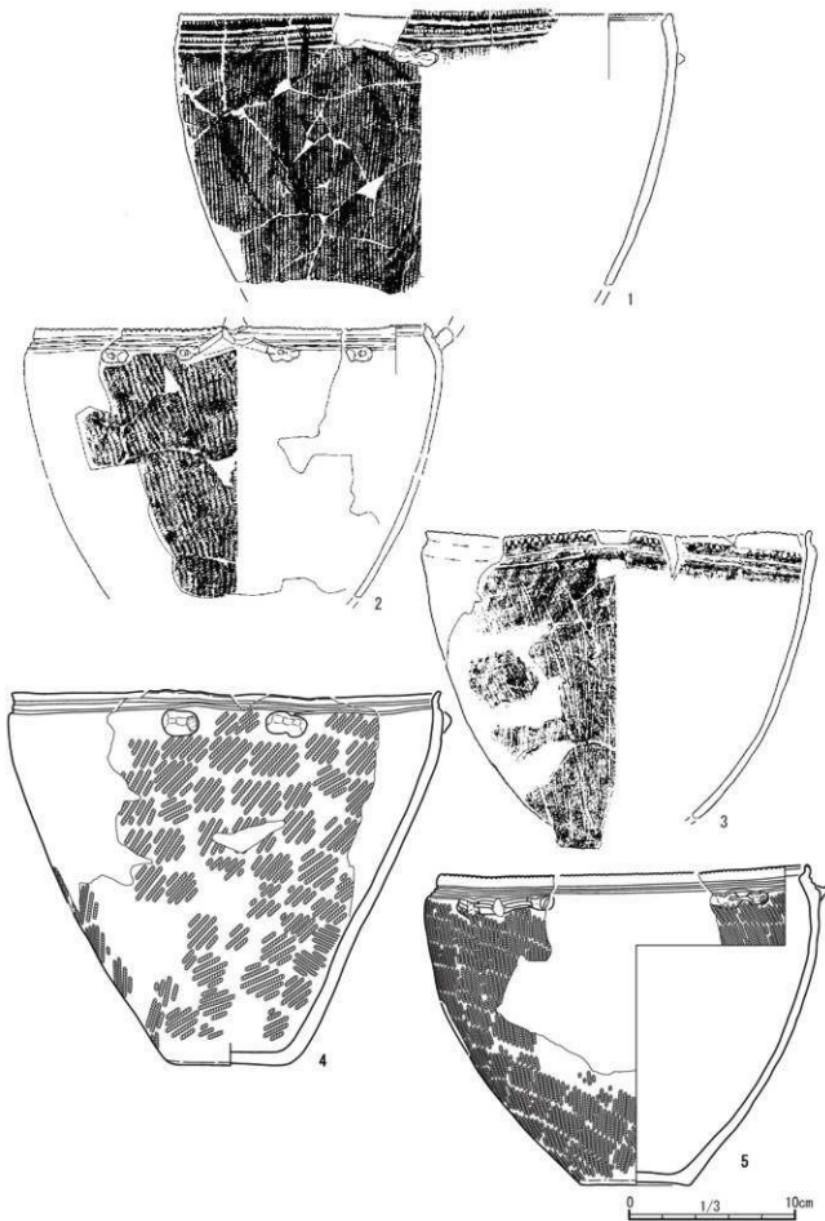


図 183 包2-H層出土 土器 (2)

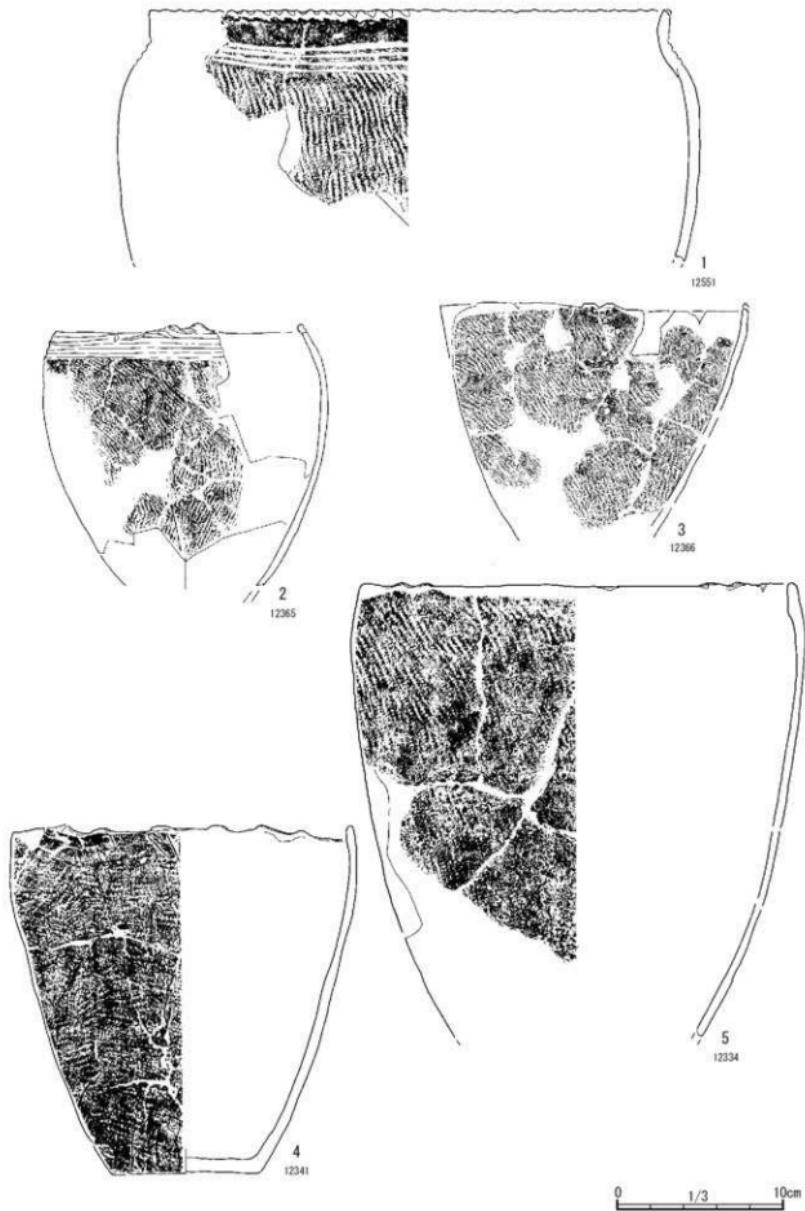


図 184 包2-H層出土 土器 (3)

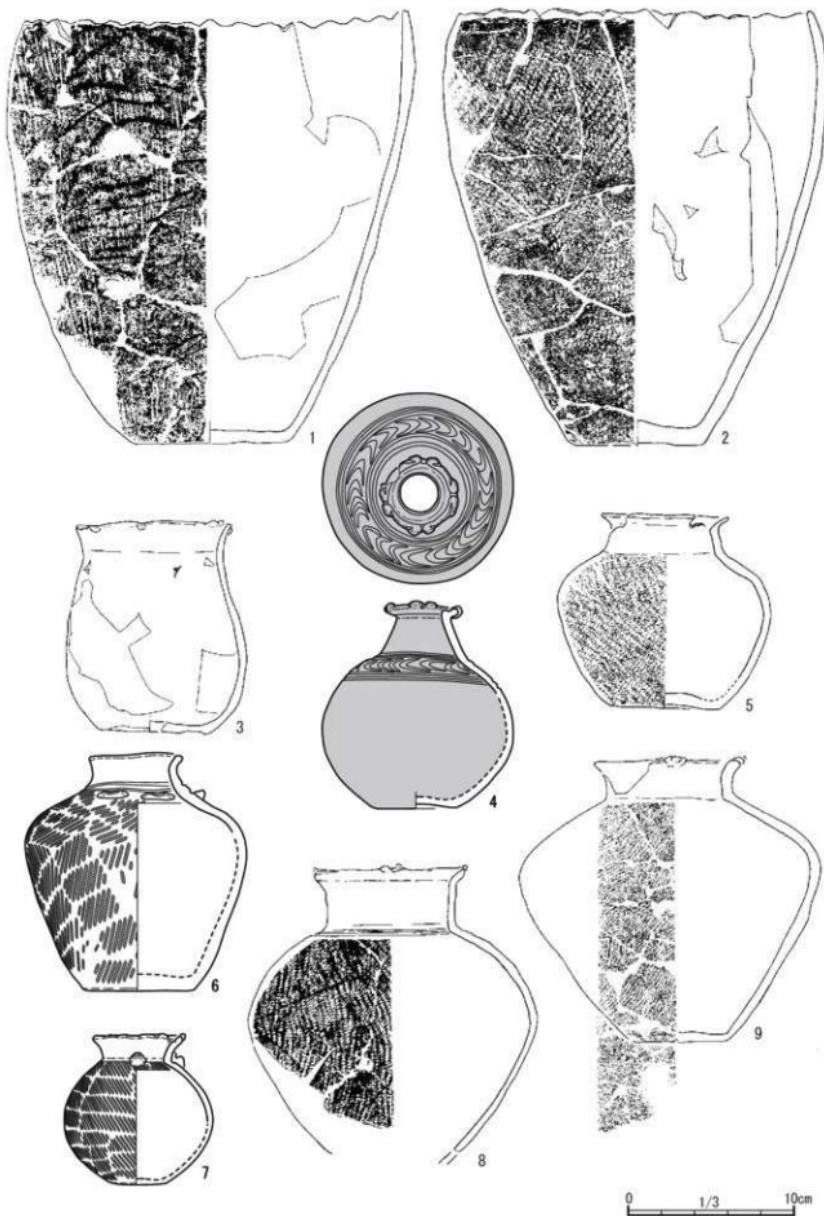


図 185 包2-H層出土 土器 (4)

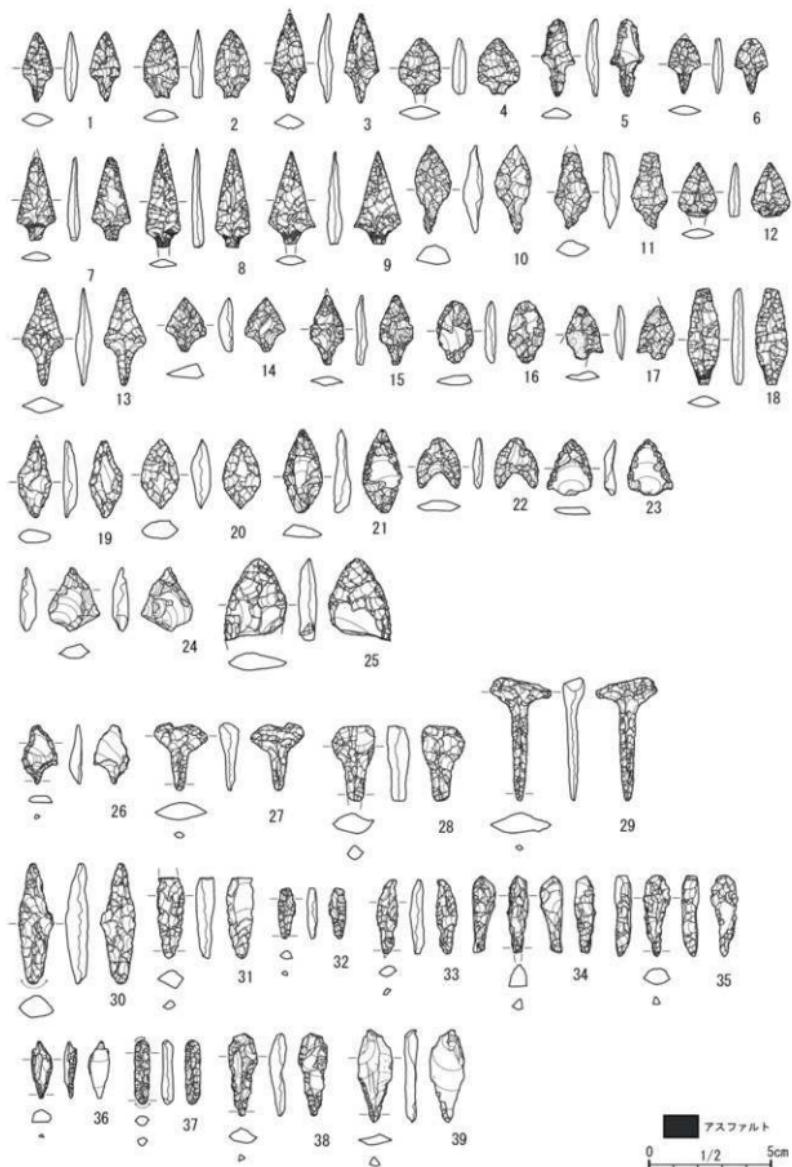


図 186 包2-H層出土 石器(1)

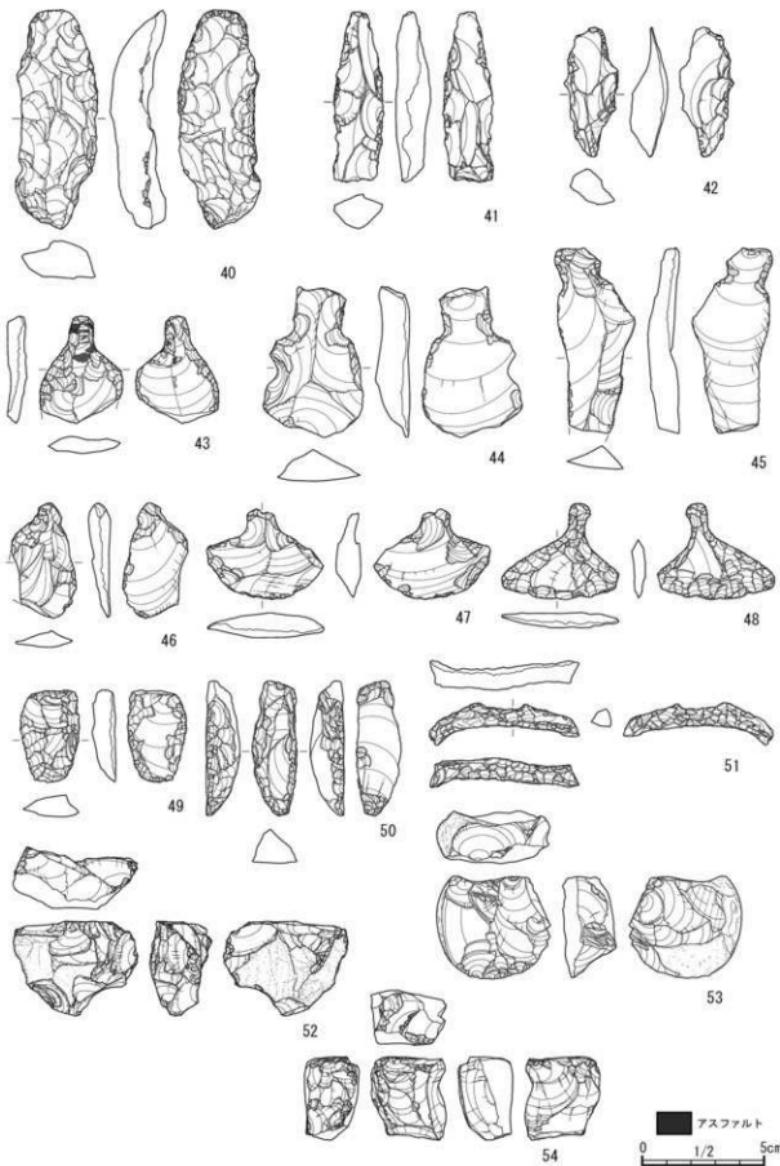


図 187 包2-H層出土 石器(2)

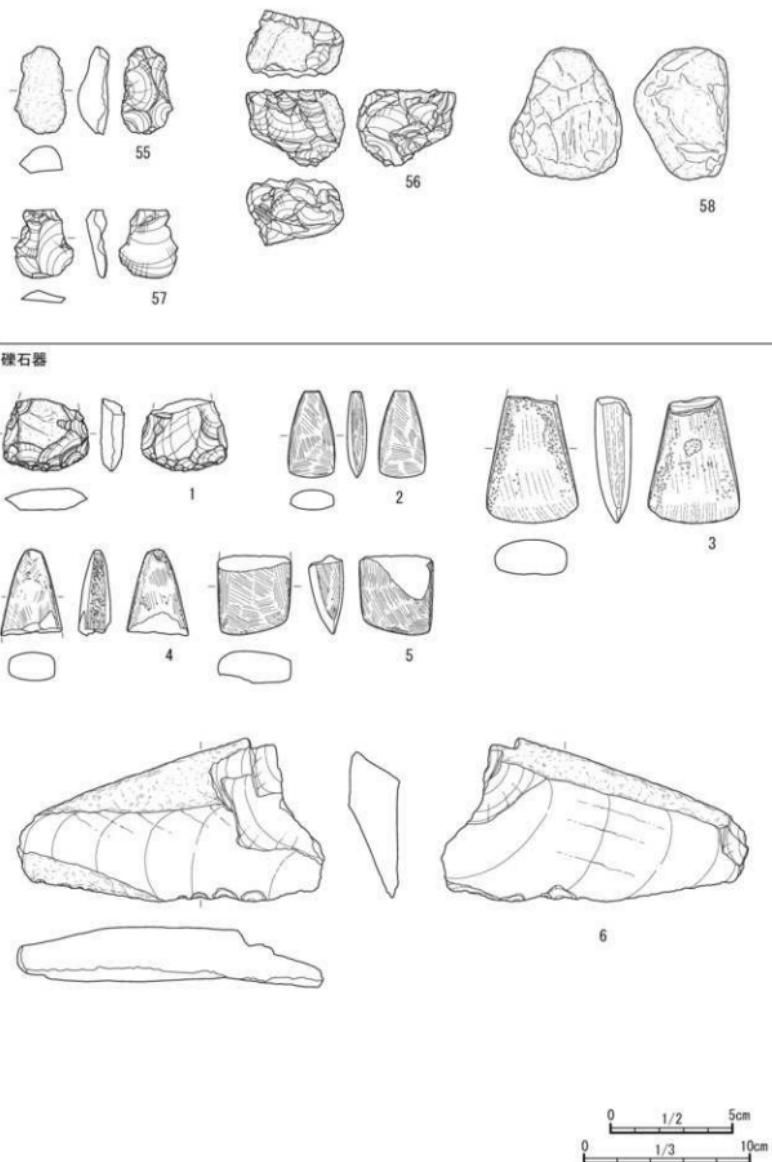


図 188 包2-H層出土 石器（3）

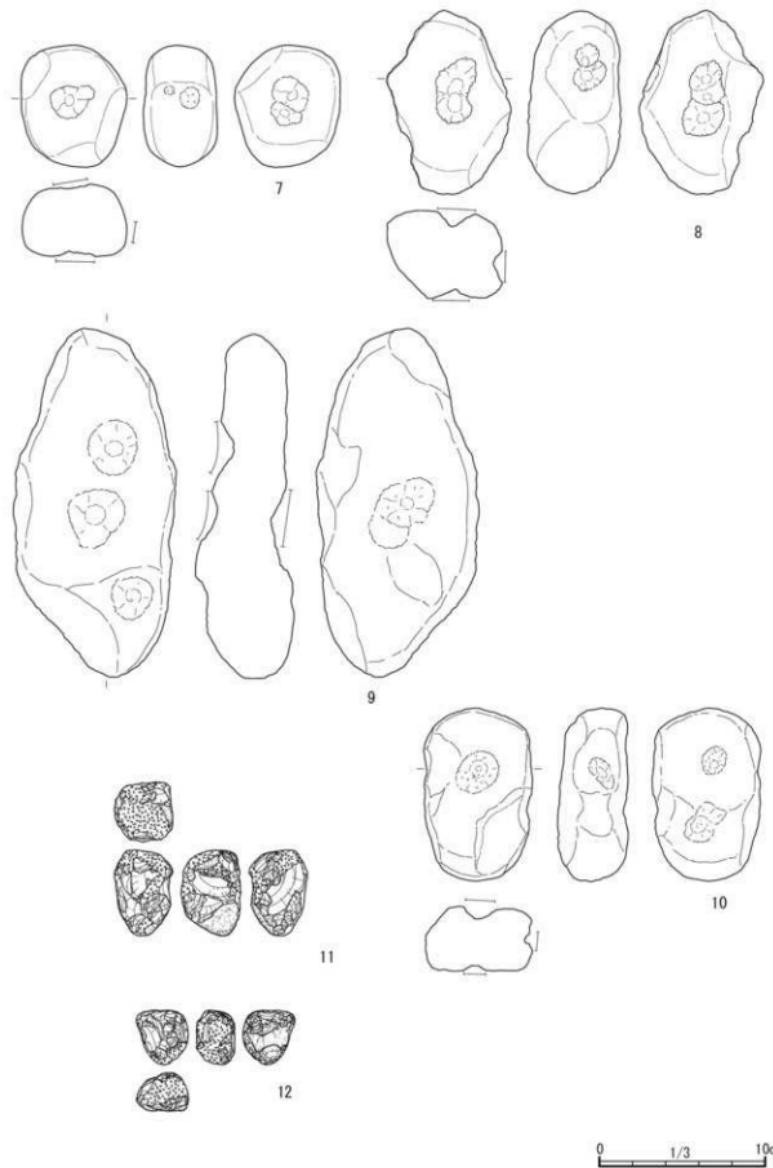


図 189 包 2-H 層出土 石器 (4)

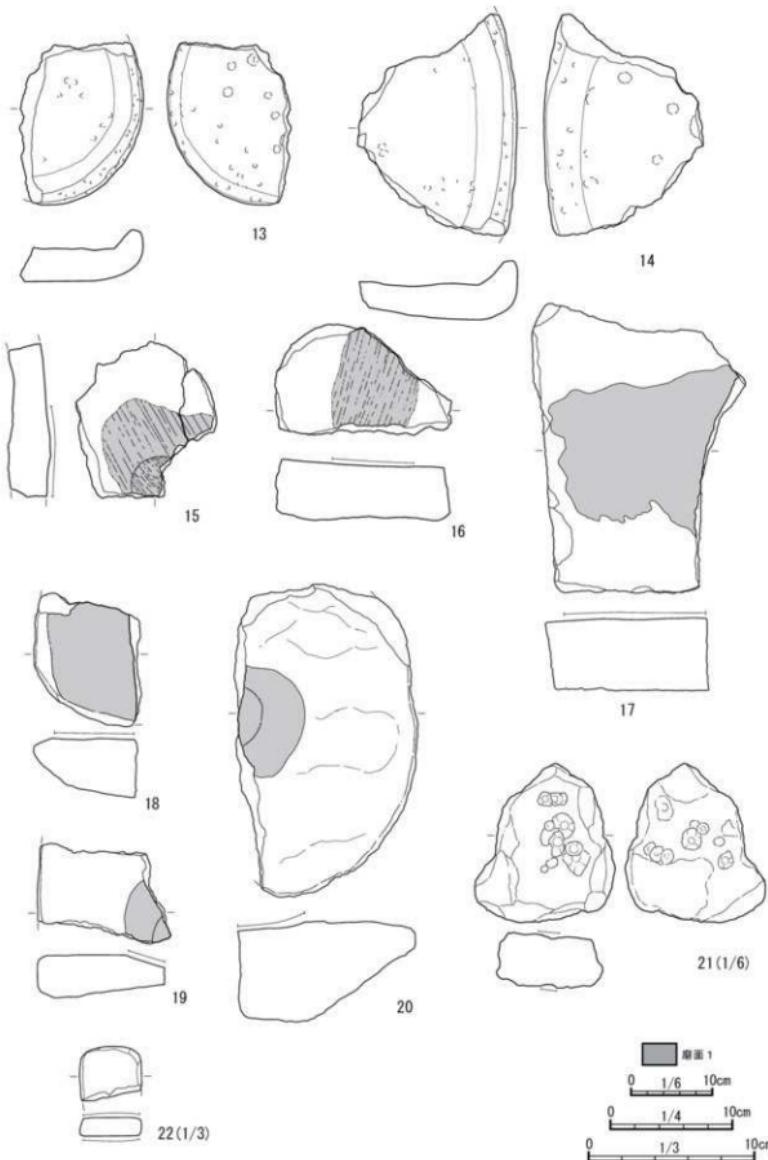


図 190 包 2-H 層出土 石器 (5)

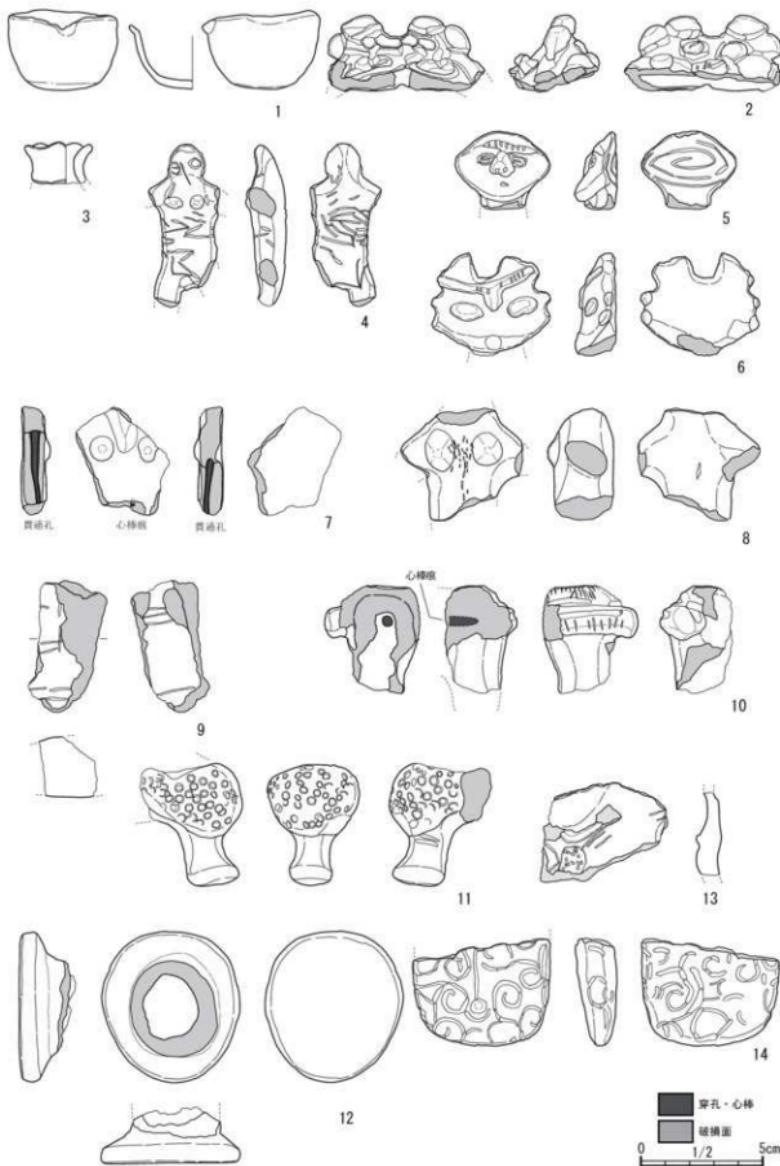


図 191 包2-H層出土 土製品（1）

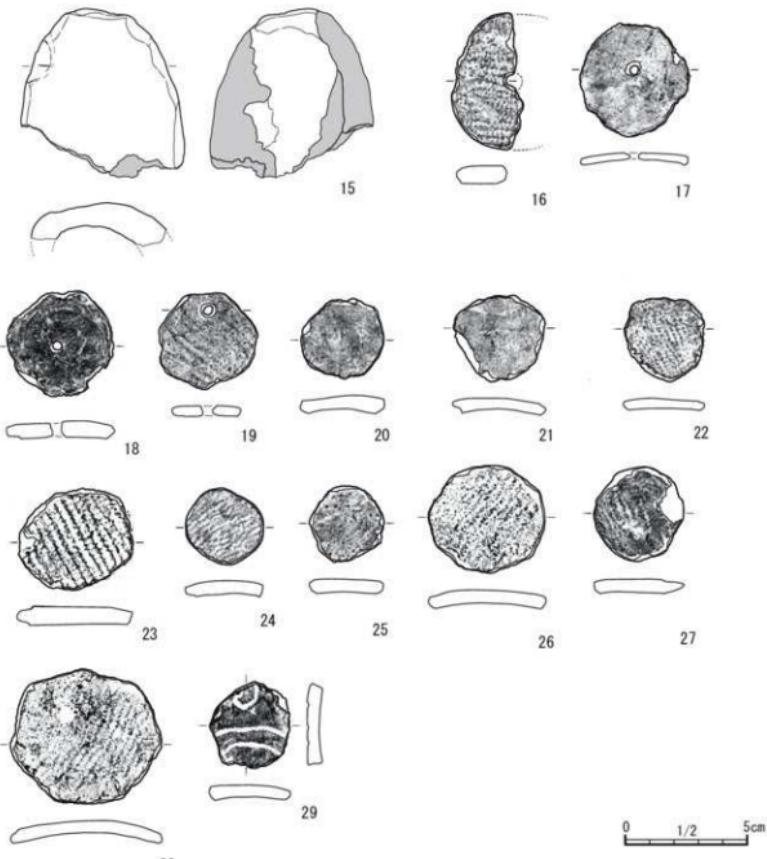


図192 包2-H層出土 土製品（2）

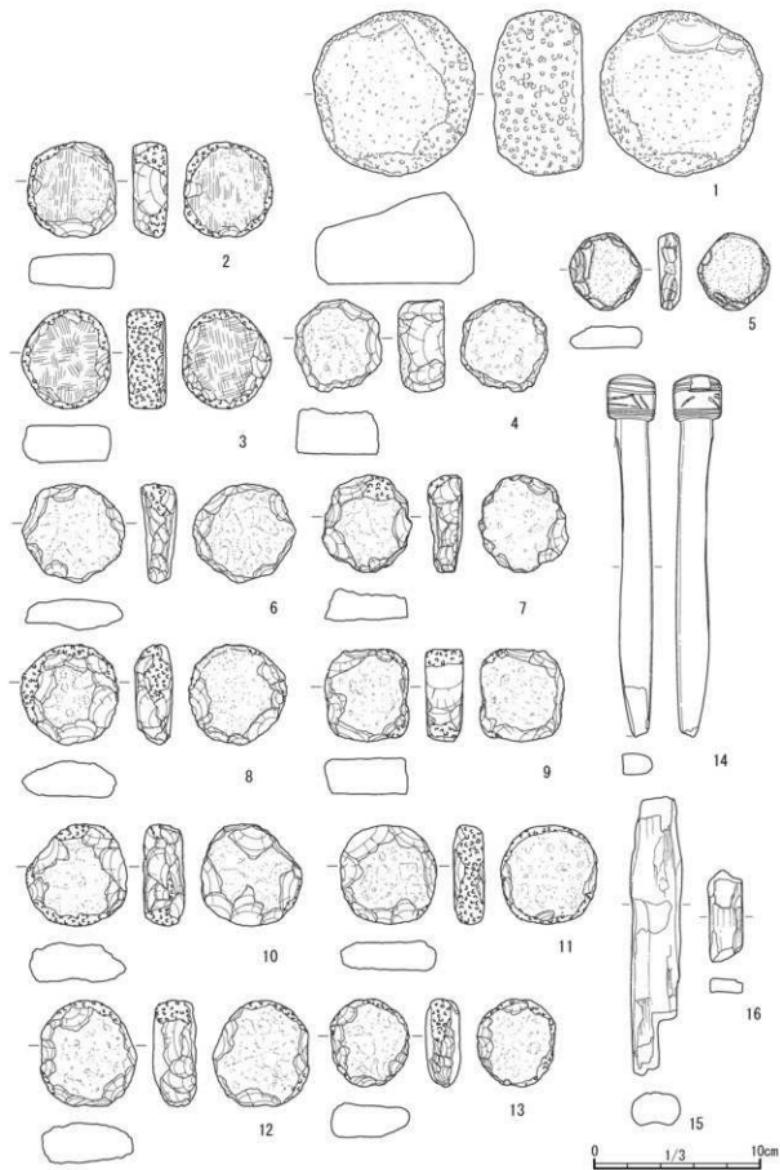


図193 包2-H層出土 石製品（1）

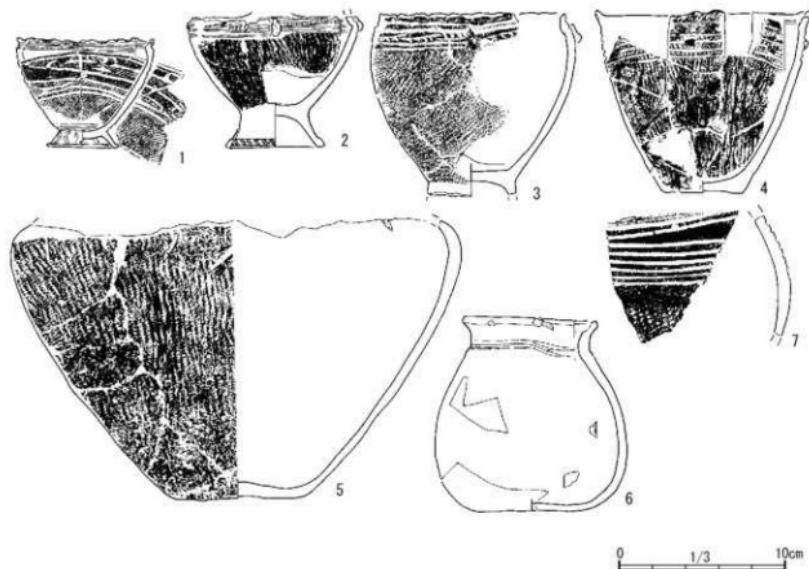


図 194 盛土造構（1m トレンチ）出土 土器

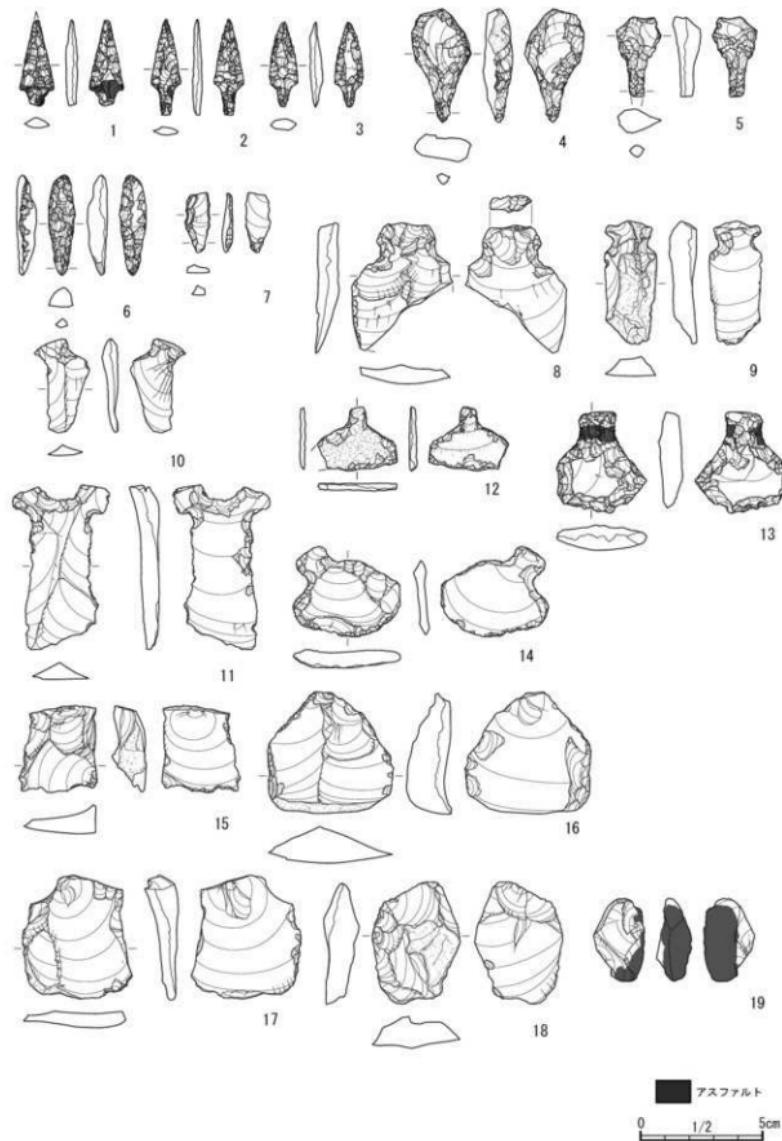


図 195 盛土遺構 (1m トレンチ) 出土 石器 (1)

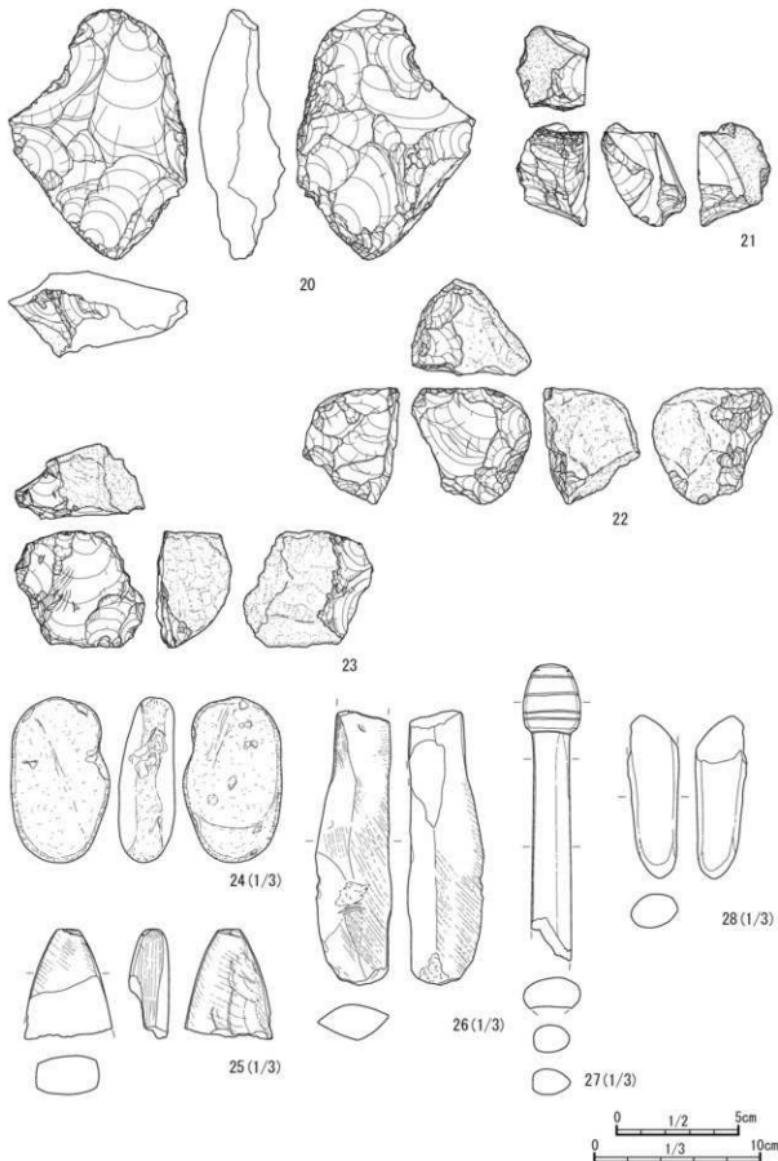


図 196 盛土遺構 (1m ブランチ) 出土 石器 (2)・石製品

第12節 削平範囲 (SX06・弥生包含層(弥包)・包含層、図197~207)

【位置・確認】ⅢJ-62~68、ⅢK-61~67グリッド付近において確認したが、東側の73ライン付近まで延びる可能性がある。調査当初、本遺構は削平された区域、つまり遺構と認識していなかったため、調査初期の段階では単なる包含層もしくは弥生包含層(弥包)として遺物の取り上げを行っていた。しかし、Ⅳ層に相当すると考えていたV層上面の漸移層から、管玉や土石製品、弥生土器片などが多数出土することが判明した。弥生時代以前の人間が縄文時代に形成された第Ⅲ層及び第Ⅳ層を削平(除去)しなければ弥生時代遺物が第V層上面にある漸移層に包含されることは有り得ないはずである。したがって、ある時期に第V層まで削平され、黒色土の形成とともに弥生時代遺物を包含し漸移層を形成している土層(包含層・弥生包含層)が広がる範囲は、削平された範囲(SX06)と認識するに至った。遺物観察表や遺物注記等に「包含層」「弥生包含層(弥包)」「SX06」とあるのは調査時期の違いであって、同義であることをお断りしておく。他遺構との重複は、各遺構で記載する。

【平面形・規模】図197にあるとおり、削平範囲はⅢL-62グリッドとⅢJ-63グリッドを北西から南東に結ぶ線より東側に広がる。東端はⅢK-68グリッドにあるSK48で弥包層を確認したことから約30mにわたって存在していることは確実といえる。また黒曜石散布範囲(SX04)でも弥生時代遺物が出土していることから東端は73ライン付近まで広がる可能性が高く、その場合、東西方向に約45mほど広がることになる。南北方向については、調査区域外の南西部分は沢地形になっていることから、南西方向には延びても10~15mほどではないかと推測される。北東方向は急峻な崖になっていることから広がることははないが、北から北西方向には水路を越えて削平範囲が続いている可能性が高い。

【堆積土】本遺構の堆積構成土は、弥包a層~弥包c層の3層に大別された。弥包a層は黒褐色土もしくは暗褐色土で、ローム粒・炭化物を少量含んでいる。弥生時代遺物包含層の上位層である。弥包b層は、いわゆるソフトロームのV a層を母材とする褐色土もしくは明黄褐色土を主体としており、暗褐色土や黒褐色土が斑状に含まれる。弥包c層は、いわゆるハードロームであるV b層を母材とする褐色土もしくは黄褐色土を主体としており、暗褐色土や黒褐色土が斑状に含まれる。弥包a・b層は削平範囲の南西部、ⅢJ-63~65グリッドに分布し、弥包c層は調査区北西側から南東側に広く分布している。弥包b層と弥包c層の相違は、削平の最下面、削平後の生活面の土質に起因するものであり、同一時期に形成されたものと思われる。弥包a~c層いずれも、火山灰分析を行ったところTo-aが検出されている(第4章第1節2)ことから、弥生時代から平安時代にかけては黒色土の形成速度が遅く、弥生時代遺物が埋没しきらううちにTo-aが降下したものと考えられる。

【出土遺物】縄文時代後期・晩期の遺物が少量出土したが、弥生時代の遺物が多い。

(1) 土器

縄文時代の遺物は時期ごと、弥生時代の土器は器種ごとに記載する。

【縄文時代後期】(図198-1・2) 1・2とも後期前葉の十腰内I式に比定される深鉢口縁部片である。

【縄文時代晩期】(図198-3~28) 3~6が浅鉢、7~14が鉢、15が鉢台部、16~18が粗製深鉢、19~27が壺、28が注口土器である。

【浅鉢・台付き浅鉢】(図199-1~13) 1~13は変形工字文が施文されるもので、口縁部の内面に1~3条の沈線を有する。波状口縁が多く、平口縁は少ないようである。1・3はSP50出土遺物と接合したもので、弥包層出土片が多数である。11は刺突文が併用され、12の台部には透かしがある。

【鉢・台付き鉢】(図200-1~17) 1・2は鉢、3~7は台付き鉢、8~17は台が付くか不明である。

1は変形工字文が施文され、2は地文縄文のみの鉢である。略完形の3～5はいずれも変形工字文が施文され、6の台部には山形文の間の三角部分が透かしとなっている。4は2段の山形文が胴部を覆っている。8～13にも変形工字文がみられ、11・12には刺突文も施文される。15の口縁には突起があり、16はやや小型の鉢、17は底外面に沈線で渦巻文が描かれている。

【小型の鉢】(図200-18～26) 18・19は丸底を呈するもので、18口縁には押圧が、19は小波状口縁をなしている。20～22は波状口縁をなし、23・24は変形工字文と刺突文が施される。25は底部で底面付近に沈線が1条巡る。26は手づくねによる台部片と思われる。

【壺】(図201-1～図202-2) 1～4・6・7は小型の壺で、平行沈線や変形工字文が施文される。5は、SK51(図66-1)、SP62(図83-10)、包1層(図210-21)出土遺物と同一個体の広口壺で、詳細はSK51で述べている。図201-8～図202-2は大型の壺と思われる。8は変形工字文と刺突文、9は変形工字文と思われる。10はSK52出土土器(図67-1)、SK53出土土器(図68-1)、SP43出土土器(図81-5)と同一個体と思われる。11・12は同一個体と思われる壺胴部と底部である。図202-1・2はいずれも流水工字文が施文される壺で、2は短頸壺である。1はSK51・52出土遺物と接合したものである。口縁と最大径のある胴部に刻みを有する隆帯が巡り、頸部と胴部に無文帯がみられる。胴部上半には2段の流水工字文が施文されている。沈線内には、かすかに赤彩の痕跡が認められる。

【甕】(図203-1～図205-3) 図203-1～3は壺口縁部片、4・5は胴部片である。6は小波状口縁で平行沈線と分断する短沈線・粘土貼り付けがみられる。7・8は同一個体と思われる壺で、頸部がやや直立し、小波状口縁をなしている。9も頸部が直立する壺で、地文も同じく縄文が施文されるが、平口縁で頸部に綫の条痕が施文される点で異なる。10・11は口縁に沈線、口唇に押圧あるいは刺突が巡る。11は包1層出土土器(図210-4)と接合した。図204-1は小波状口縁で胴部上半に最大径を有する地文縄文のみの甕である。図204-2～6は頸部に列点が施される甕で、口縁部に縄文が施文されるもの(2～4)と無文のもの(5・6)とがある。図205-1～4は同一個体とみられる甕で、頸部に列点が1条巡り(図205-1)、胴部中央付近にある最大径部分には平行沈線が施文される(図205-2)ものと思われる。器壁が厚く、数十cm以上の大型の甕と考えられる。

【壺もしくは甕】(図205-5～7) 壺か甕か判然としない破片資料で、5は胴部片、6・7は底部片で、7は補修孔が2個、底部近くに穿たれている。

(2)石器

石錐1点、削器など5点、両極石器5点、二次加工剥片2点、微細剥片3点、石核5点、剥片など28点、磨製石斧1点、石皿2点、自然礫9点の計61点出土した。剥片石器の出土重量は1,564.4g、礫石器の出土重量は37,951.2gである。

【削器】(図206-1・2・4) 1は縦長剥片を素材とし、左辺に加工がみられる。2は素材打面側が欠損している。4は横長の素材で左辺に反方向の加工がある。

【微細剥片】(図206-3) 縦長剥片の右辺に微小剥離痕がある。

【石核・剥片】(図206-5～15・17) 5は縞素材、17はホルンフェルス製の石核である。6～15の黒曜石製剥片は原産地分析の結果出来島産である(第4章第7節)。

【磨製石斧】(図206-16) 敲打と研磨で整形されている。右側面は敲打でくぼんでいる。

【石皿・その他】(図207-18～20) 19は柱状の大形礫を素材とした砥石である。20は大形の石皿であり、扁平礫の平坦面に磨面がみられる。18はガラス質安山岩の自然礫である。

(3) 土石製品

土製品は7点図示し、石製品は9点中6点図示した。

【土玉】(図207-27~29) 中央に孔があり、孔を中心にして放射状の沈線が正面のみ施文される。

【土偶】(図207-30~32) 30は土偶の下半身部分である。31、32は土偶の腕部分である。

【土製円盤】(図207-33,34) 無孔の土製円盤が2点出土している。

【玉】(図207-21~26) 管玉が4点出土している。両面穿孔であり、濃緑色の凝灰岩(碧玉)製である。破損しており、割れ面などはすべて摩滅している。破損後も使用され続けた可能性がある。平玉1が2点出土している。25は両面穿孔で、断面形状が幾分丸みを持つ、26は片面穿孔で、小口面が平らである。

【遺構の時期等】出土遺物やその状況、To-aが検出された状況などから、弥生時代以前に削平が行われ、弥生時代五所式~井沢式期に人間生活の営みがあって、弥生時代中期から平安時代にかけて埋没が進んだ遺構と考えられる。おそらく平坦地を造成するために削平を行ったと思われるが、平坦地を造成する目的、理由は不明である。

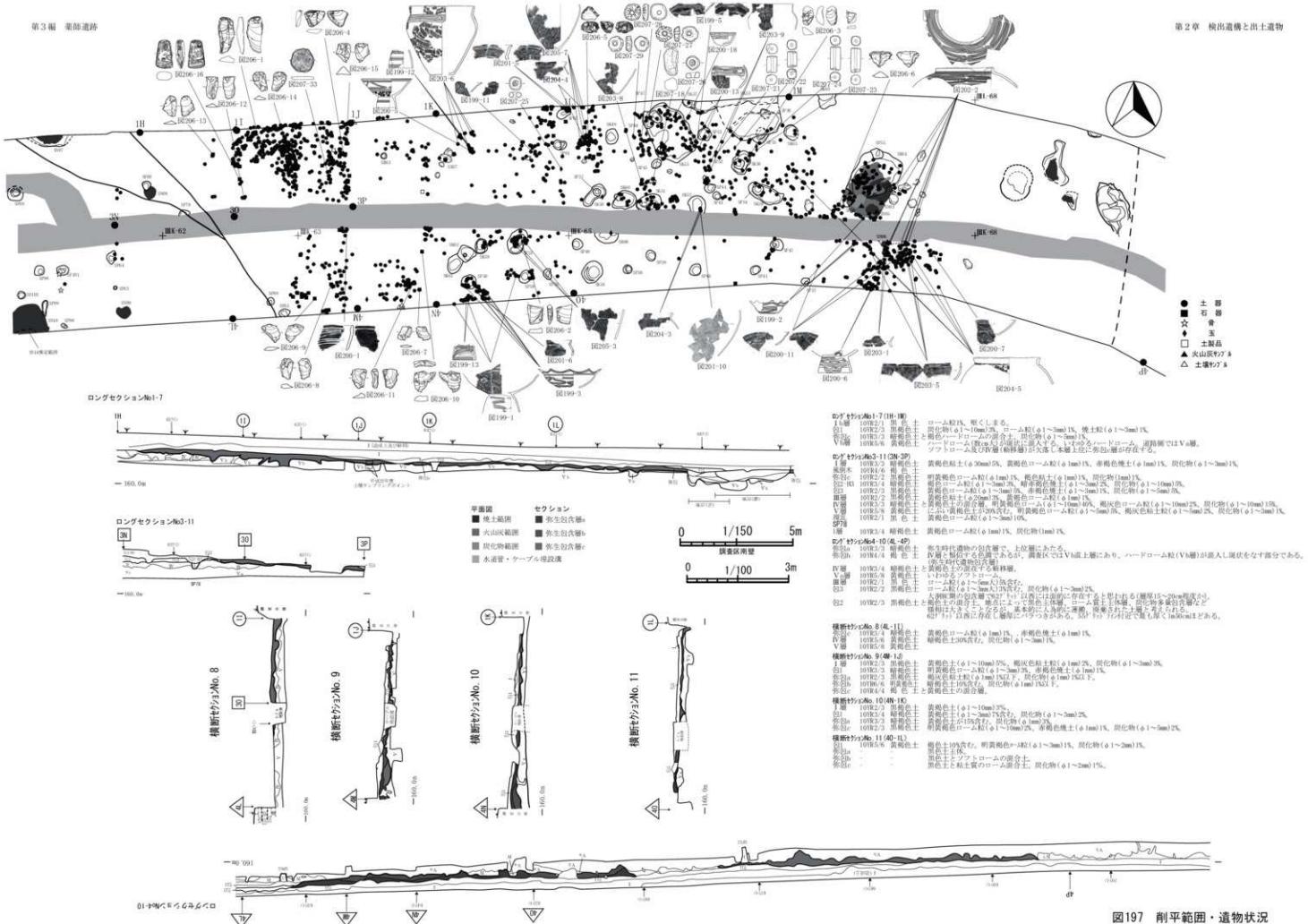


図197 削平範囲・遺物状況
- 281 - 282 -

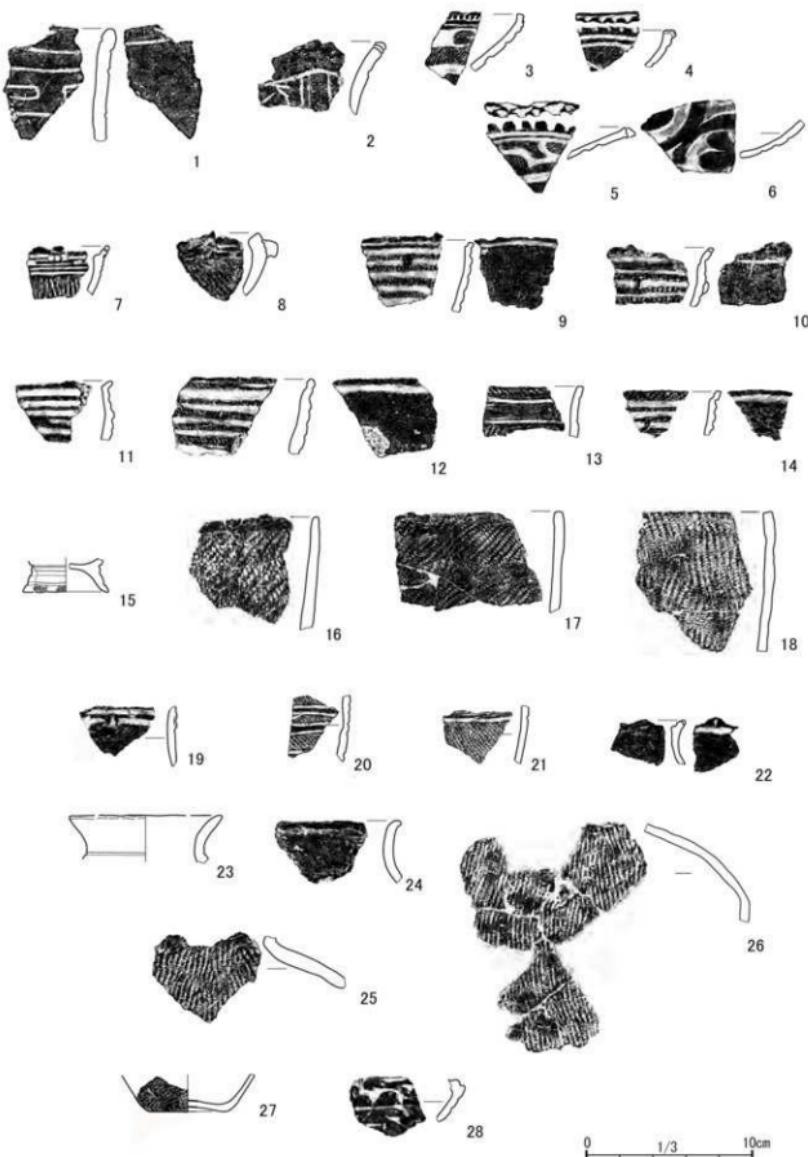


図 198 弥生包含層出土土器（1）

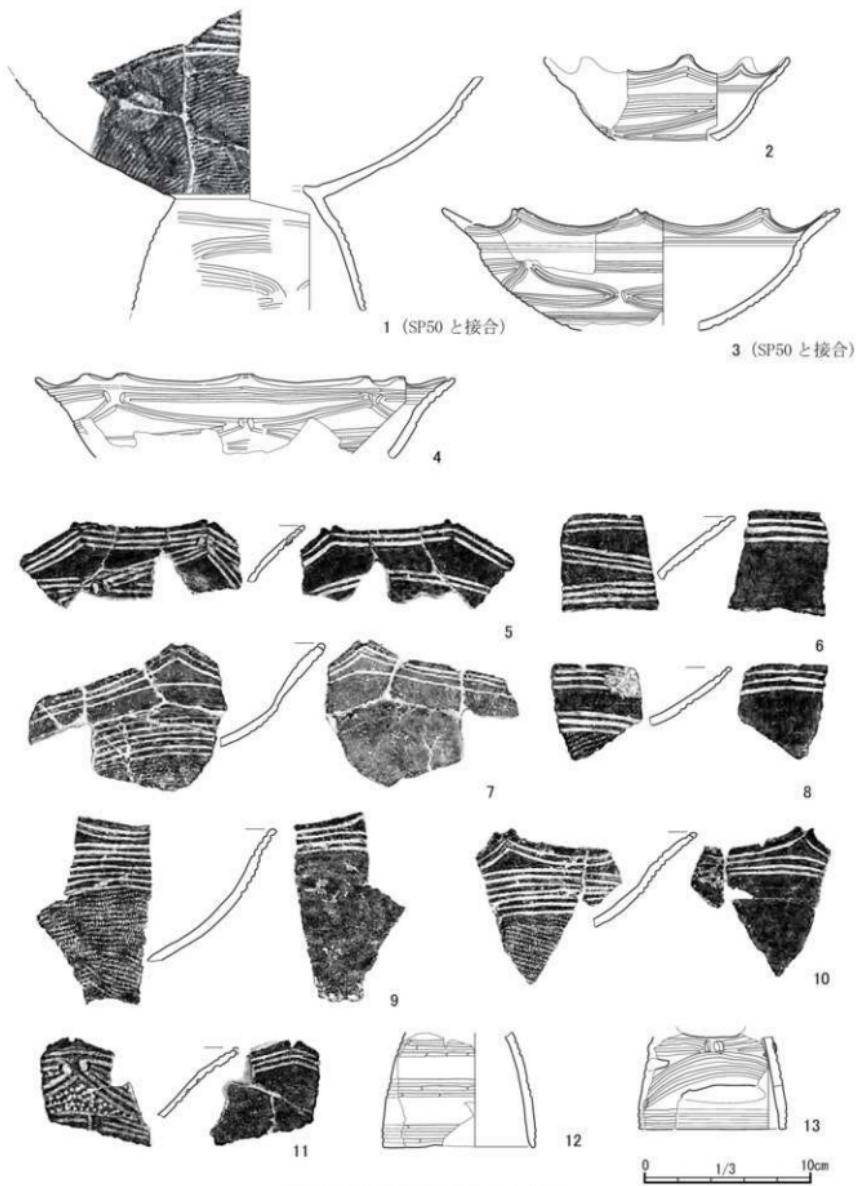


図199 弥生包含層出土土器（2）

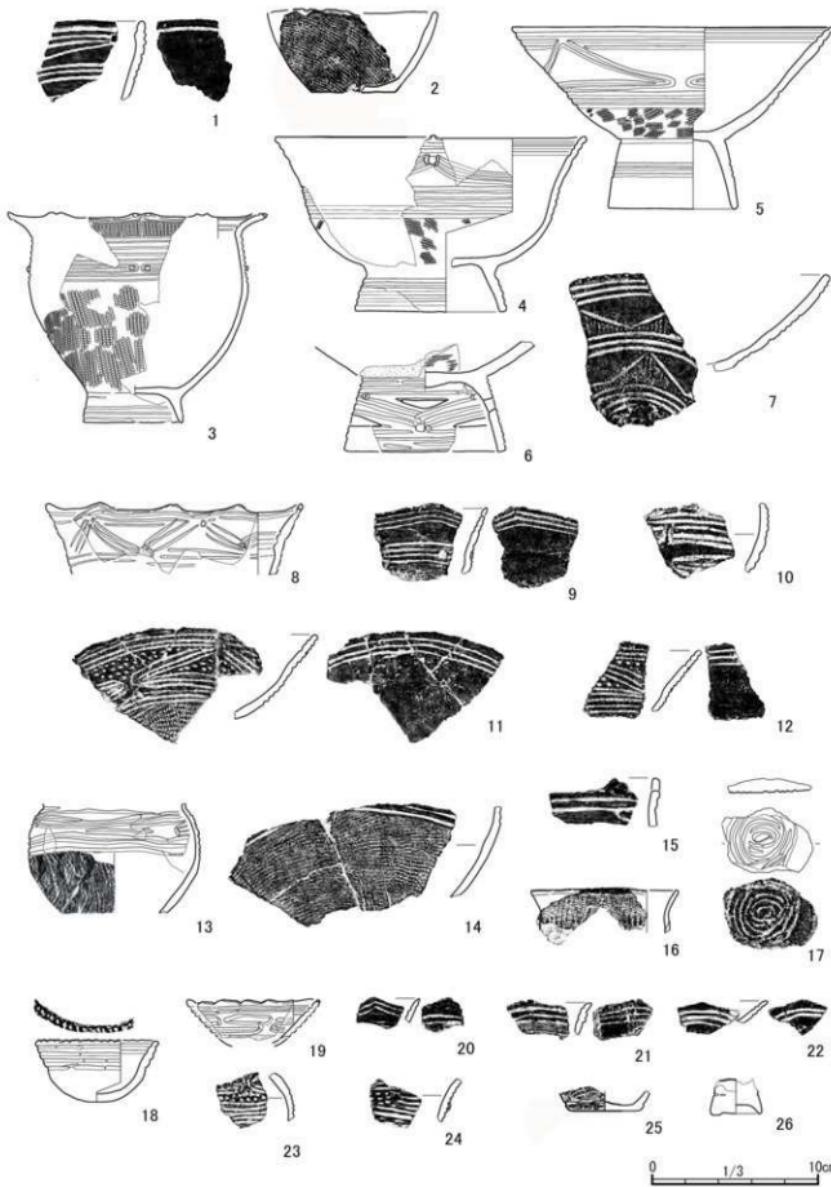


図 200 弥生包含層出土土器 (3)

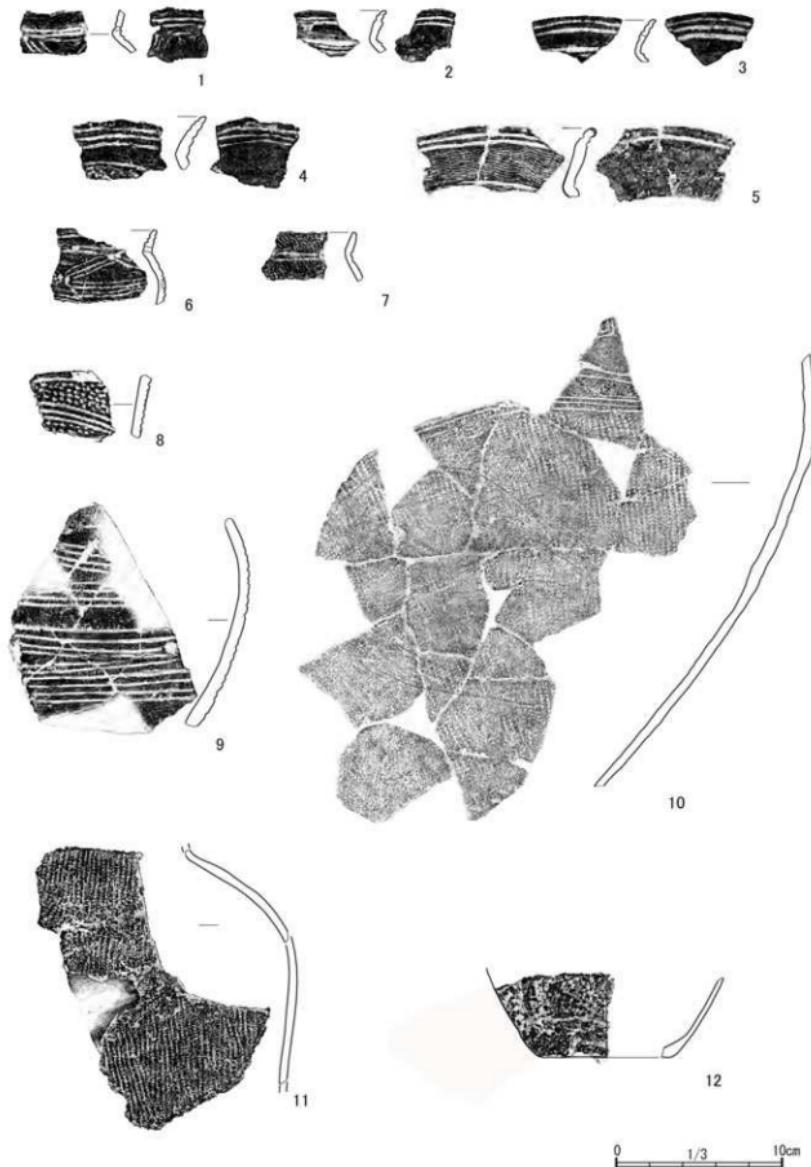


図 201 弥生包含層出土土器 (4)

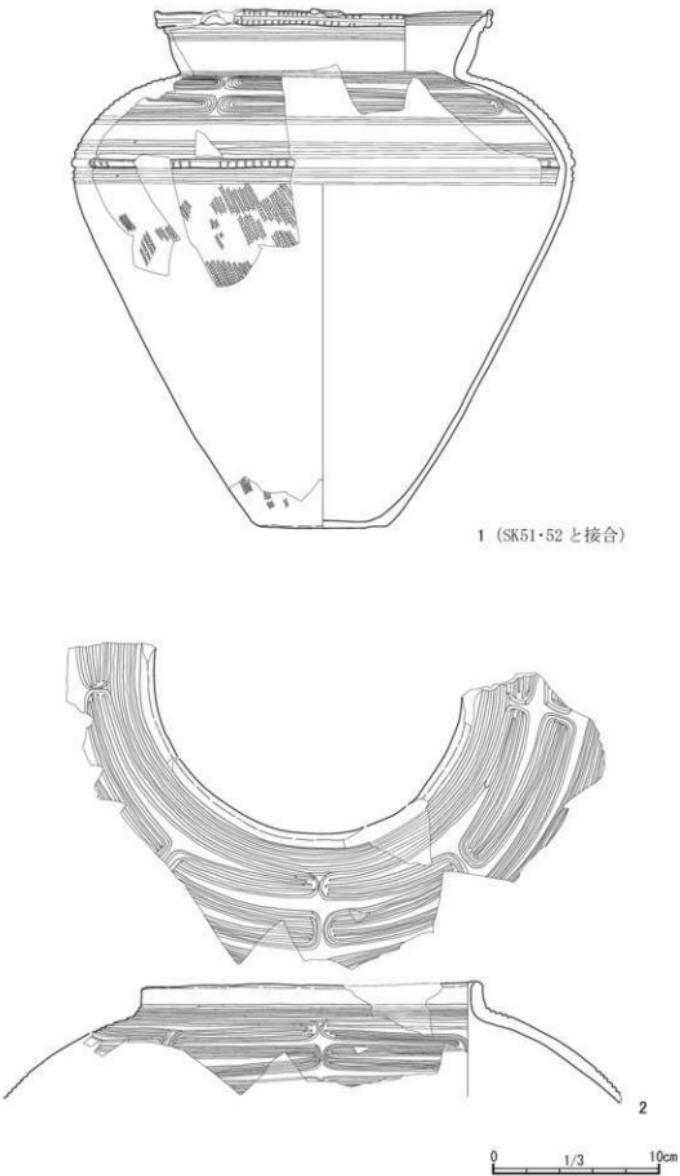


図 202 弥生包含層出土土器 (5)

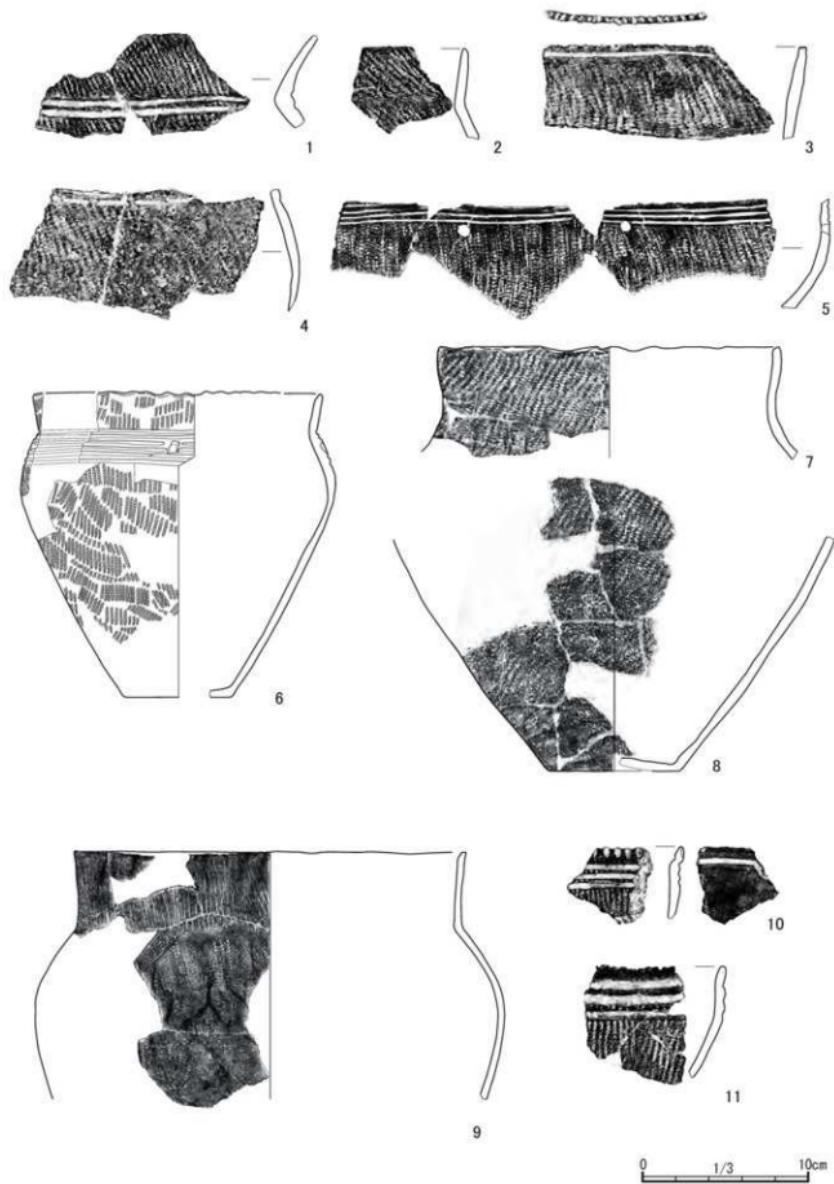


図 203 弥生包含層出土土器 (6)

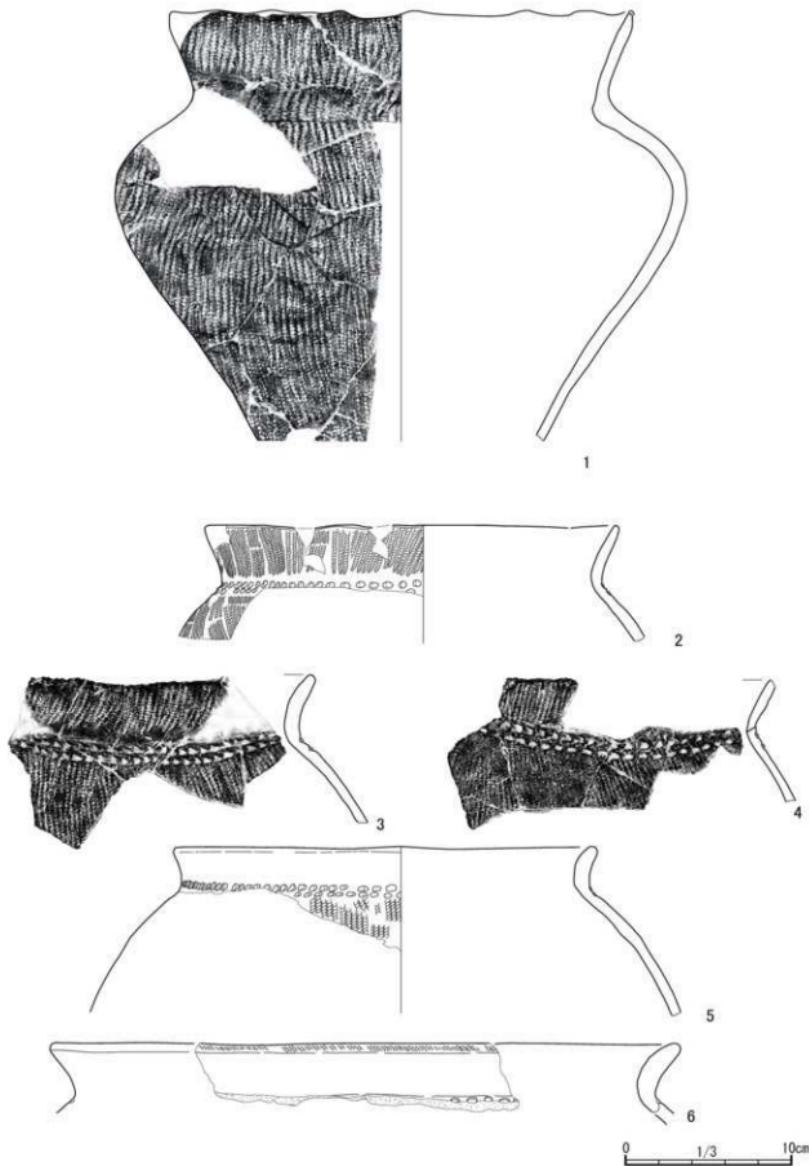


図 204 弥生包含層出土土器（7）

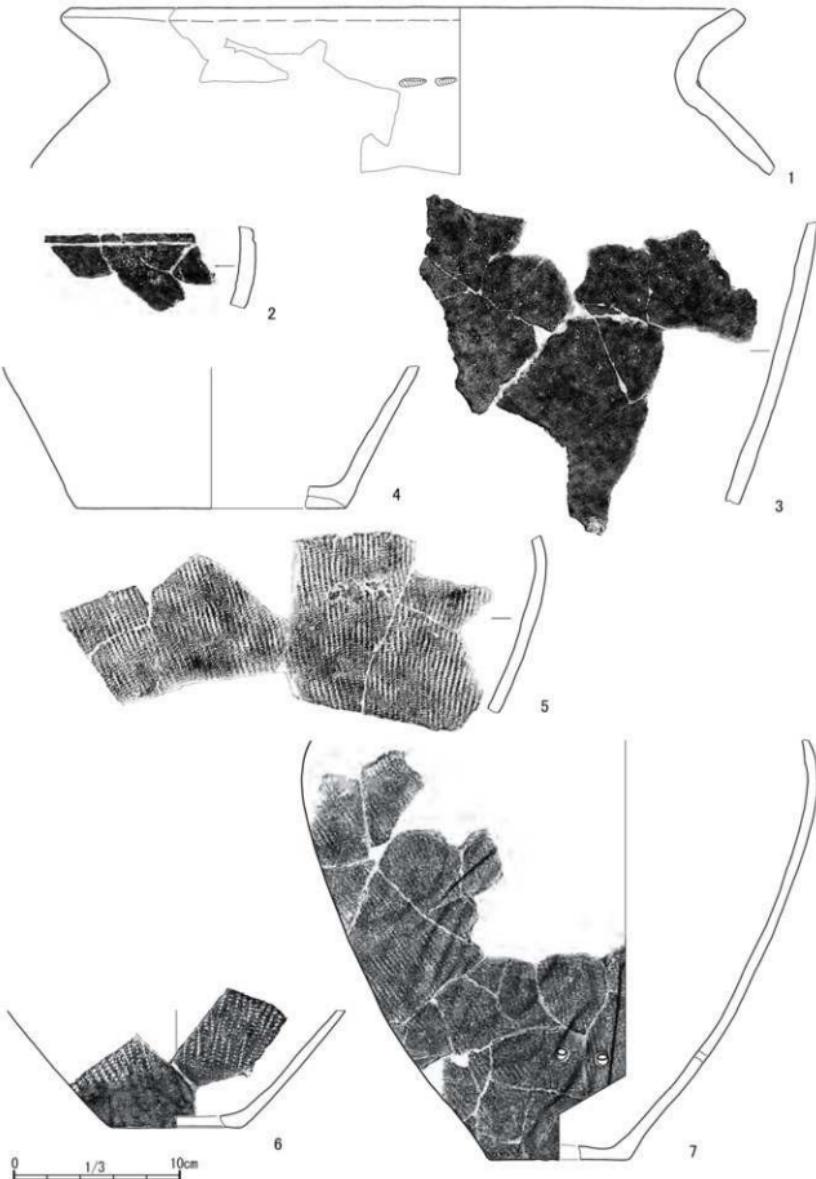


図 205 弥生包含層出土土器 (8)



図 206 弥生包含層出土石器（1）

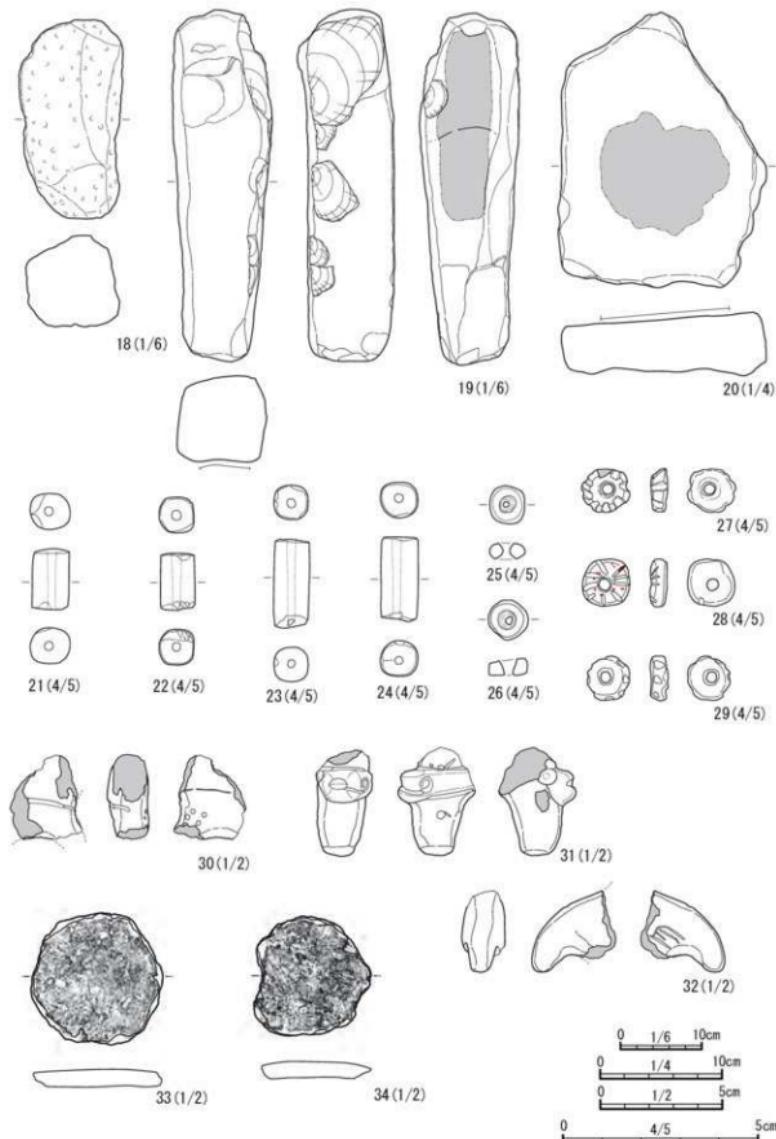


図 207 弥生包含層出土石器 (2)・土石製品

第3章 遺構外の出土遺物

薬師遺跡の遺構外から出土した遺物は、包含層から出土した遺物ともいえる。調査で把握した包含層は、包含層1層(包1層)、包含層2層(包2層)、包含層3層(包3層)、弥生包含層(弥包層)があり、これら包含層と基本土層の堆積順は、I層・擾乱層を除き下記に示した順に古くなる。そこでこの土層順にならい、時期的に新しい上位の土層から順に記載・掲載していく。ただし、「弥生包含層(弥包)」出土遺物は「削平範囲」に、「包含層2層」出土遺物は「盛土遺構」にそれぞれ帰属し、既に記載していることからここでは割愛する。

第1節 包含層1層出土遺物(第II層に相当)

- 弥生包含層出土遺物 → 「削平範囲」に記載・掲載
- 包含層2層出土遺物 → 「盛土遺構」に記載・掲載

第2節 包含層3層出土遺物(第III層上層に相当)

第3節 第III層出土遺物

第4節 第IV層出土遺物

第5節 第I層出土遺物

第6節 摆乱層出土遺物

第1節 包含層1層出土遺物

包1層は一部削平によって遺存していないが、盛土遺構と削平範囲を覆うように存在していたものと思われる。縄文時代晩期から弥生時代の遺物が主体であるが、土壤中にTo-aもしくはB-Tmを含むことから本土層は弥生時代から平安時代頃まで形成されたもので、基本土層第II層に相当するものと考えられる。

(1) 土器

包1層から出土した土器のうち、縄文時代後期2点、晩期中葉～後葉の土器、晩期末葉～弥生時代の土器を掲載した。晩期末葉～弥生時代の土器は器種ごとに掲載することとする。

【縄文時代後期】(図208-1・2) 1は深鉢形土器頭部片で、外面に粘土紐を貼り付け、さらに沈線も施文される。後期前葉のものと思われる。2は図244-1・図283-1と同一個体とみられる壺もしくは注口土器の胴部片で後期後葉のものとみられる。

【縄文時代晩期中葉から後葉】(図208-3～10) 3・4は浅鉢、5～8は鉢、9・10は壺である。6には羊齒状文、5・9には雲形文がみられる。10には丸みのある突起状の四脚があったようだが、2脚だけが遺存している。

【浅鉢・台付き浅鉢】(図208-11～図209-11) 図208-11～13は山形状突起のある波状口縁で、口縁内面に沈線が巡る。14～26は変形工字文が施文されるものである。図209-1～11は台部で、変形工字文のものと山形状もしくは波状のものがみられる。

【鉢】(図209-12～図209-23) 12は太い沈線で変形工字文が施文される波状口縁の浅鉢で、砂沢式に比定され、台が付くものと思われる。13は頭部が無文で、平行沈線で区画する鉢である。14は変形工字文が施文され、結節点に貼り付けがある。底部付近と口縁内面にもそれぞれ1条沈線が巡り、器面は丁寧に磨かれており、大洞A'式と思われる。15～20も変形工字文が施されており、16は口縁には工字文のように平行沈線を区切る縦沈線がみられるが、胴部には横位に展開する変形工字文的な三角文

が上下2段、天地逆さまで横に連なって描かれている。胎土や焼成はやや不良で、ミガキ調整もみられない。17~19の内面には沈線が巡り、17には刺突列も付加される。20は小ぶりな鉢で丸みのある胴部を有している。21・22は平行沈線と地文縄文の鉢で、23は縄文のみのものである。

【小型鉢】(図209-24~図209-29) 24は甕形土器を模した可能性があり、変形工字文と刺突で胴部を施文している。25~29は小杯もしくは盃ともいえるものである。25・27は変形工字文があり、26は口縁に2個一対の突起があってその下部には胴部の平行沈線を区切る刺突2個がみられる。また内面には、平行沈線が3条と2条の2段構成で、中位ほどまで施文される。28・29は台を有するもので、28は胴部・台部とも刺突が施され、29は平行沈線である。

【蓋】(図209-30) 30の1点のみ確認できた。側面は平行沈線が施文される。上面には多重沈線を十字に配置し、多重沈線の外側は縱と横をL字状につなげていき、矢羽根状に組み合わせるようである。

【壺】(図210-1~図210-14) 1・2・4は平行沈線が巡る口縁部片で、縦位短沈線が施文される。3は台部と思われるもので縦位短沈線がみられる。4は口端部に押圧がみられ、弥包層出土土器(図203-11)と接合した。5~14は比較的大型の壺である。5は頭部に沈線が巡り、6は口縁に押圧と沈線が巡る。7は頭部に2列の刺突列がある。8・9は口端部に縄文が回転施文されている可能性があるが、不明瞭である。9は外面頭部に1条、内面口縁部に3条の沈線が確認できる。10は3条の沈線が確認でき、弥包層出土遺物(図205-1~4)と同一個体と思われる。11・12は平行沈線と山形状文もしくは変形工字文の組み合わせと思われる。12・13は変形工字文の結節部に刺突あるいは貼り付けがある。14は壺底部で、図210-7と胎土・焼成が類似する。

【壺】(図210-15~図210-33) 15は胴部中央が屈曲をもって張り出す器形の広口壺で、最大径に多重沈線と小突起が巡る。胴部には刻みを伴う半円状の隆帯があり、隆帯下側には半円状の沈線が、隆帯上側に山形状の多重沈線が施される。山形状の頂点部は小突起が施される。頭部には幅の狭い無文帶があるが、その上下にも多重沈線で区切られ、口縁内面にも平行沈線が2条巡る。16は変形工字文がみられる。17~19・21は口縁部で、口縁部の19と胴部の20は別個体であるが、変形工字文と刺突文がみられる。22は胴部上半、23は細口壺の口縁である。24・25は壺に近い広口壺で、口縁に山形状突起があつて、地文縄文が施文される。26~33は比較的法量の小さい壺で、16~31は口縁部から胴部にかけてのもの、32・33は胴部下半から底部にかけての資料である。29~31・33には変形工字文がみられる。

(2) 石器

石鎚81点、石槍3点、石錐12点、石箋1点、両面調整石器5点、石匙10点、削器類42点、両極石器15点、二次加工剥片類55点、微細剥片21点、石核60点、磨製石斧2点、抉入扁平打製石器2点、敲磨器17点、砥石1点、擦切具1点、加工蹠2点出土し、39点図示した。これ以外に多量の剥片や自然蹠が出土している。剥片石器の出土重量は24,703.8g、礫石器の出土重量は15,365.5gである。

【石鎚】(図211-1~15) Ata(1~9)54点、Atb(10~11)7点、Aa(12~14)6点、Az(15)7点、Ay7点に分類でき、14点図示した。12は小型の石錐であり、縁辺は細かな鋸歯状を呈する。黒曜石製(14)は原産地分析の結果白滝産と判定された(第4章第7節)。

【石錐】(図211-16~20) Ca(16~19)8点、Cb(20)4点であり、5点図示した。

【石箋】(図211-21) 平面形状がバチ形であり、基部が折れている。

【石匙】(図212-27~32) 6点図示した。27はアスファルトが塗抹み部に付着している。28は縦長剥片を素材とし、左辺は鋸歯縁の片面加工である。Fb(30~32)は4点のうち、29は素刃、他は両面加工の刃部である。

【搔器・削器】(図211-22～26) Ga1(22～24) 3点、Gb1(26)37点、Gb2(25) 1点、Gb3が1点である。

【磨製石斧】(図212-33-34) 33は左刃に擦切痕がある。34は刃部断片である。

【半円状扁平打製石器】(図213-35) 破損品である。

【擦切具】(図213-36) 刃部に強い研磨がみられる。刃部断面はU字である。

【加工砾】(図213-37・38) 粗製石材を用いた石器である。37は凝灰岩製で中央を加工で抉らせている。38は安山岩製の両面加工である。

【砥石】(図213-39) 粘板岩製であるので、石棒類の断片の可能性もある。

(3) 土石製品

土製品が10点図示し、石製品は41点中8点図示した。

【ミニチュア土器】(図214-1・2) 1は無文の壺形である。2は沈線が重複して環を形成しており、浮線渦巻文的な文様モチーフである。昭和35年調査の薬師II号遺跡において、浮線渦巻文を持つ広口壺が出土しており、本資料も断面形状からも、これに類する壺形土器と思われる。

【土偶】(図214-3～7) 3・4は頭髪部である。3は赤彩で、4は表面に回転縄文がみられる。5・6は肩部である。5は剥落している。刺突と沈線で文様が表現されている。7は下半身である。破断面から、粘土塊を絞って芯を作り出し、表面に粘土を塗っている。沈線と縄文で文様を表現し、股部に陰部を表現した環状の沈線がみられる。

【土製円盤】(図214-8) 無孔の土製円盤である。

【耳飾り】(図214-9・10) キノコ形と傘形があり、傘形は赤彩である。

【石棒類】(図213-40) 40は粘板岩製の石棒類の断片資料である。

【石製円盤】(図213-41) 表面が研磨されている。側面に敲打痕跡はなく、鋭い状態を保っている。

【玉】(図213-42～47) 42～44は両面穿孔の平玉、45は管玉である。他の管玉と比較して石材の質が粗く、穿孔の径が大きい。46・47は有孔石製品である。

(-) 弥生包含層出土遺物

本層は削平範囲の構成土であることから、出土遺物等は「削平範囲」の項(第2章第12節)に記載・掲載している。

(-) 包含層2層出土遺物

本層は盛土遺構の構成土であることから、出土遺物等は「盛土遺構」の項(第2章第11節)に記載・掲載している。

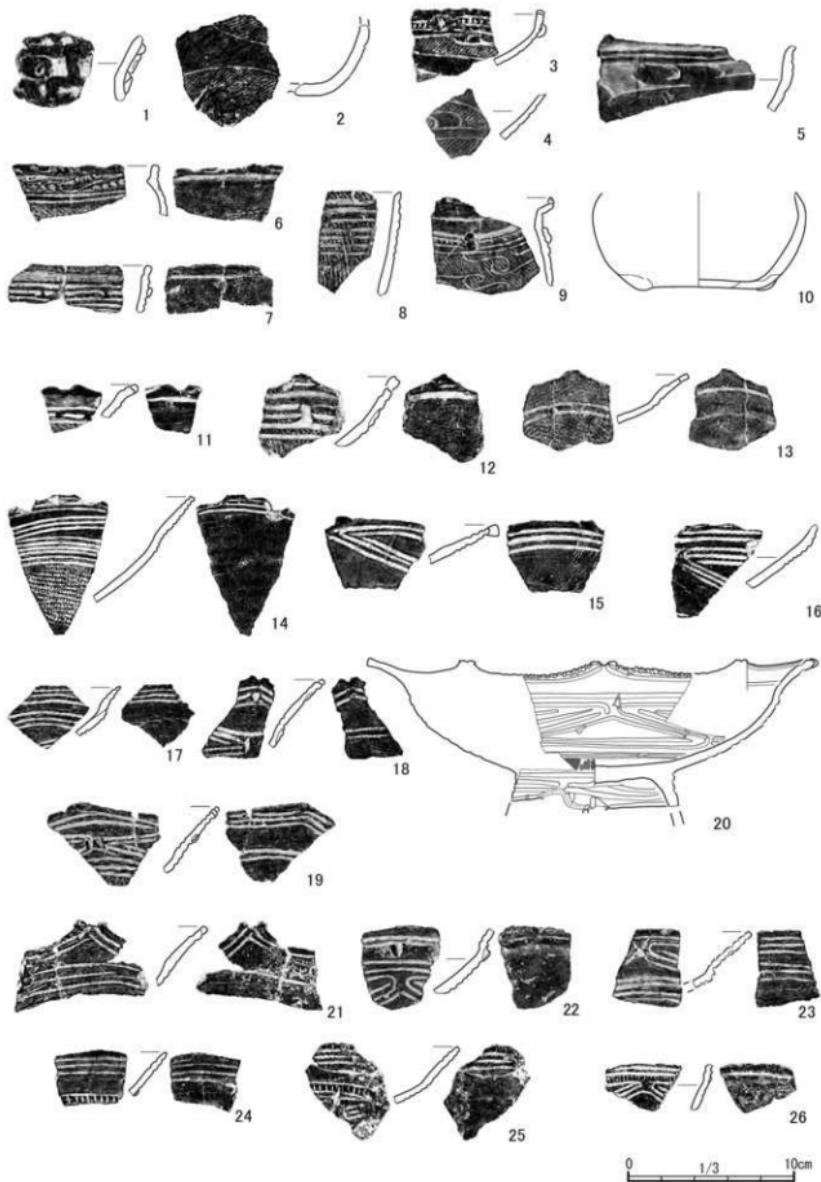


図 208 包含層 1 層出土土器 (1)

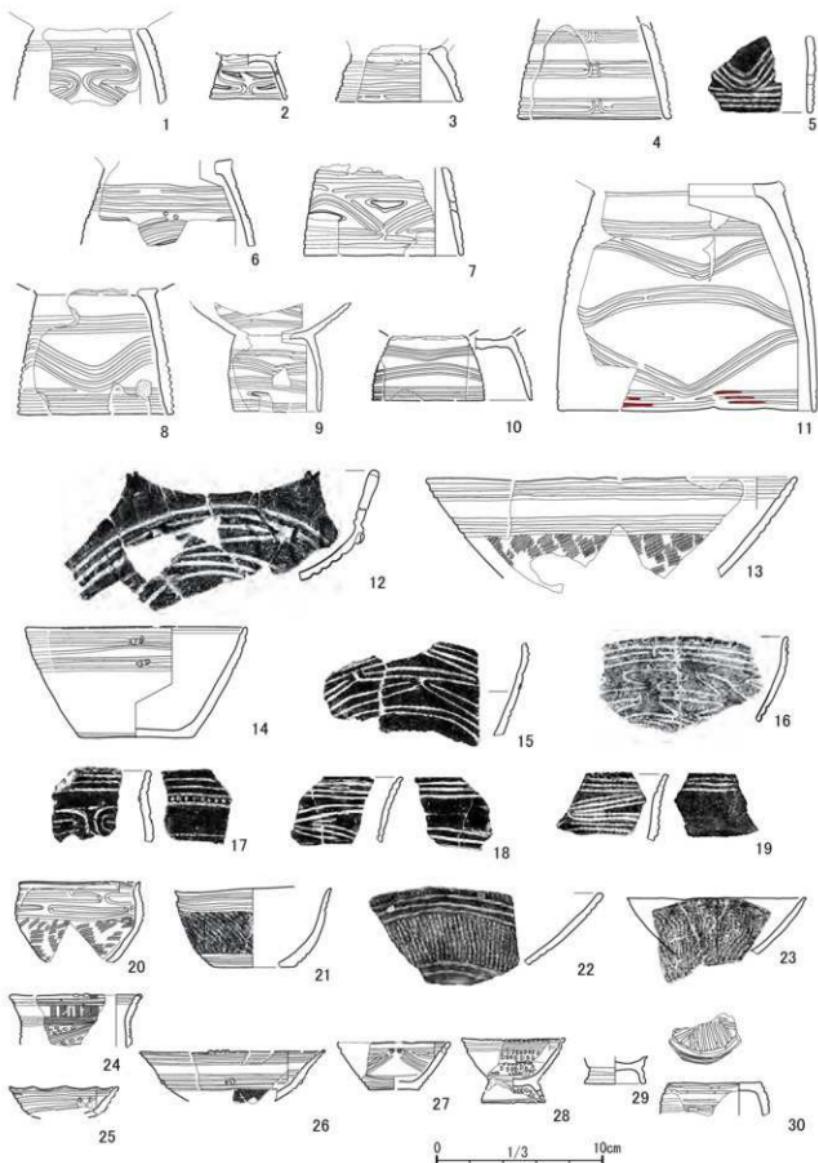


図 209 包含層 1 層出土土器 (2)

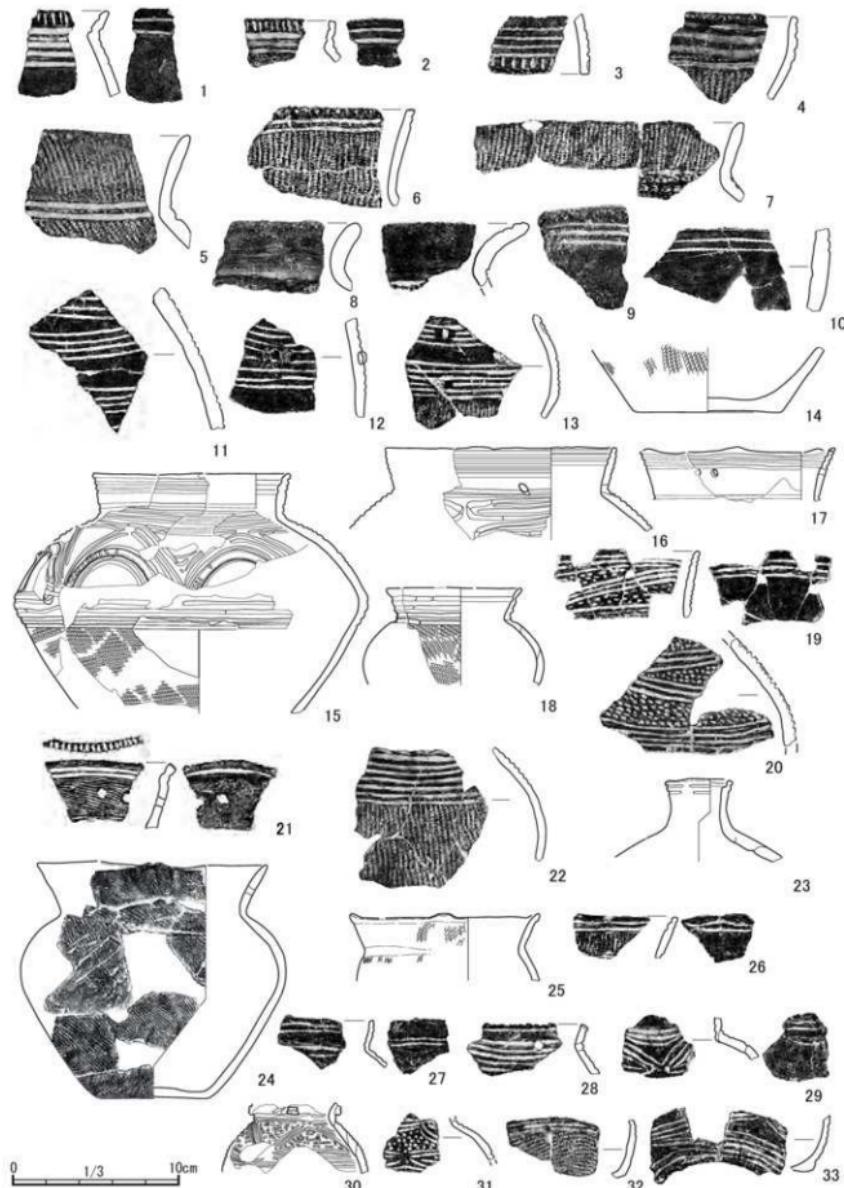


図210 包含層1層出土土器(3)

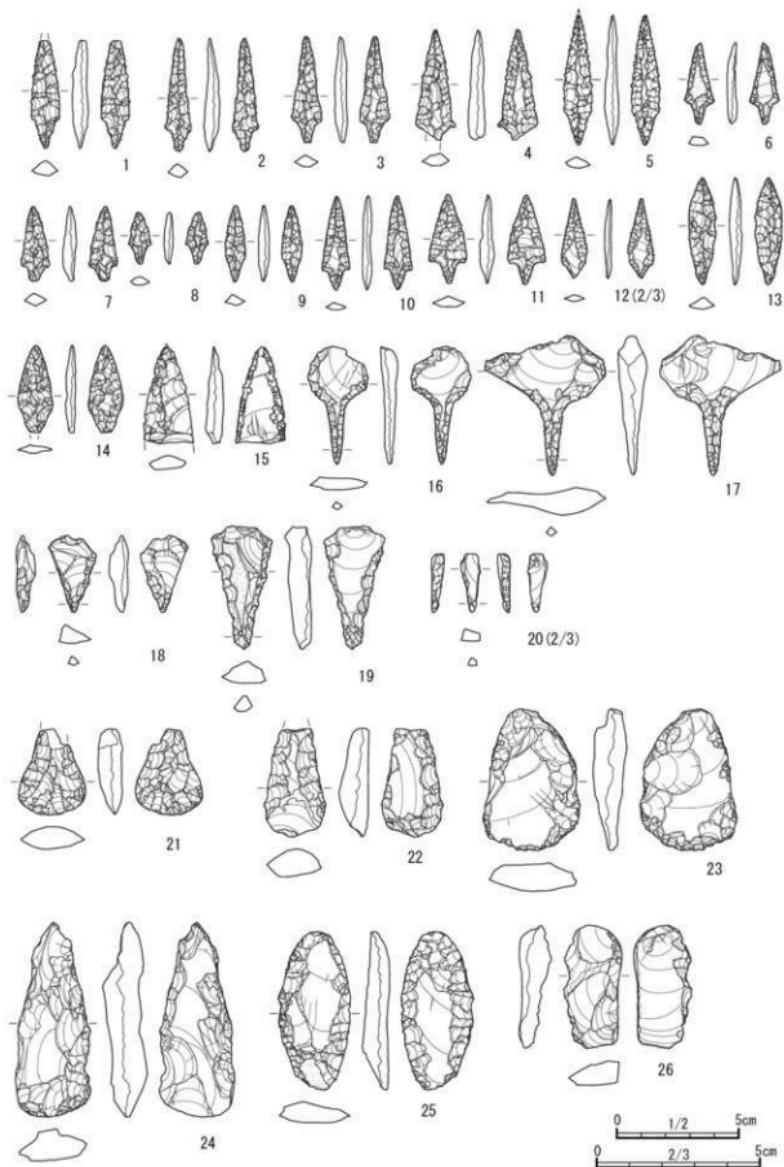


図 211 包 1 層出土 石器 (1)

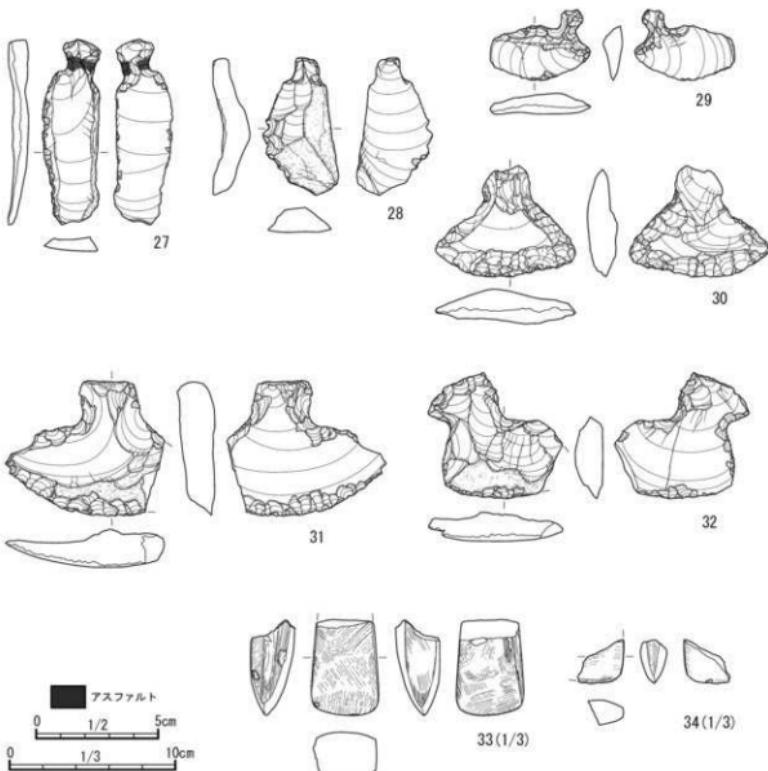


図 212 包 1 層出土 石器 (2)

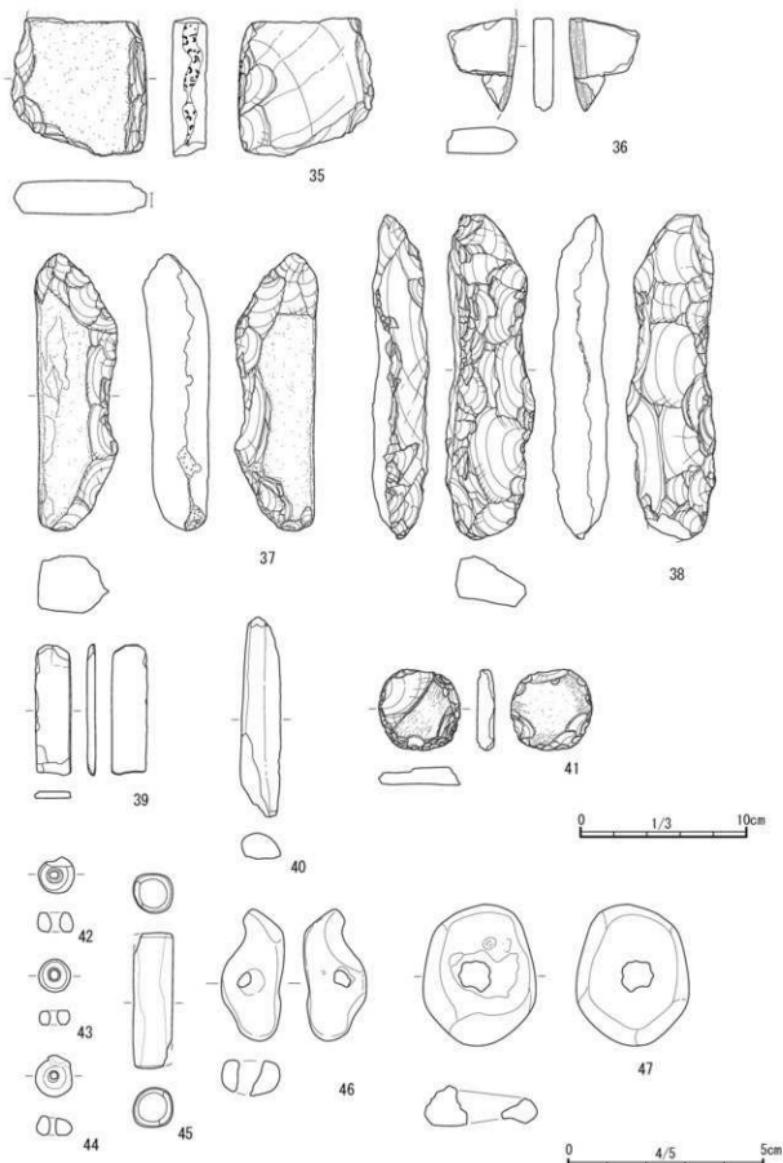


図213 包1層出土 石器・石製品(3)

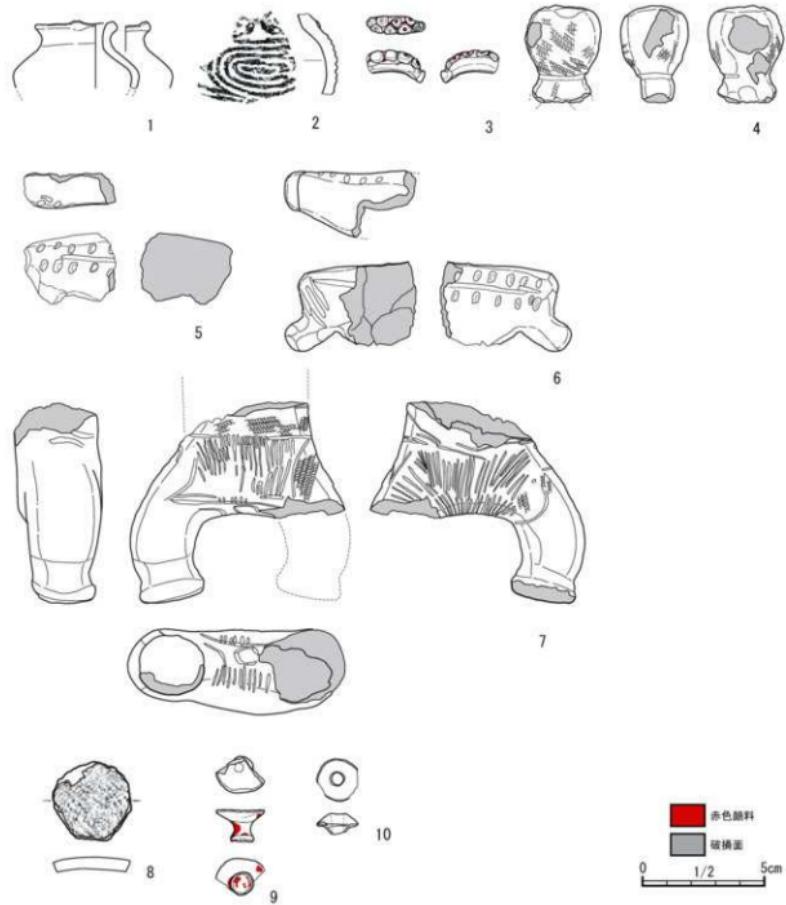


図214 包1層出土 土製品

第2節 包含層3層出土遺物

包3層は第Ⅲ層を母材とするものの、人間の営みによって変質した土層である。炭化物や焼土、ロームを混入し、さらに土器・石器等の遺物を多量に含んでいる人為的に形成された遺物包含層である。盛土造構の下位に広く分布しており、本層中に焼土造構が多数検出されている。縄文時代晩期前半の遺物が主体となっていることから当該期に形成されたものと考えられる。

(1) 土器

包3層から出土した土器のうち、縄文時代前期の土器1点と晩期中葉～後葉の土器を掲載した。

【縄文時代前期】(図216-1) 1は縄文時代前期と思われる深鉢形土器口縁部片で、内湾する口縁部に斜行する沈線が施文される半球状の貼付がある。

【浅鉢・台付き浅鉢】(図216-2～図219-10) 図216-2～図218-8が入組文あるいは雲形文を施す浅鉢、図219-1が入組文を施す台付き浅鉢、図219-2～9が地文を持たない浅鉢である。入組文あるいは雲形文を施す浅鉢は、平底のもの(図218-2・4)は少なく、底径が小さい丸底風のものが多い。口縁に連続突起があるもの(図218-2～図217-1)は少なく、平口縁のものが多い。平口縁のものには1個もしくは2個一対の突起を有するもの(図218-5～8)もみられる。また口縁の平行沈線間に、刻みを有するもの(図217-2～5、図218-1・2・5)と羊歯状文を有するもの(図218-8)もある。台付き浅鉢は1点で、口縁に連続突起が巡り、胴部には入組文が施される。台部中央は器形的に膨らみ、膨らんだ部分に貫通孔と三叉文が施される。地文が無文の浅鉢のうち、図219-2は丸みを持った底面から緩やかに開きながら立ち上がるもので、口縁にくずれた三叉文と沈線、口唇に刻み目を有し、波状口縁をなしている。3・4は器高が特に低いもので、3の口縁には4個の突起があつて口縁直下に1条の沈線が巡る。底部にはわずかに膨らむ四脚を有し、赤彩されている。5は平口縁で3個セットの小突起がつけられている。6は無文の平口縁の鉢、7～9は口縁に1～3条の沈線が巡っている。10は器高が低く底径がやや大きい平底の浅鉢で、頸部に段差があつて口縁に山形状突起とB突起がある。なお図217-1と図218-4の浅鉢2個体は、注口土器(図230-9)の近くから重なって出土した。

【鉢・片口鉢・台付き鉢】(図220-1～図221-6、図221-10～図223-10) 図220-1～図221-6が鉢、図221-11は片口鉢、図222-1～図223-10が台付き鉢である。図220-1は凹凸のあまりない鉢と思われ、口縁部に2段の玉抱き三叉文が施文され、縦位の短沈線も部分的にみられる。図220-2は丸底風の底部を持ち、口縁部には両端が延びた逆S字文が斜めに重なるように施文されている。3は胴部に入組文が施文され、強く屈曲して内湾する頸部には平行沈線と刺突列が、口唇には刻み目が施される。最大径のある肩部には突起がみられる。図220-4～6・8は3と類似する器形だが胴部文様帯がなく、口唇に刻み、口頸部に沈線が3条ほど巡り、その直下に突起がみられるものである。8は剥落しているが、大型の突起を有していたものと思われる。7・9は直線的な胴部を有するもので、7は無文帯の頸部直下に2個一対の突起があり、9は胴部に入組文が施文される。10は摩滅が激しいため底部と口縁部が接合できなかつたが、図上で復元したものである。小さめの底部から直線的に立ち上がって平口縁をなす器形で、底部には焼成前に先行された4個の貫通孔がある。図221-1～3は口縁に2～3条の平行沈線が巡り、4～6は地文縄文のみの粗製鉢である。図221-11は片口鉢で、土器成形時、乾燥する前に片口部分を引っ張り出して片口を作出したものと思われる。口唇と片口両脇口縁部にB突起を施している。無節縄文を地文とするが、口縁部分には意図的に施文しないように努めたようである。

図222-1は台部が直立して、胴下部が広く頸部がわずかにすぼまり、口縁が外反する器形を有する台付き鉢である。口頸部には弧線状入組文が施文され、口縁は押圧によって小波状をなしている。

2~10は口縁が強く内湾する器形の台付き鉢である。2は頸部に羊歯状文が施され、台部には透かしとなる貫通孔を抱くような玉抱き三叉文がみられる。3~10は口縁に平行沈線と刻み目が施され、3・6の台部は2と同じように貫通孔を抱くように三叉文が施されている。図223-1~4は平行沈線間に刻み目がみられないが、図222-3~10と同様、口縁が強く内湾する器形である。図223-5~10は口縁が内湾しないもので、5は6条の平行沈線が、6は頸部無文で胴部に楕円文が施文される。7~10は大型突起を有するものである。いずれも口縁部は無文帯となっており、7は地文も無文で、8~10は内面にも沈線や隆帯状の段差がある。10胴部には工字文が、台部には工字文と組み合わせた透かしが施されているようだが、遺存状況が悪くそのモチーフは不明である。

【深鉢・片口深鉢】(図221-7~10、図224-1~図226-3) 図221-7・9は口縁に平行沈線があって、9には刺突列も施文される。図221-8・9は炭化物の付着が激しく、図84-1・2と同一個体の可能性があることから片口深鉢の可能性がある。図224-1・2は接合しなかったものの同一個体とみられ、膨らんだ胴部から頭部で屈曲し、直線的に外反する口縁となる器形をなす。口縁には突起と刻みが繰り返されており、口縁部文様帶は2段で構成されて上段は連携する入組文が、下段は三叉文が施文され、頸部には平行沈線と連続短沈線が施文される。3は平行沈線に突起や短沈線が組み合わされており、一部工字文をなしている。図224-4~図226-3は粗製土器で、図224-4と図226は条痕文で他は縄文が施文される。小波状をなすもの(図224-4、図225-1)、突起を有するもの(図225-2~5、図226-1)、平口縁のもの(図226-2・3)がある。

【壺】(図227-1~図229-14) 図227-1~3・5・6が小型の無文のもの、図227-7~12が頸部に隆帯や突起を有するが無文のもの、図227-4・13~20が頸部無文で胴部に縄文が施されるもの、図228-1~4が精製の壺、図228-5~図229-5が精製の広口壺、図229-6・7は頸部が急激にすぼまる壺、図229-8~14は球脛の壺である。図229-1は口縁部に三叉文がみられる。図229-6は塗膜構造分析を行っており、その結果は第4章第5節にある。図227-13と14は、上下に重なるようにして出土した。図227-16内から出土した炭化物を年代測定した(第4章第2節2)。

【注口土器】(図230-1~図230-9) 図230-1~3は三叉文もしくは入組文が施文されるようである。図230-4~7は文様が施文されないが、口縁部には突起がみられる。6と7は同一地点から出土しているが接合しなかったため、別々の実測図で掲載している。8・9は入組文やX字文が施されるものである。1・2・4・6・7の4個体(6・7は同一個体)は、ⅢJ-57グリッド内の同じ小グリッドからまとめて出土したものである。5も近接する小グリッドからの出土であり、この周辺で注口土器を使用されたようである。

(2) 石器

包含層3層から石錐54点、石錐15点、石窓2点、両面調整石器7点、石匙11点、削器類28点、両極石器25点、二次加工剥片・石器断片29点、異形石器3点、微細剥片12点、石核54点、打製石斧2点、磨製石斧7点、半円状扁平打製石器1点、敲磨器151点、石錐7点、石冠1点、石皿類20点、軽石製品3点が出土している。これ以外に多量の剥片や自然礫が出土している。剥片石器の出土重量は17,698.2g、礫石器の出土重量は166,405.4gである。

【石錐】(図231-1~44) Ata(1~28)28点、Atb(29~32)4点、Aa(33~39)7点、Ab1点、Ad(40)1点、Az(41~43)7点、Ay(44)6点に分類でき、44点図示した。Ayの石錐未製品44は、継長剥片の両側辺に押圧剥離がある。

【石錐】(図232-45~54) Ca(45~46)4点、Cb(47~53)8点、Cc(54)2点、Czが1点であり、10点図

示した。54は素材剥片の打面などの形状を利用して錐部を作出している。

【石鎚】(図232-55) 55はバチ形である。56は矩形剥片を素材としている。

【両面調整石器】(図232-57, 58) 57や58などが該当する。

【石匙】(図232-59～図233-66) Faが7点、Fbが2点、摘まみ断片が2点であり、8点図示した。59はFa2の両面尖頭形態である。63や64は粗製のFaである。60は素材打面側は急角度の加工であり、素材末端側は両面加工でこちらが刃部と思われる。62は破損資料である。Fb(65・66)は2点図示した。

【搔器・削器】(図233-67～77) Ga1が4点、Ga2が3点、Gb1が17点、Gb3が4点である。

Ga(67～70)の中で、67は鋸齒状の片面加工の刃部である。69は両側叩折りで、尖頭状に基部を作り、急角度の刃部を作出した搔器Ga2である。70は横長剥片を素材とし、素材末端に基部加工を持つ。刃部に摩滅やにぶい光沢がみられる。

削器(71～77)として、71は両側急角度の加工である。72は縦長剥片を素材とし、左辺は鋸齒状の加工であり、右辺は小さな剥離である。右辺が刃部である。裏面にアスファルトが付着している。73は欠損資料である。

74～77はGb3素刃削器である。75・77は加工がされ、鋭い線辺が刃部であろう。76は左辺の下半部に急角度の鋸齒状加工がある。刃部は左辺の微小剥離痕がみられる線辺であろう。

【二次加工剥片】(図233-78) 横長剥片を素材とし素材末端はヒンジフラクチャーである。打面側は両面加工の尖頭状である。刃部の位置が推定できないので、二次加工剥片とした。

【微細剥片】(図233-79, 80) 79は摩滅が肉眼でもみられる。80は素材が綻折れを起こしている。

【両極石器】(図234-81, 82) 2点図示した。

【異形石器】(図234-83～85) 人形などの異形石器が3点出土している。

【石核・剥片】(図234-86～図235-97) 石核は54点、その中で黒曜石製15点であり、7点図示した。打面転移が頻繁に行われた資料が多い。剥片類の中には、アスファルトが付着したMb(86)がある。未図示資料の中にも、アスファルトが付着した剥片などが数点出土している。93～97は黒曜石製で、94・97は深浦産、他は出来島産である(第4章第7節)。

【打製石斧】(図236-1、2) 2点図示した。1は礫素材である。2は刃部が欠損している。

【磨製石斧】(図236-3～9) 3は片刃磨製石斧である。3以外は、完形品はない。5は刃部に剥離、6、7は基部、8は刃部断片である。9は磨製石斧の破損・再加工品である。右面に擦切痕が、左辺は長軸に沿って剥離がみられる。

【半円状扁平打製石器】(図237-10) 磨素材である。剥離で整形され、潰れた痕跡がある。

【(北海道式)石冠】(図237-11) デイサイト製の礫を素材としている。全面を敲打され、磨面1と2が形成されている。

【石錘】(図237-12～17) 6点図示した。12は切目石錘で、面取り加工が認められる。類例は秋田県智者鶴遺跡や八木遺跡がある。13～17は打ち欠き石錘である。扁平礫の長軸・短軸に加工がある。

【敲磨器】(図238-1～図248-113) Qa 112点、Qb 2点、Qc 28点、Qab 3点、Qac 4点、Qbc 2点であり、圧倒的に多いのはQaの凹石である。Qa(1～88)はデイサイトや安山岩の亜角礫を素材としているものが多い。凹みの位置は、表面、表裏、側面と様々である。Qc(93～106)は、93～99など珪質岩製のQcが多数出土している。少し抉りの入ったQc(100)がある。104は敲打痕から潜在割れが生じている。Qb(107, 108)は凹み石に比べ少ないが、赤色顔料の付着した資料がある。長軸に直交して線状痕がみられる。複合した使用痕を持つ敲磨器として、89～92は凹みと側面に敲打痕を持つ。92は回転穿

孔の2孔がある。111～113は、敲打痕と磨面をもつ。

【石皿類】(図249-114～図251-130) Ta1が9点、Ta2が4点、Tbが5点、Tcが2点である。

114は中高石皿である。機能面を逆さの状態で出土している。ガラス質安山岩を素材とし、敲打整形である。中高部分が平になっている。この資料には脚が作出されていない、津軽方面の野脇遺跡、亀ヶ岡遺跡、板柳の採集品などで出土している中高石皿も脚は作出されていない。一方で八戸方面では、是川遺跡や滝端遺跡のように脚がつく場合が多い。脚の有無は地域性と捉えられ、薬師遺跡の中高石皿は、津軽地方の一般的な中高石皿と思われる。なお中高石皿ではないが、五所川原市の觀音林遺跡第五次で不明瞭な3脚がつく縁あり石皿が出土している。

Ta1(115～120)は、ガラス質安山岩を素材とし、敲打整形である。115は大形品である。正位の状態で出土している。正面に磨面が平滑になり、擦痕がみられる。裏面に多数の凹みがある。なお掃き出し口のようなものは確認できなかったが、土井1号遺跡では掃き出し口のある石皿がある。

断片資料(116・117)の中で、116は平滑な磨面と、側面と裏面に凹みがみられる。

Ta2(121～124)は石材は安山岩であるが、Ta1と異なり緻密な石材の扁平礫を用いている。形状を変形するような加工はみられず、それぞれ平滑な磨面1を有している。121・122はくほんだ磨面を持つ。

125・126は砥石である。127は大形の扁平礫素材の台石である。128・129は凹みを持つ台石である。台石の130は蜂の巣状の凹みがある。

【輕石製品】(図251-131、132) 2点図示した。

(3) 土石製品

土製品46点図示し、石製品65点出土し、30点図示した。

【ミニチュア土器】(図252-1～11) 1は鉢形である。全面に沈線で文様が表現されている。穿孔が6個ある。2は壺形である。全面に赤彩である。底面に環状の沈線がある。3～5は手ごねである。6～9は高坏である。6は鼓形であり、沈線で連弧の文様がある。8は断片資料であり、刻みがある。10は香炉形土器の一部と思われる。赤彩である。11は円盤状で片方が凹んだ土製品である。

【土偶】(図252-12～図253-18) 12は大形の中実土偶である。表面が磨滅して不明瞭であるが、沈線で環状に陰部を表現している。沈線でパンツなどが表現されている。背中の肩部に3条の沈線がみられる。13は一部赤彩が残っている。14は頭髪部である。15は下半身である。沈線と繩文が施されている。これ以外に脚や腕部が出土している。16・17は脚部である。18は土偶の一部と思われるが、詳細は不明である。

【耳飾り】(図253-19、20) 20は環状の耳飾りである。沈線で文様が表現されている。

【土製円盤】(図254-21～45) 土製円盤の素材は繩文晩期土器片(繩文のみ)、円筒式土器(繩文のみ)、十腰内I式と思われる土器片(31～33)である。孔は両面穿孔である。30は中心からずれて穿孔途中の痕跡がある。44・45は、条痕文の土器片を利用している。

【土器片錐】(図254-46) 一対の抉りがある。

【石製円盤】(図255-1～図256-30) 石製円盤は、側面に敲き痕跡が顕著で平になっている資料が多い。7・30はアスファルトが付着している。23は表面に擦痕がみられる。

【岩版】(図256-31～図257-34) 31は、入組文モチーフである。33は擦痕が顕著である。34は加工がない。大形礫の脇から出土している。

【石棒類】(図257-35～44) 断片資料である。

【その他】(図257-45～49) 刻みのある勾玉(45)、ボタン状石製品(46)、入組文モチーフの石製品(47)があり、わずかに赤色顔料が付着している。48は緑色凝灰岩の礫、49はくびれ石である。

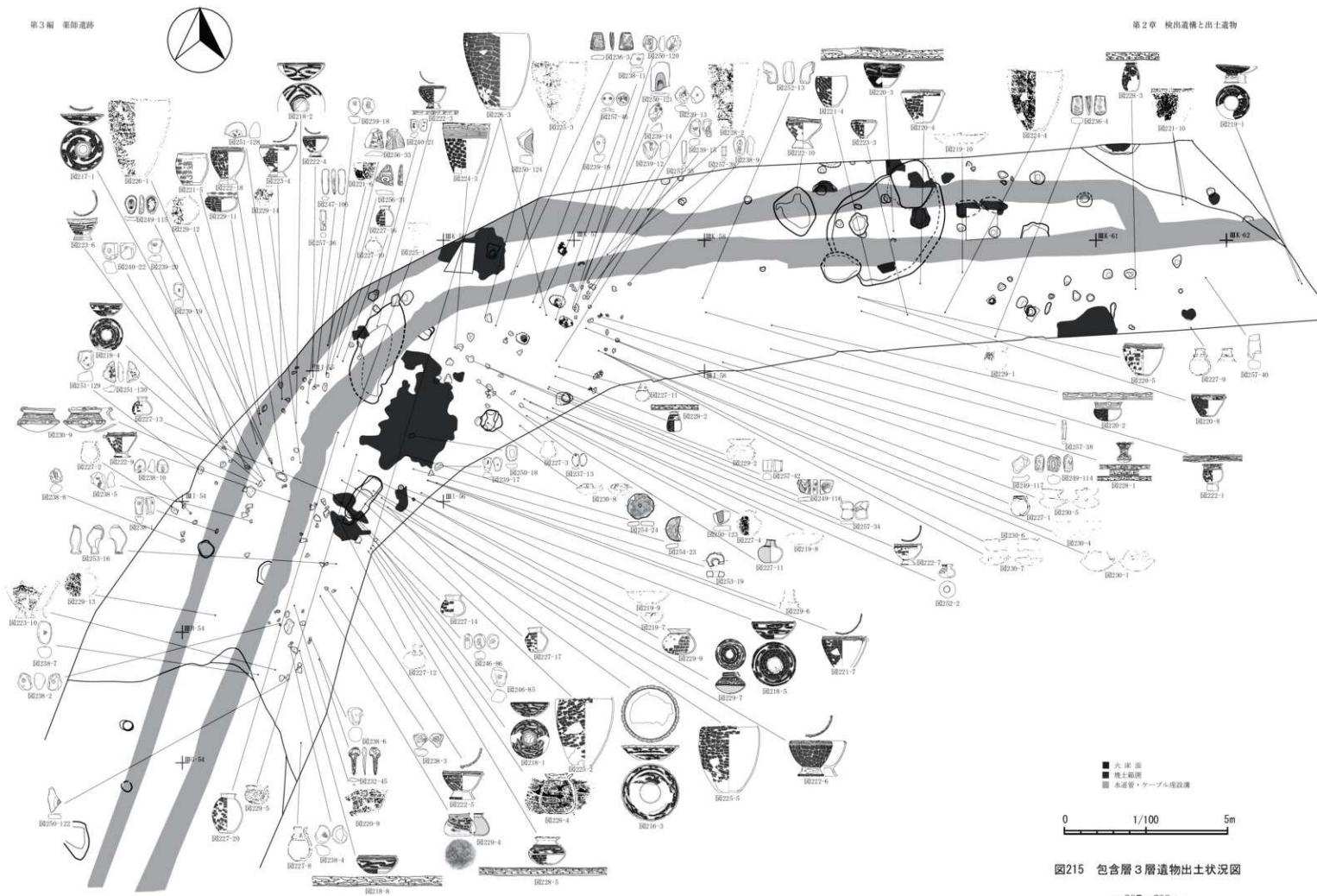


図215 包含層3層遺物出土状況図

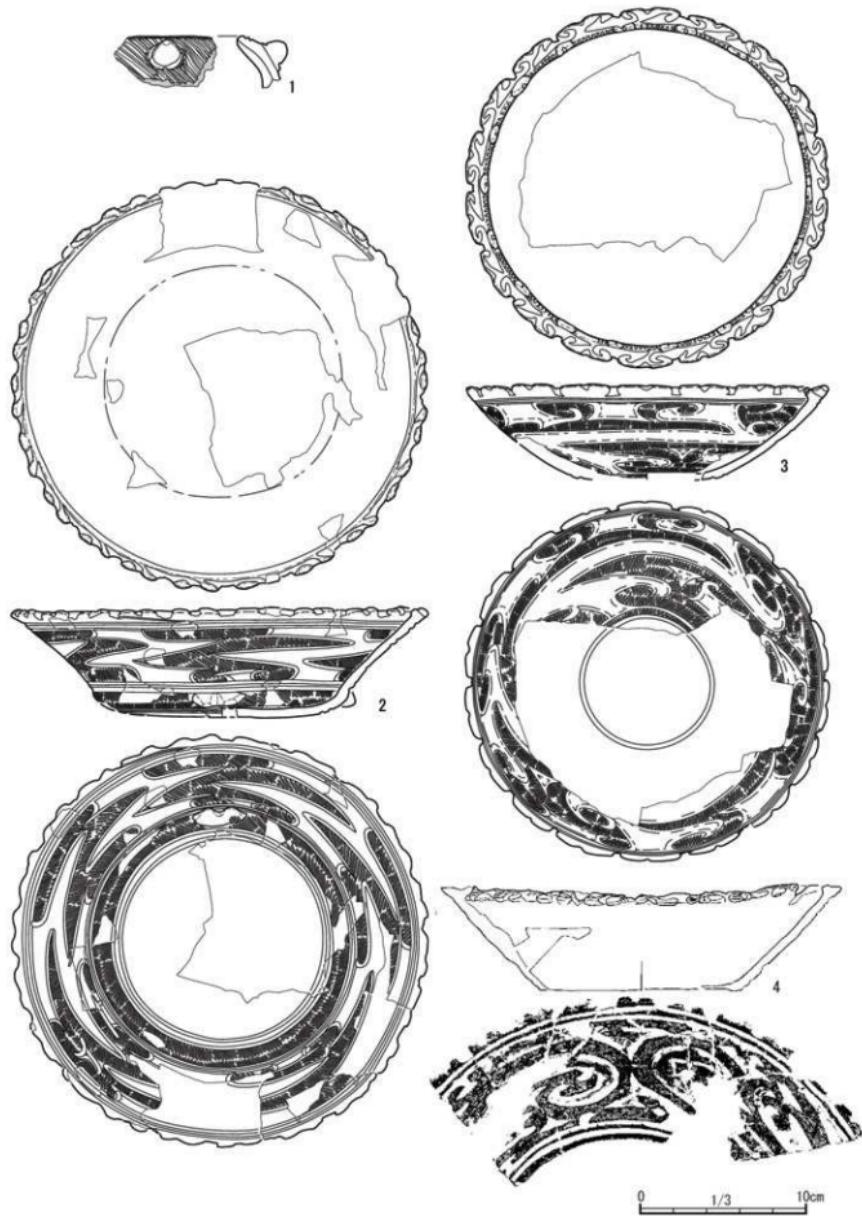


図 216 包3層出土 土器 (1)



図217 包3層出土 土器(2)

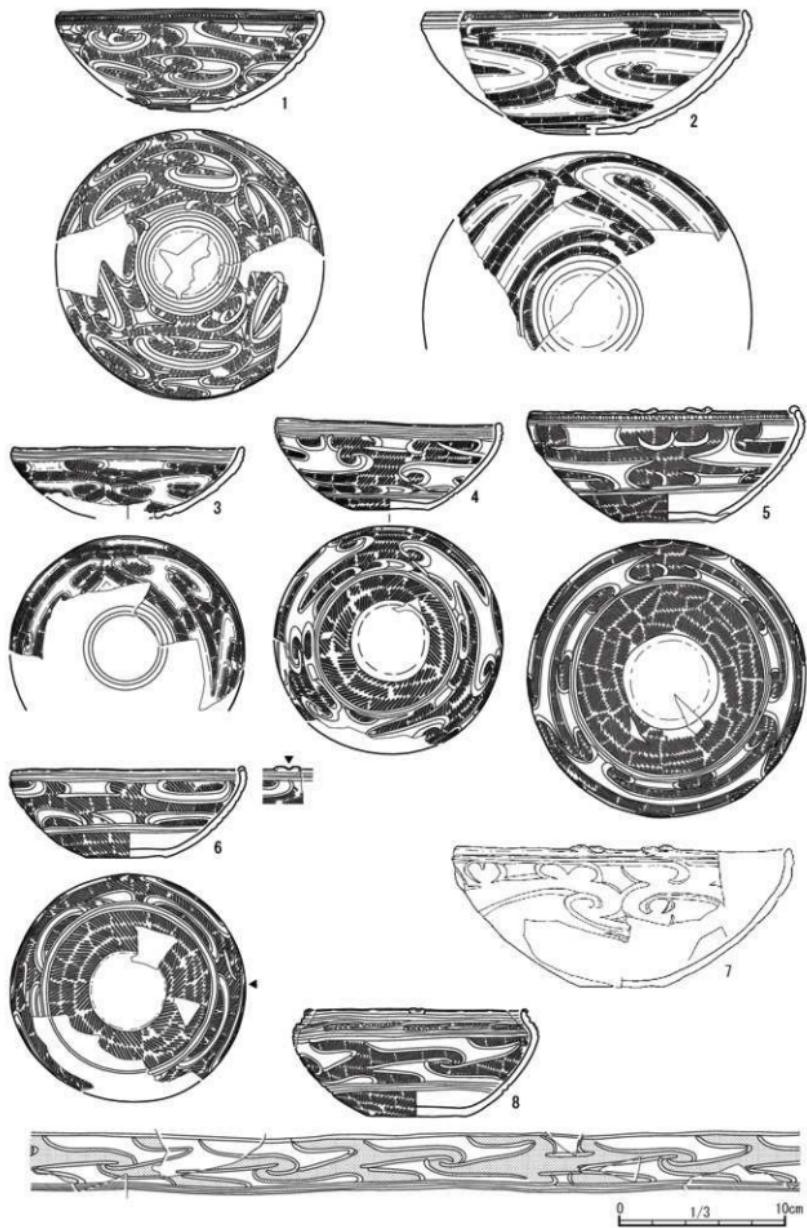


図 218 包3層出土 土器 (3)

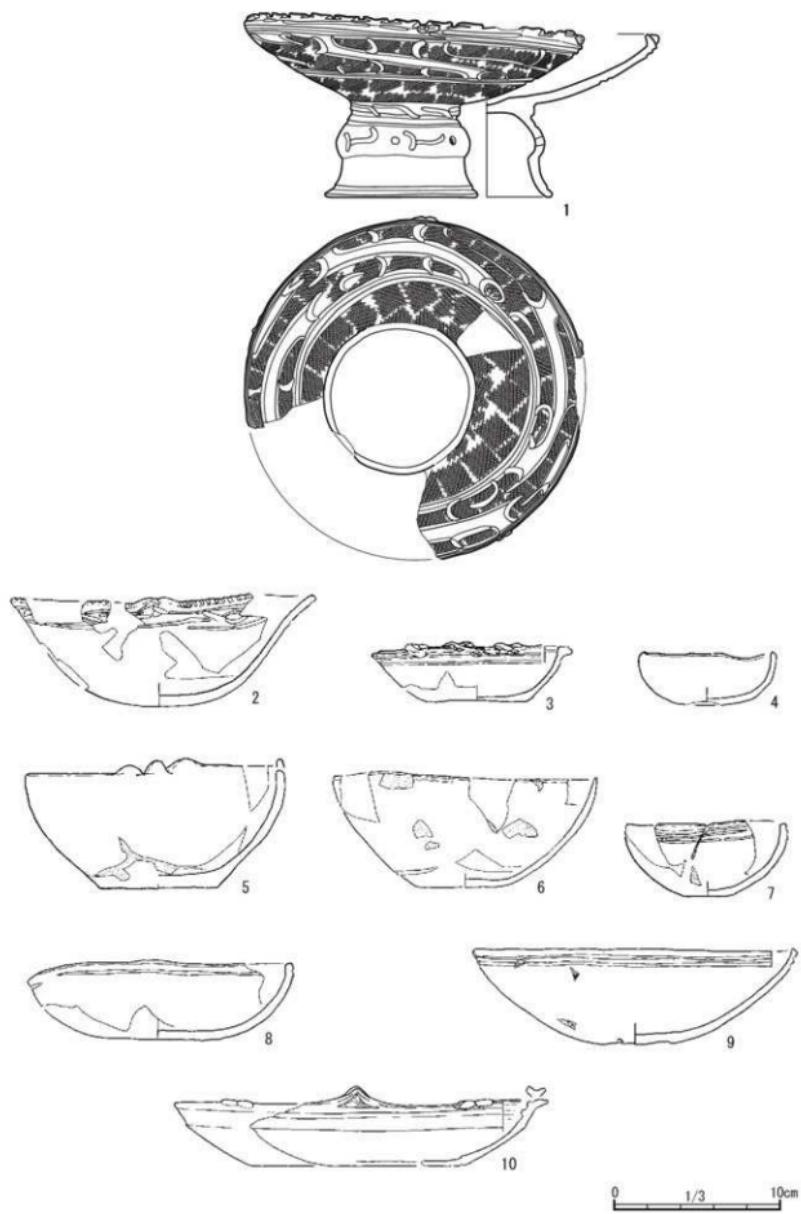


図 219 包3層出土 土器 (4)

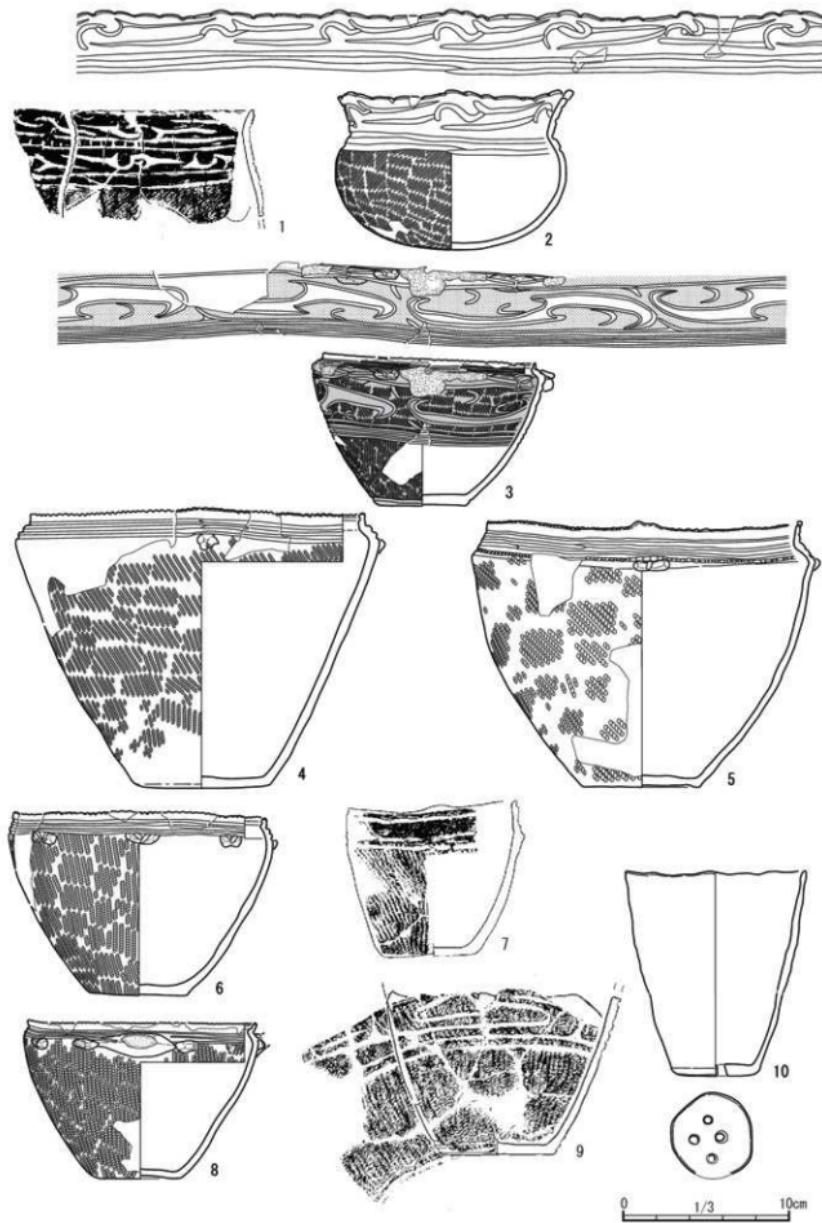


図 220 包 3 層出土 土器 (5)

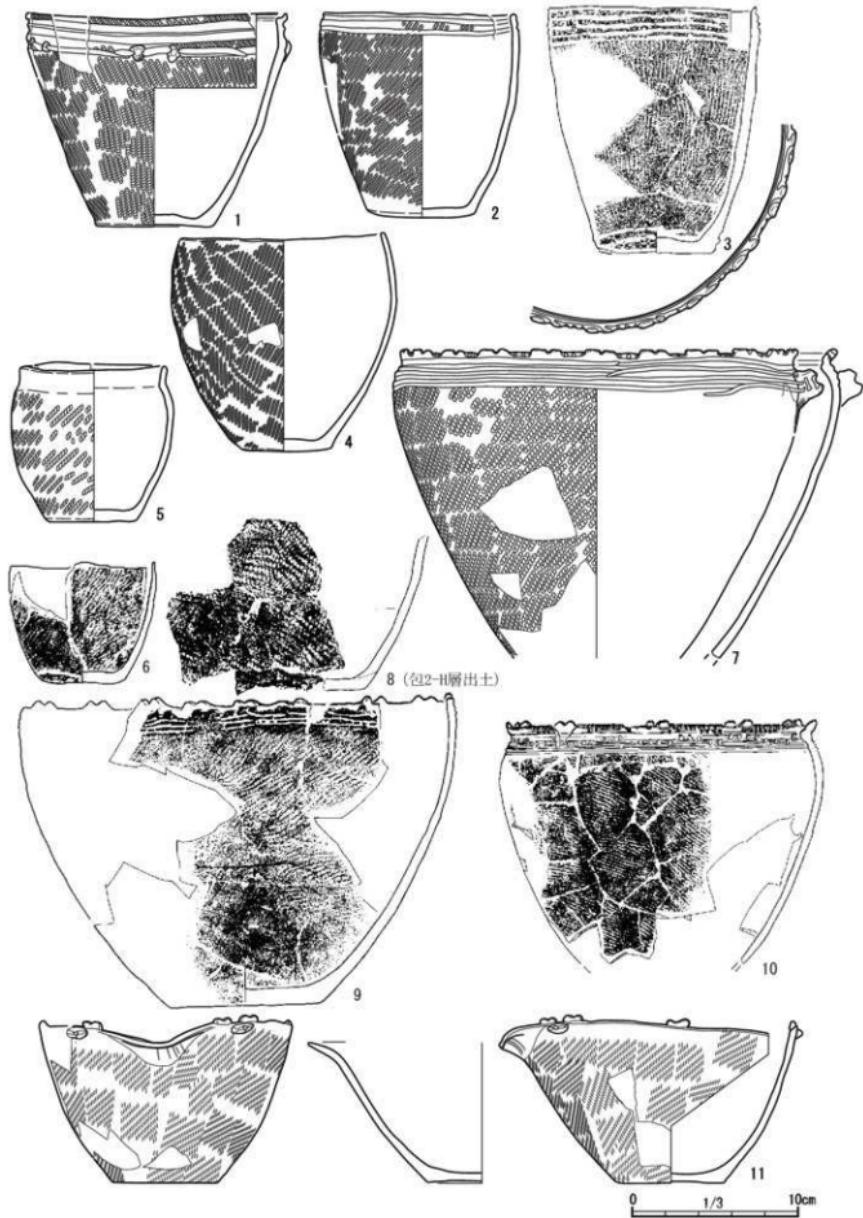


図 221 包 3 層出土 土器 (6)

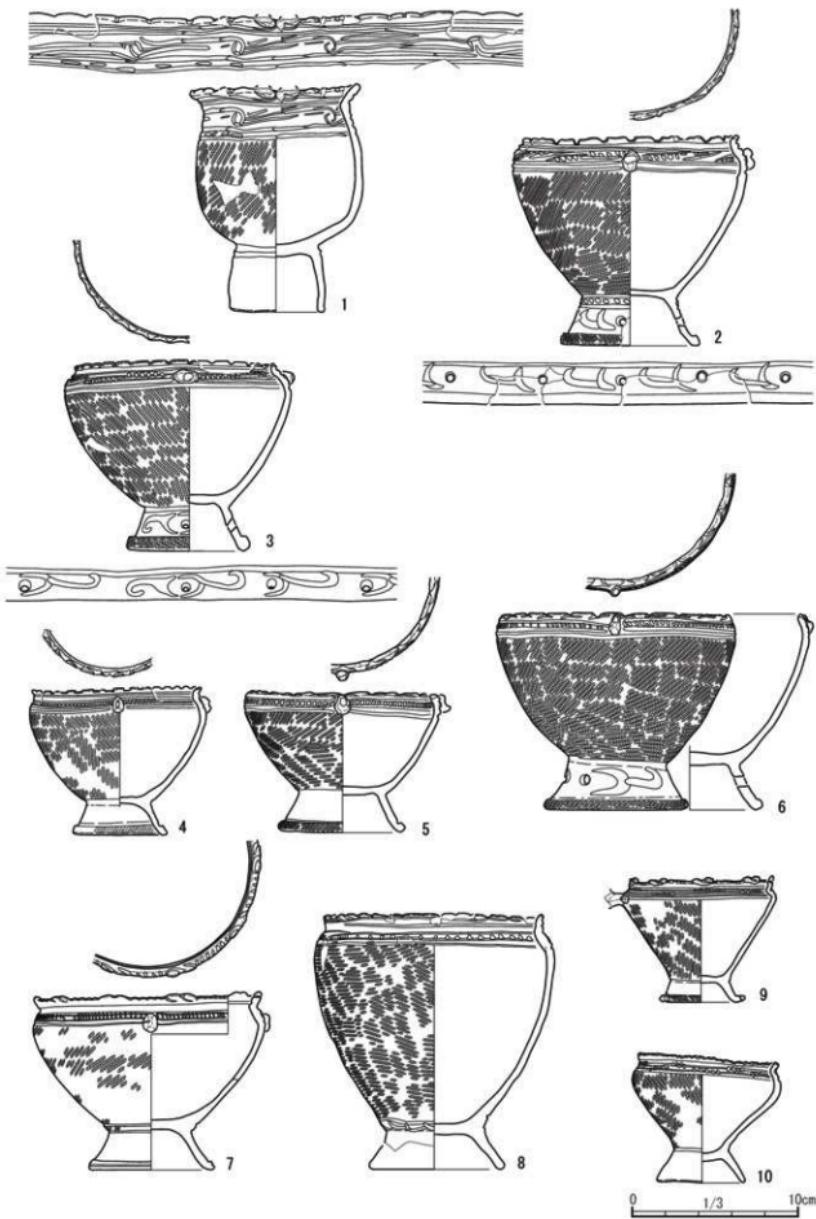


図 222 包 3 層出土 土器 (7)



図 223 包3層出土 土器 (8)

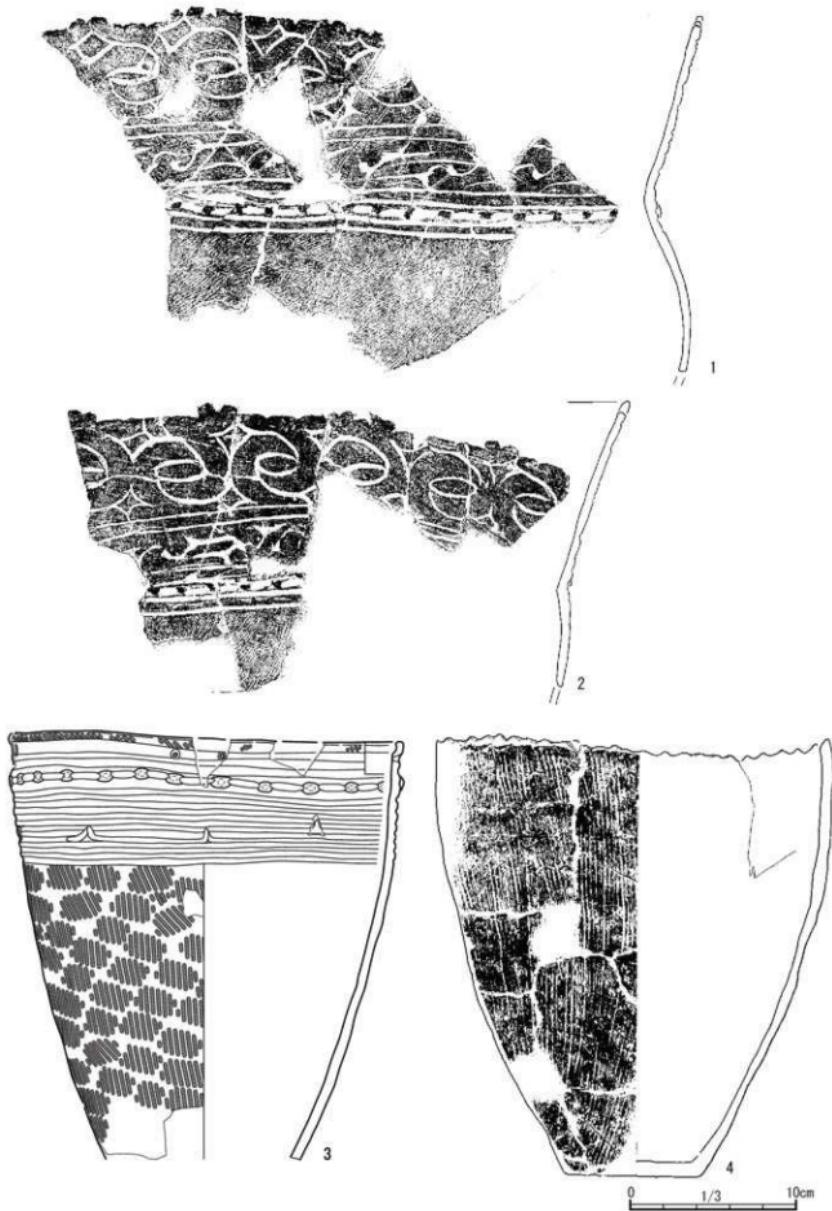


図 224 包3層出土 土器 (9)



図 225 包3層出土 土器 (10)



図 226 包3層出土 土器 (11)

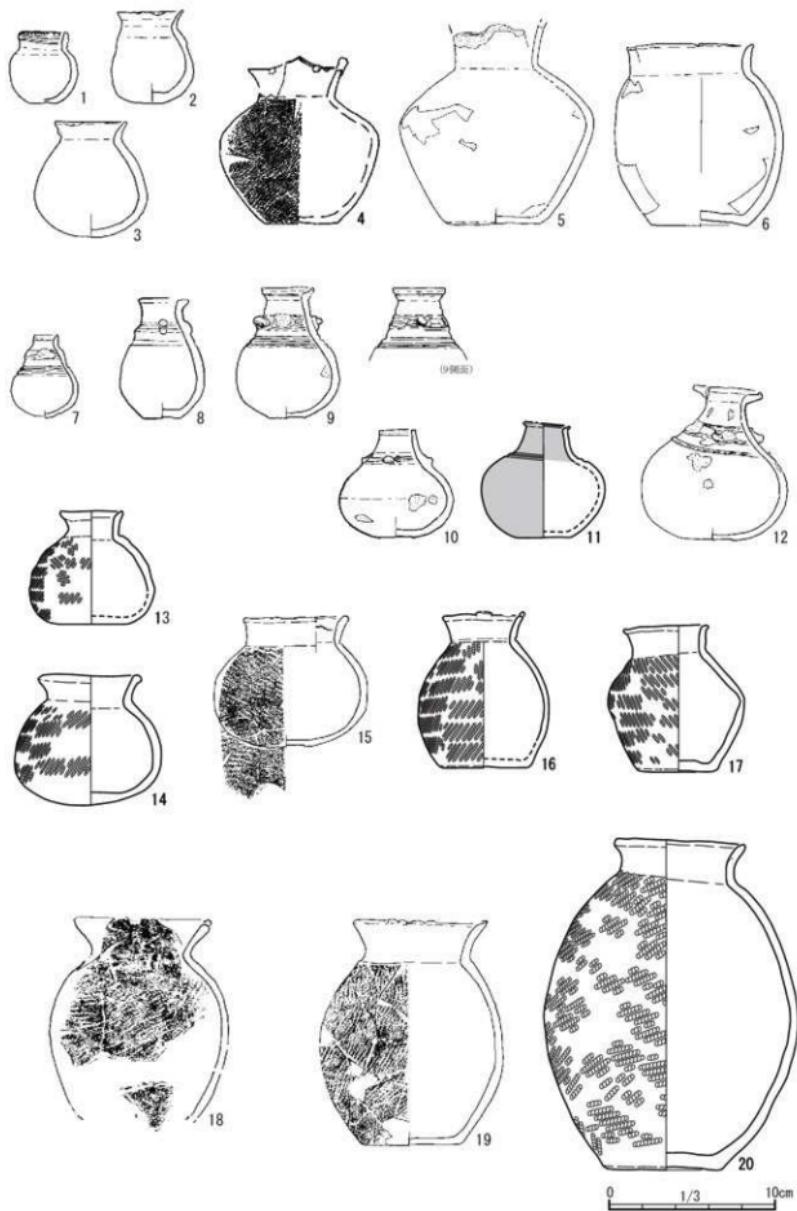


図 227 包3層出土 土器 (12)

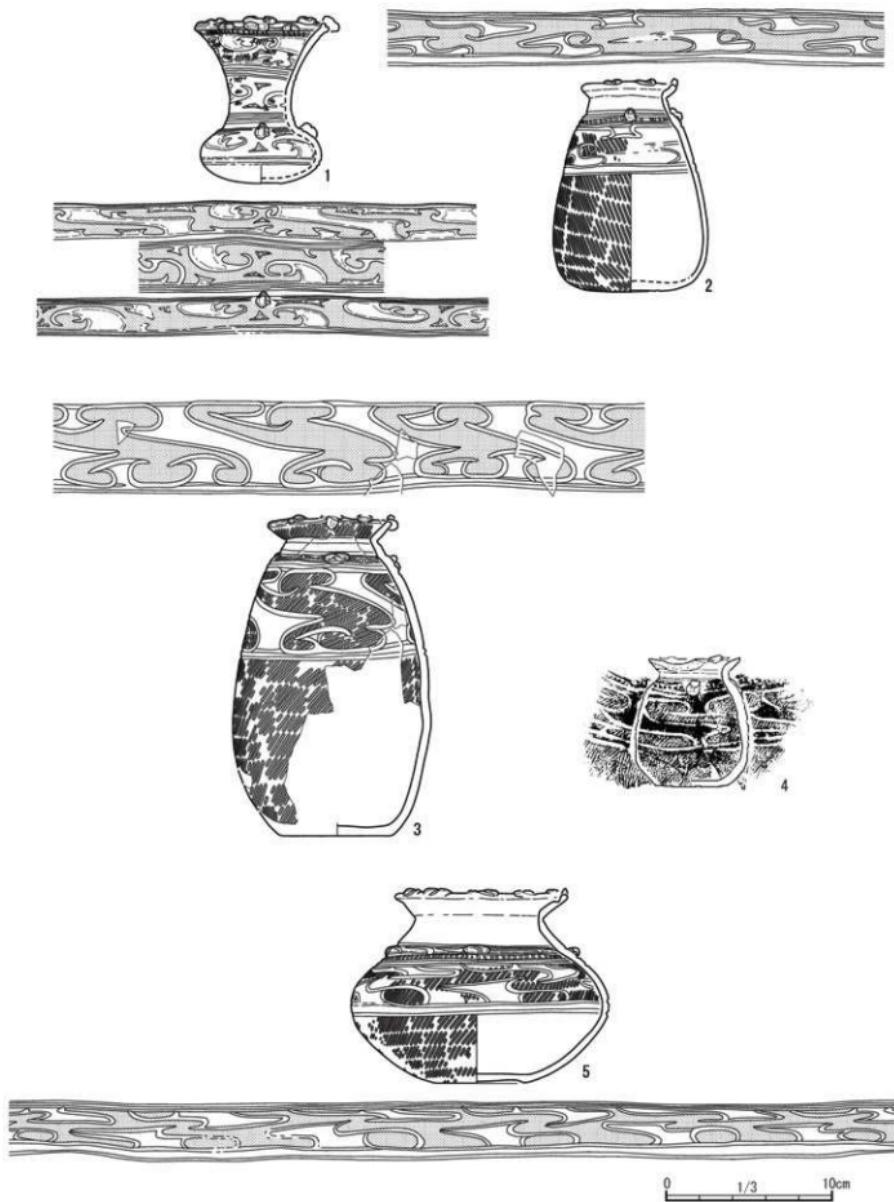


図 228 包3層出土 土器 (13)

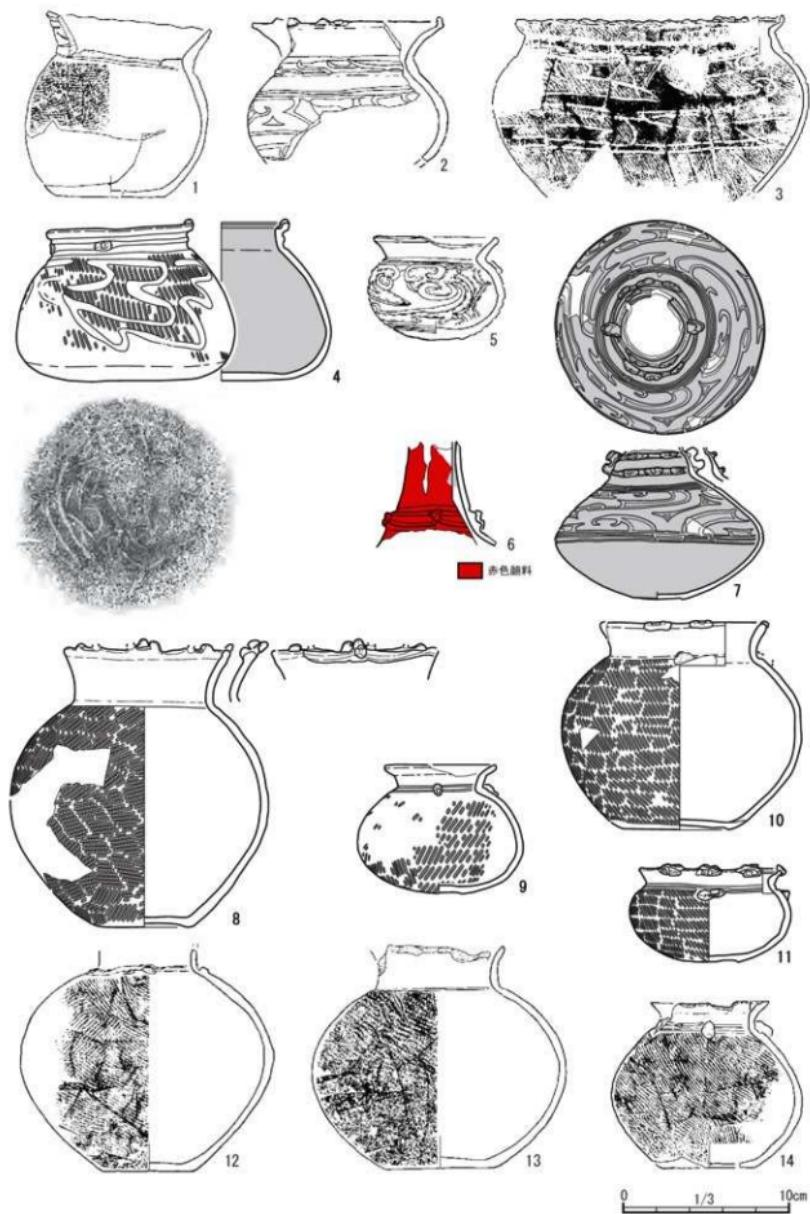


図 229 包 3 層出土 土器 (14)

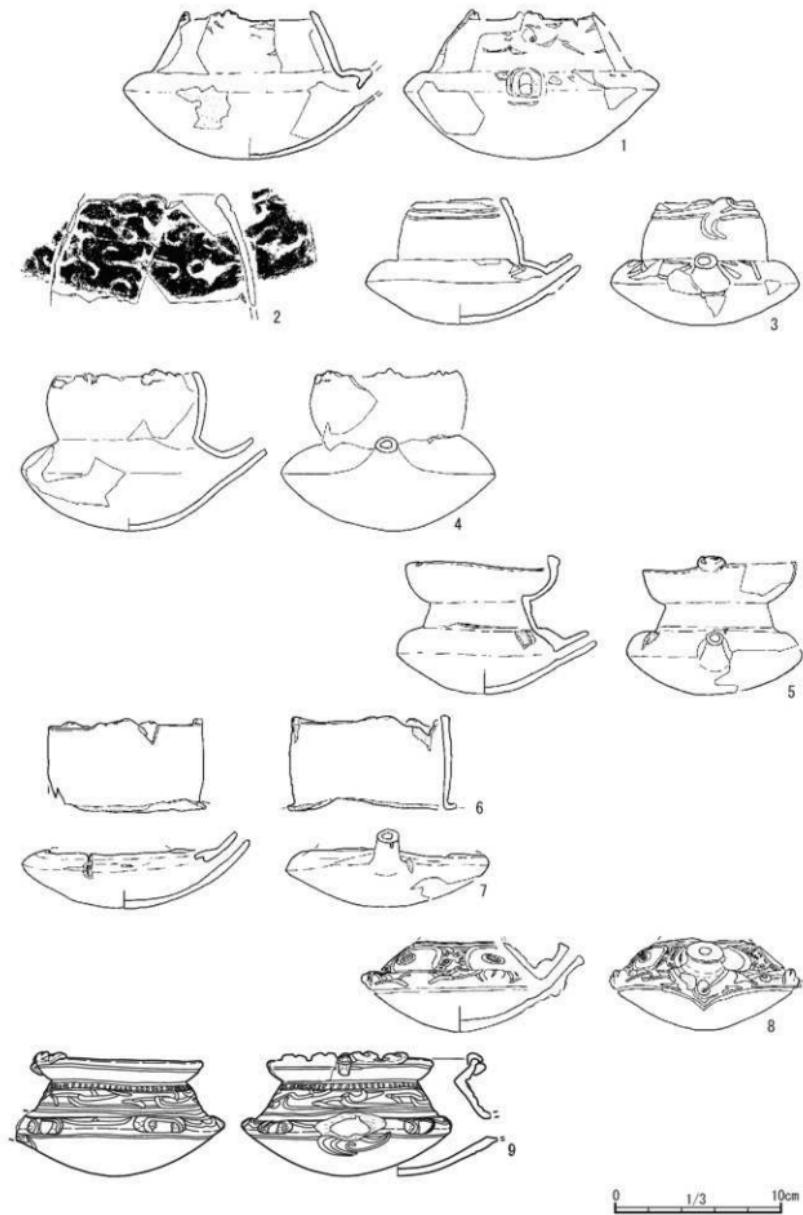


図 230 包 3 層出土 土器 (15)

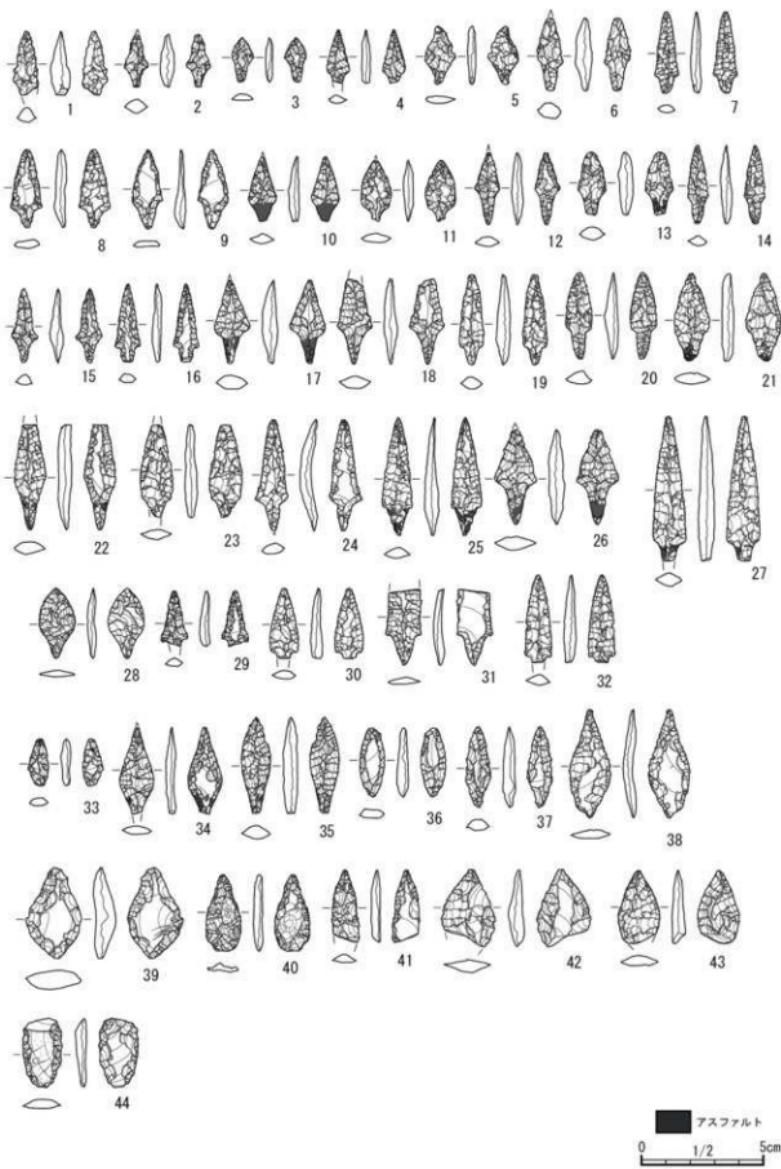


図 231 包3層出土 石器 (1)

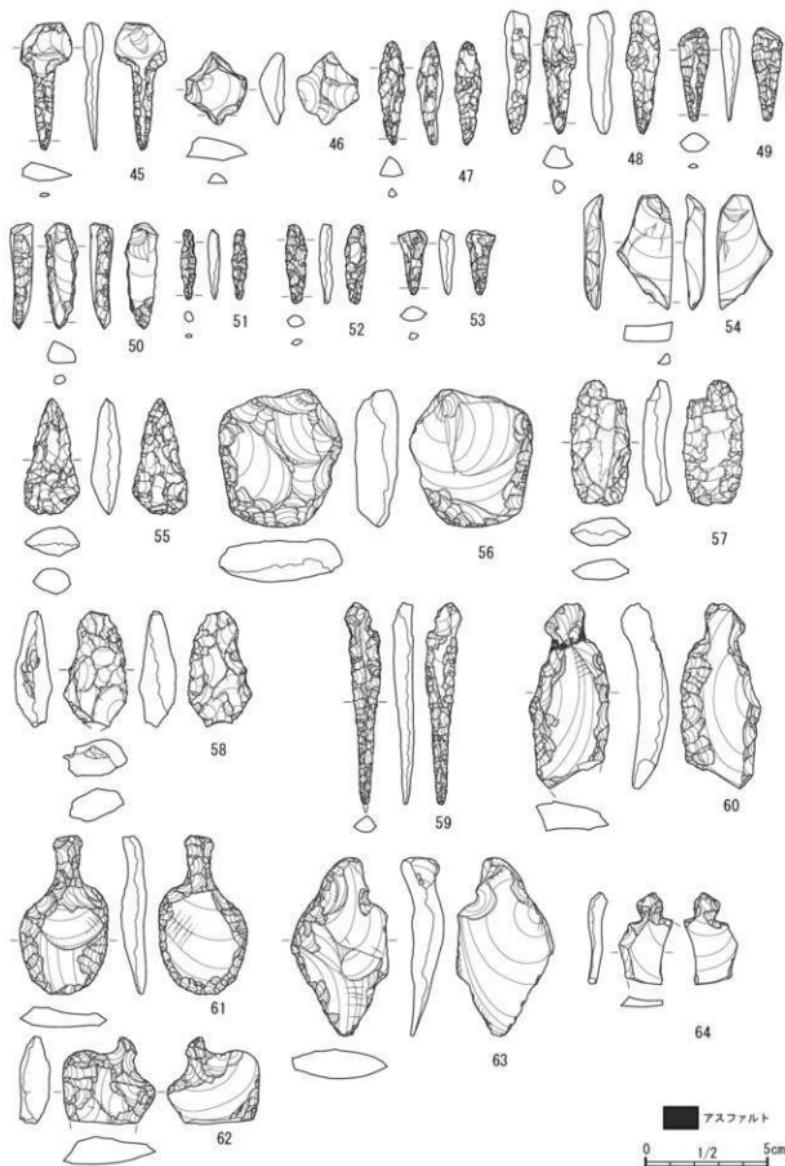


図 232 包3層出土 石器（2）

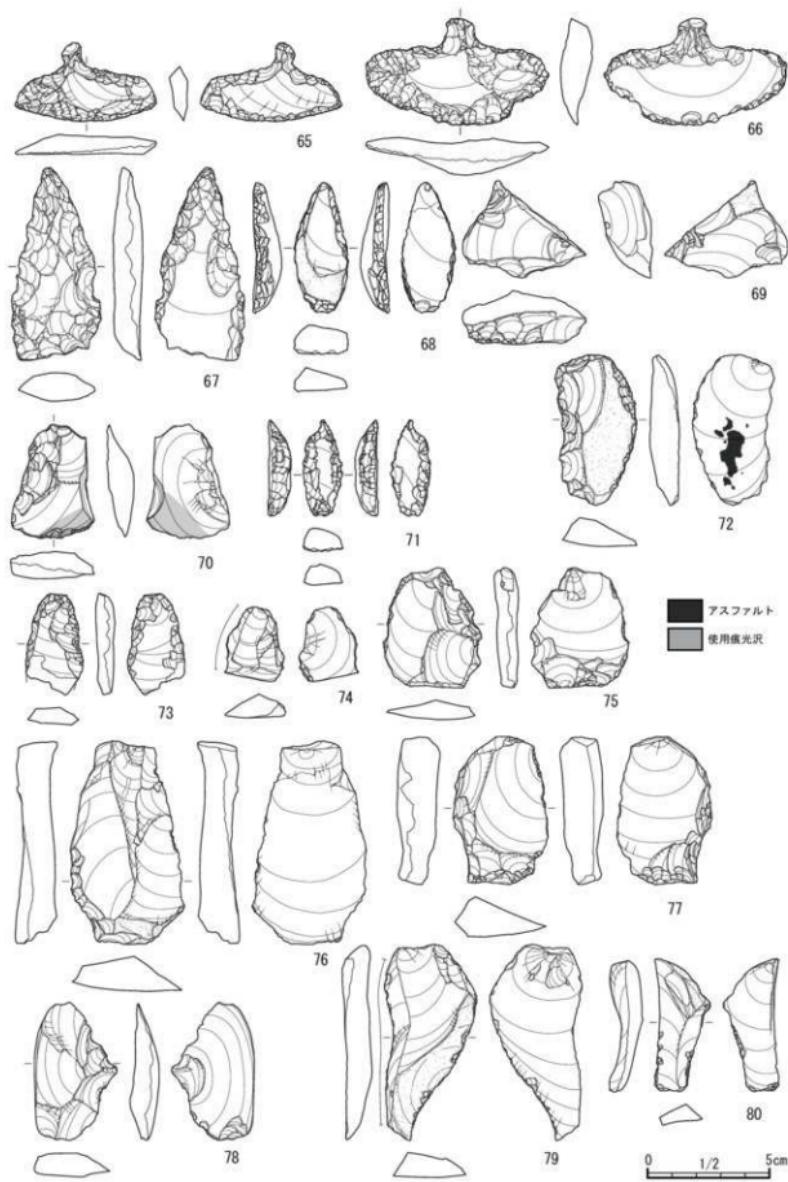


図 233 包3層出土 石器 (3)



図 234 包3層出土 石器 (4)

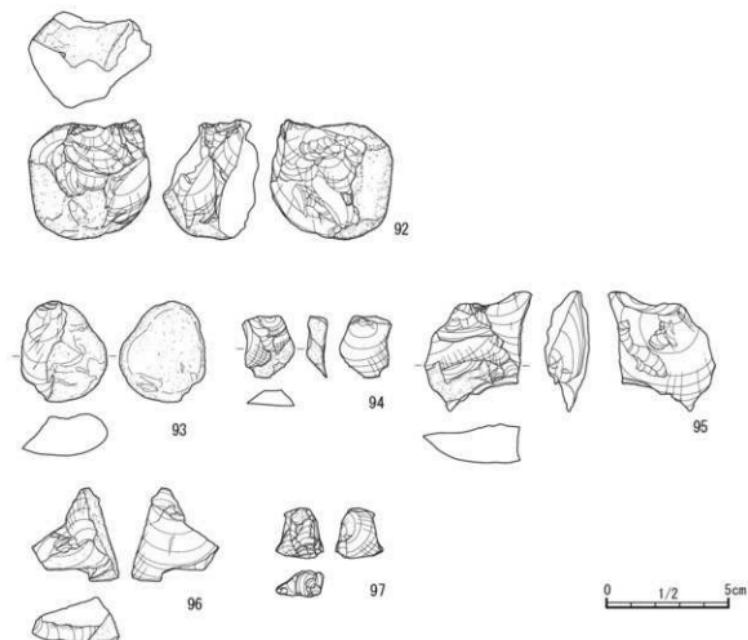
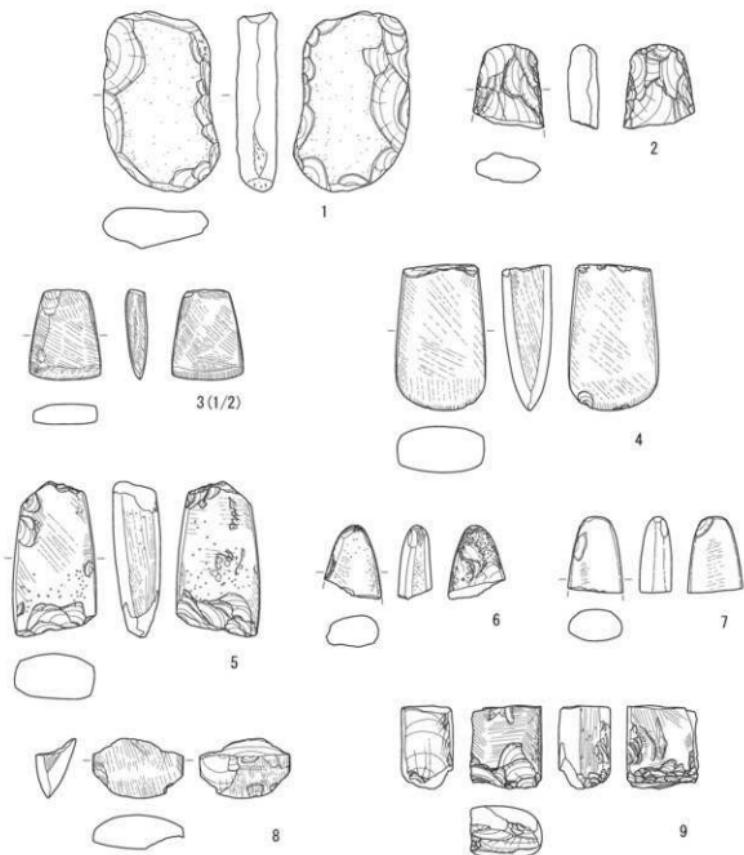


図235 包3層出土 石器(5)



0 1/2 5cm
0 1/3 10cm

図 236 包3層出土 石器 (6)

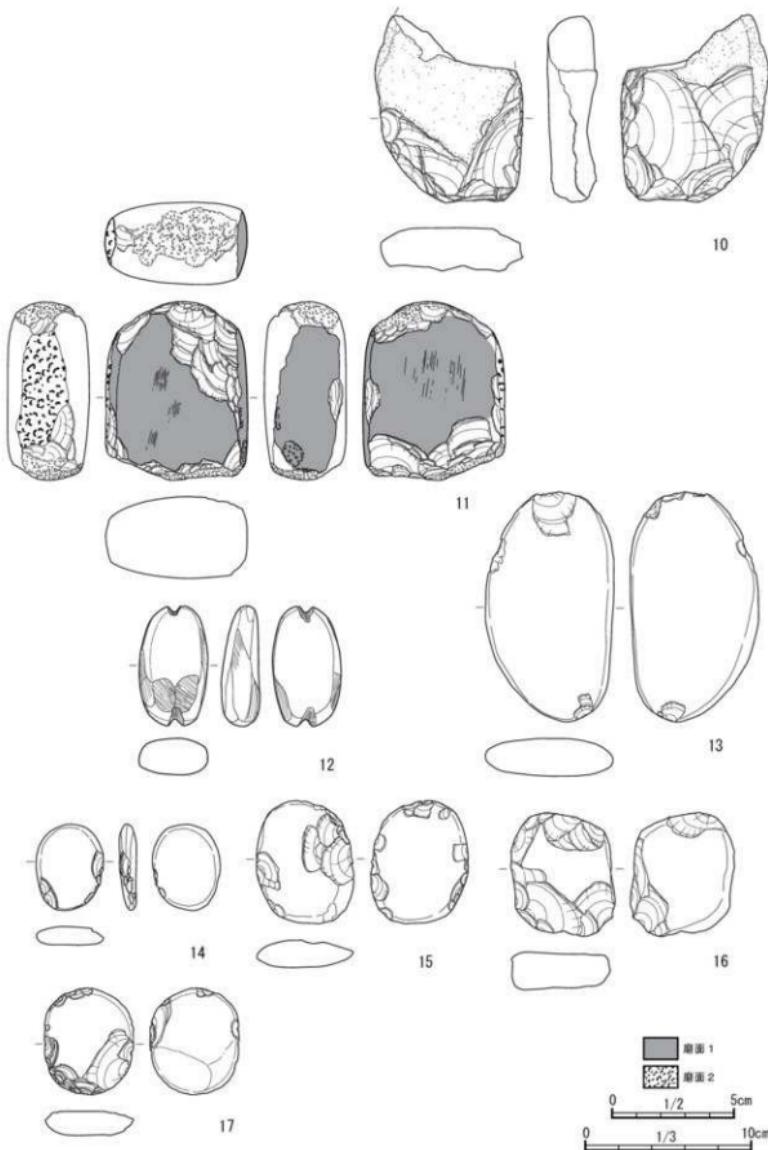


図 237 包3層出土 石器 (7)

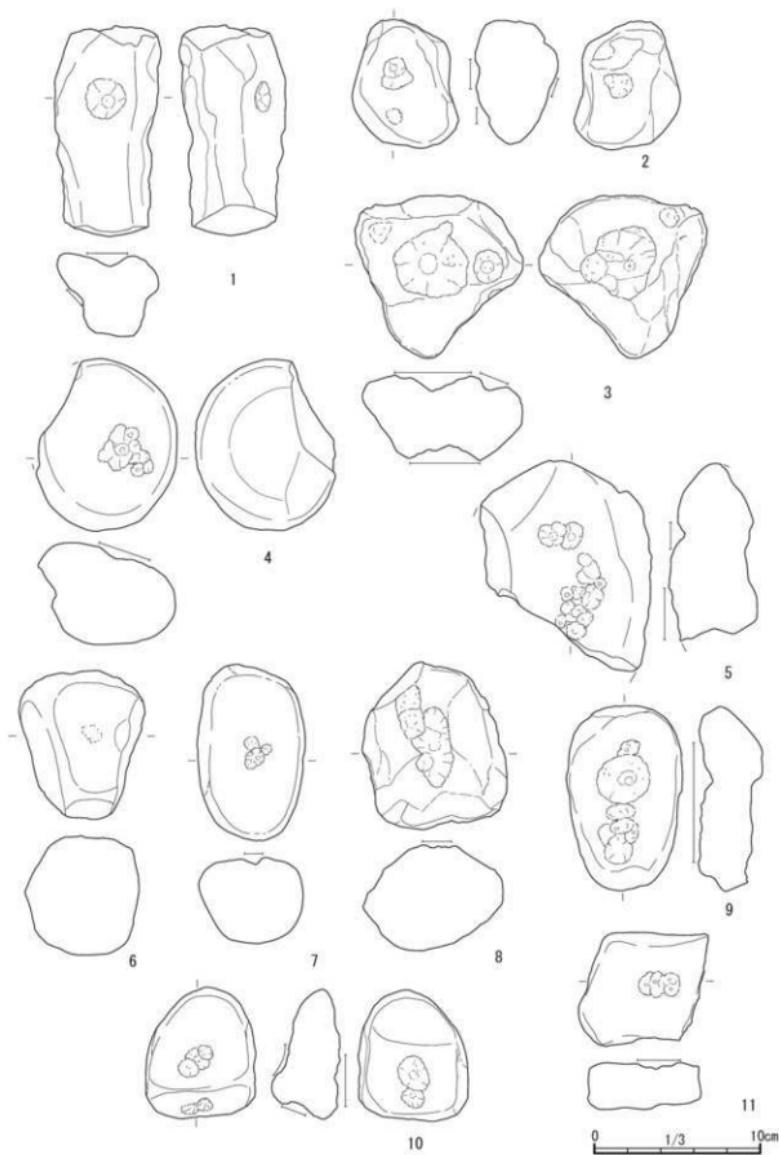


図 238 包3層出土 石器 (8)

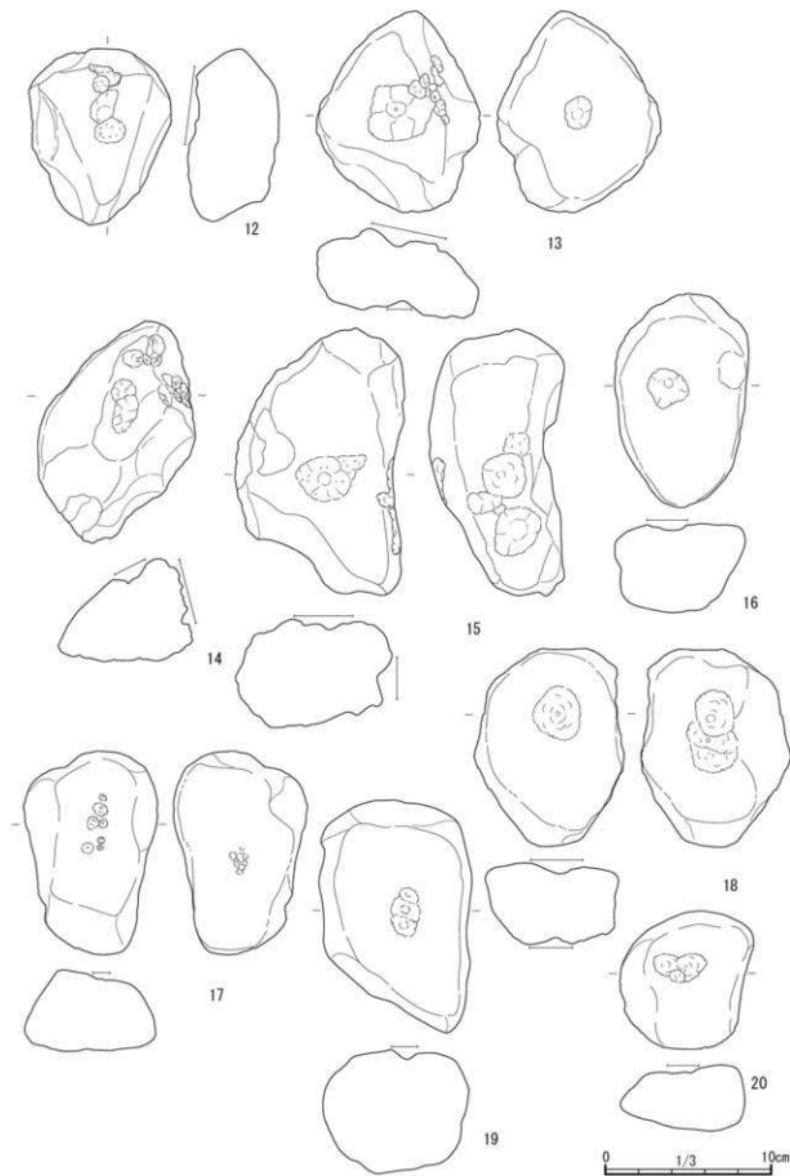


図 239 包 3 層出土 石器 (9)

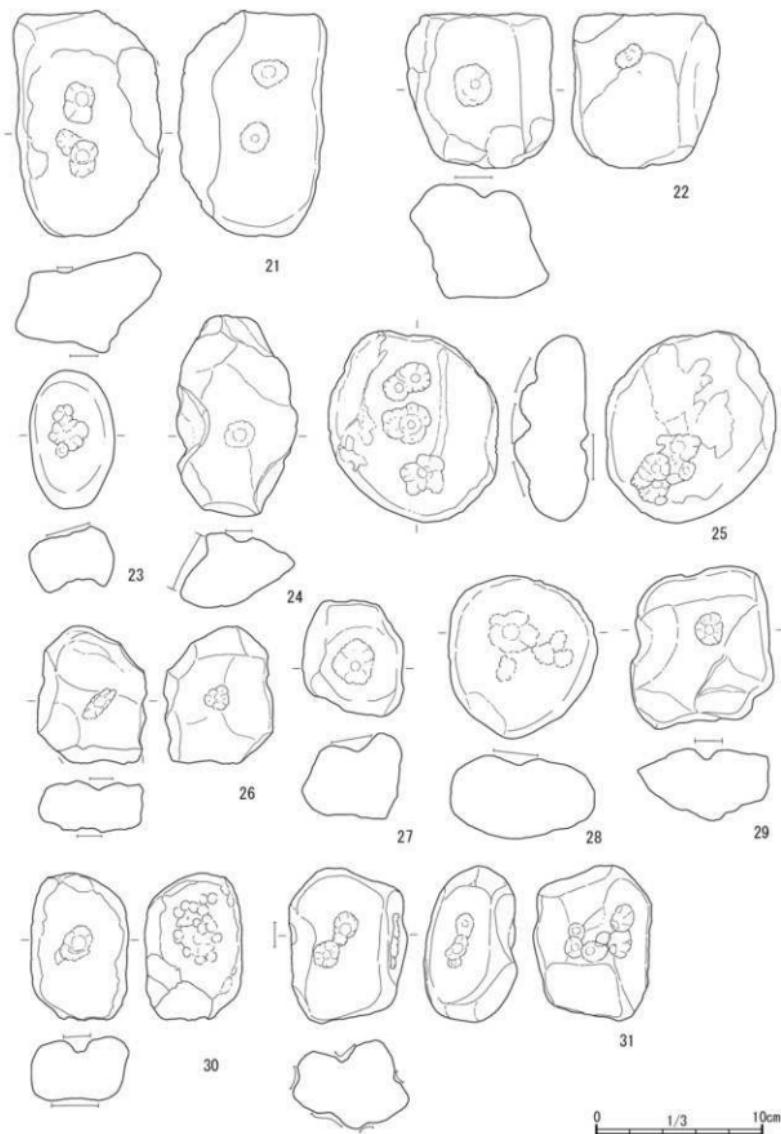


図 240 包 3 層出土 石器 (10)

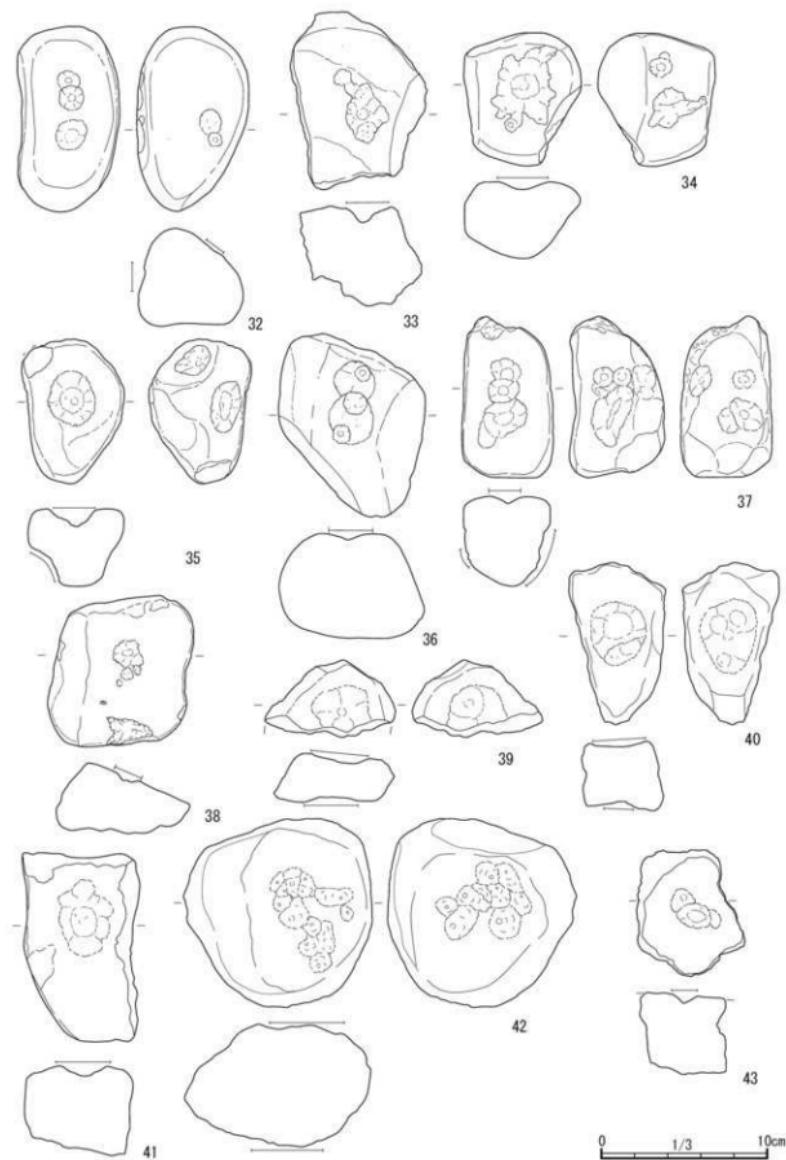


図 241 包3層出土 石器 (11)

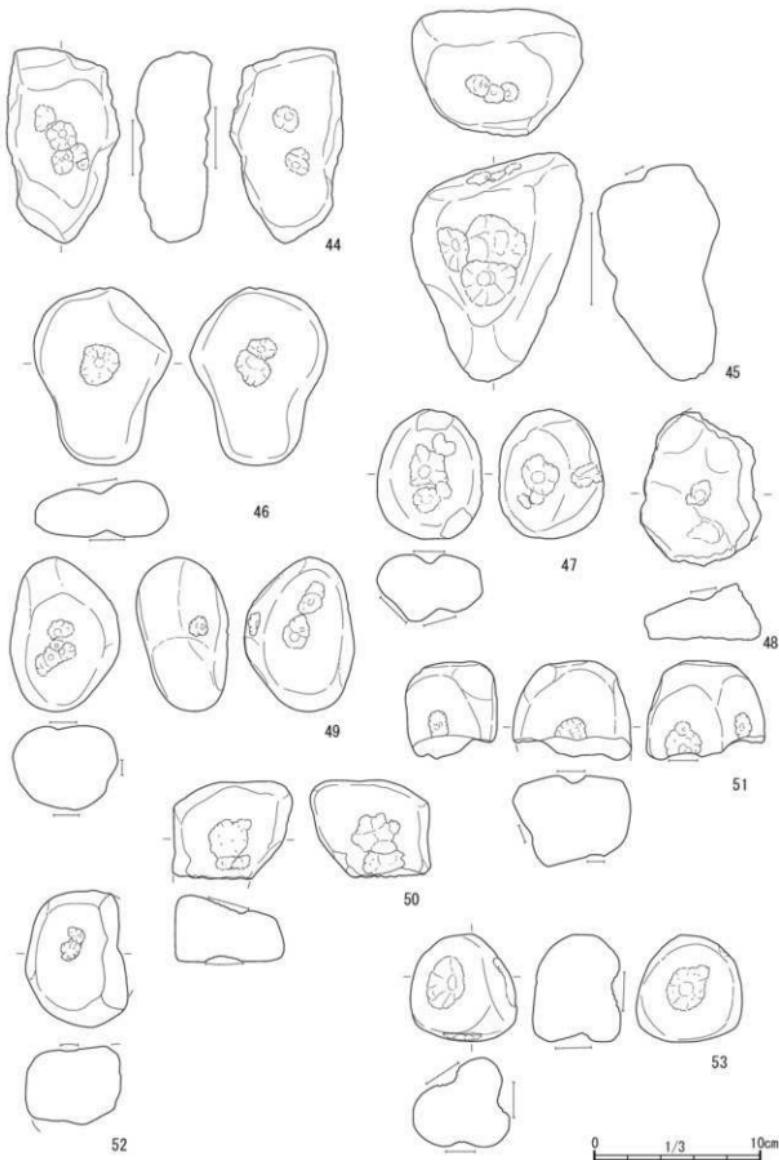


図 242 包3層出土 石器 (12)

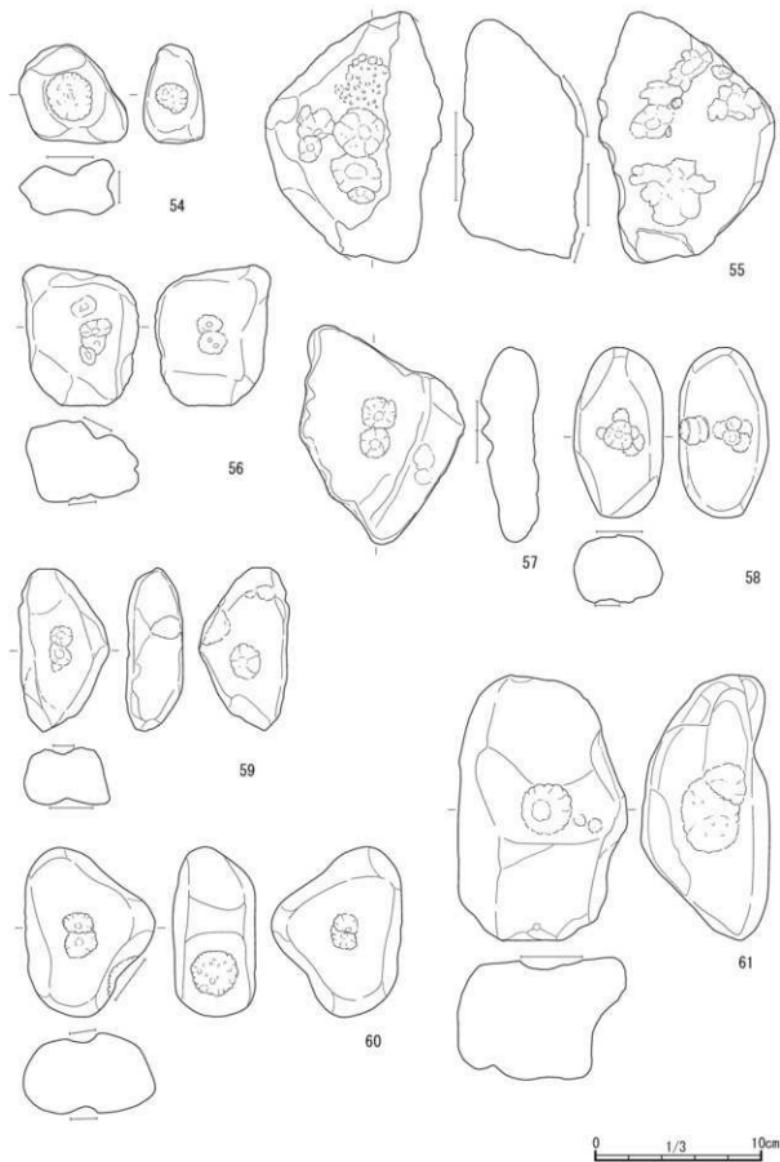


図 243 包3層出土 石器 (13)

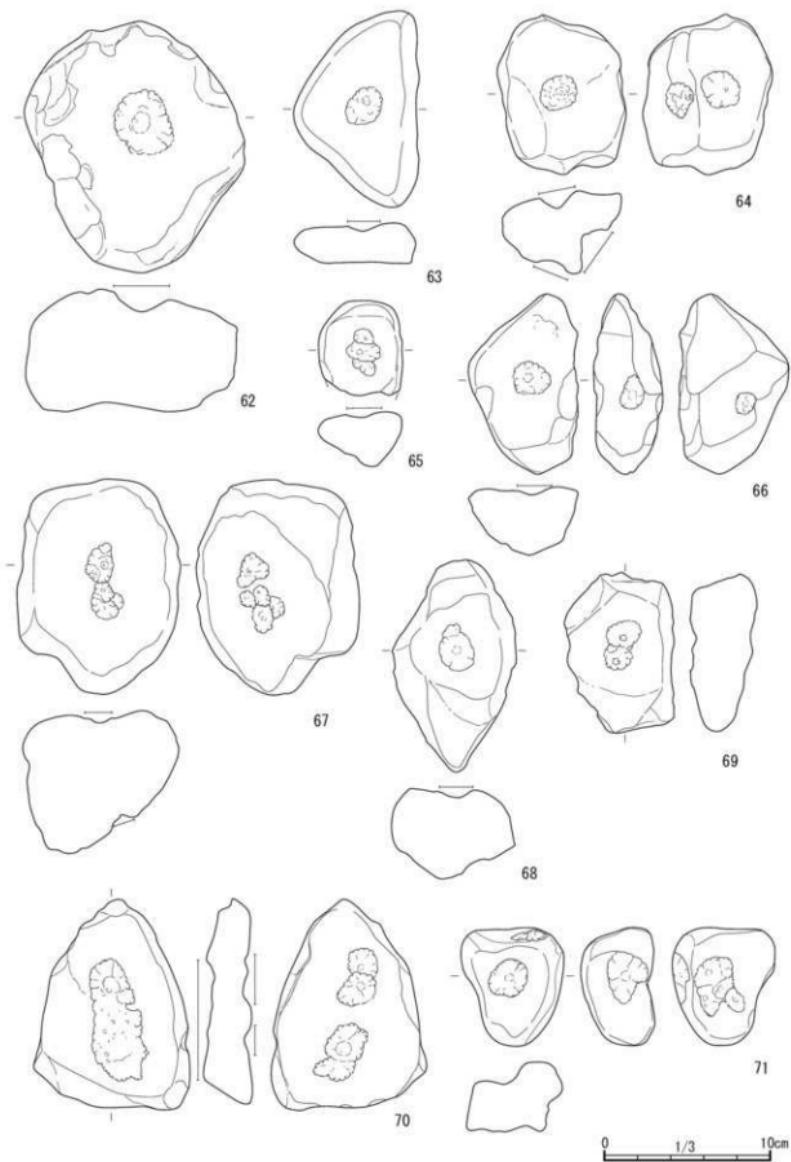


図 244 包3層出土 石器 (14)

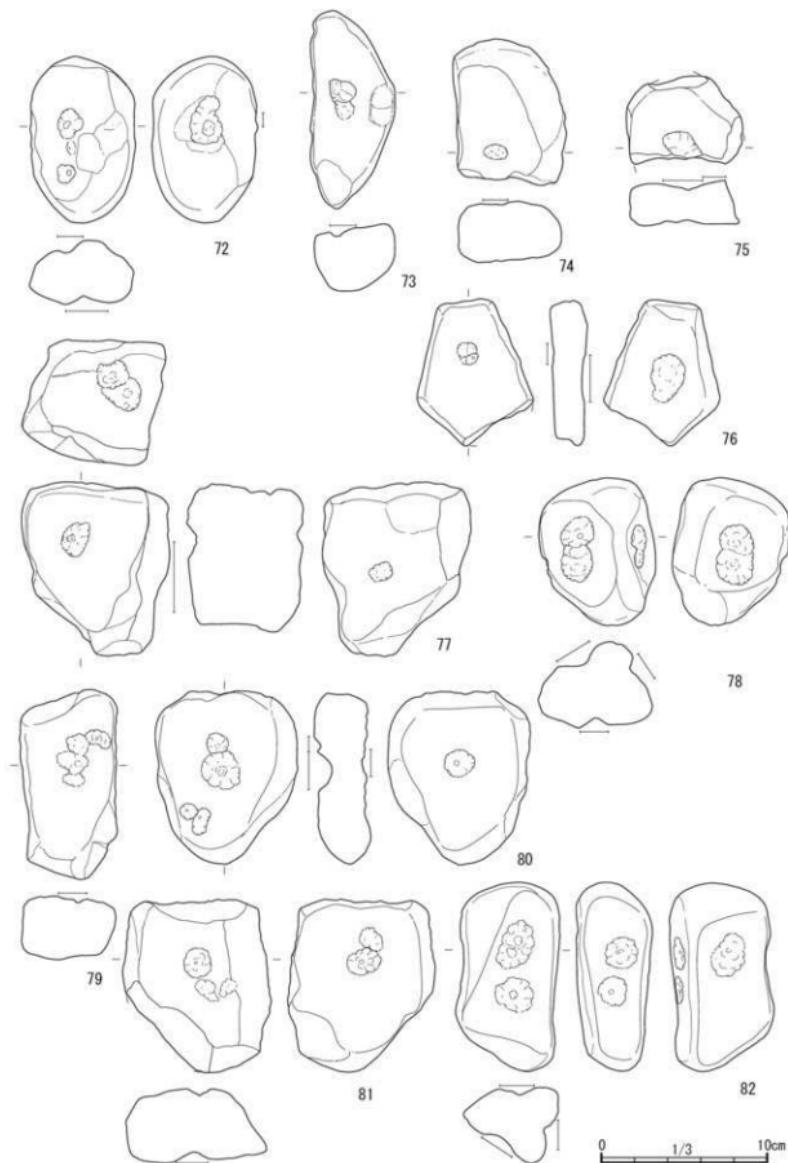


図 245 包3層出土 石器 (15)



図 246 包3層出土 石器 (16)

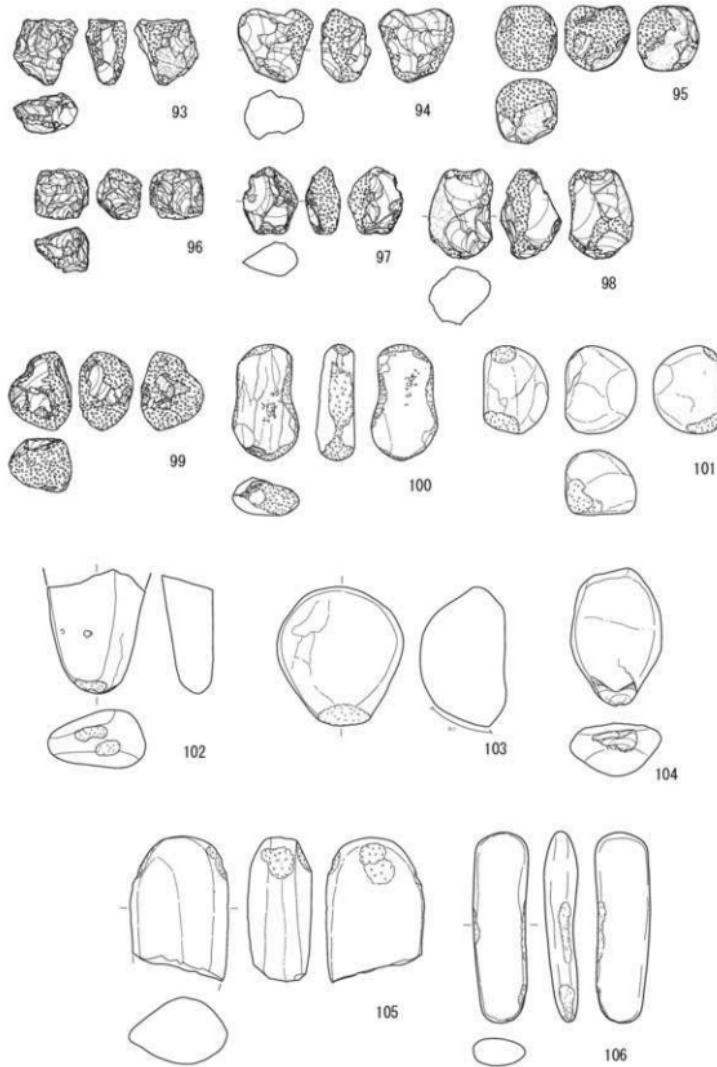


図 247 包3層出土 石器 (17)

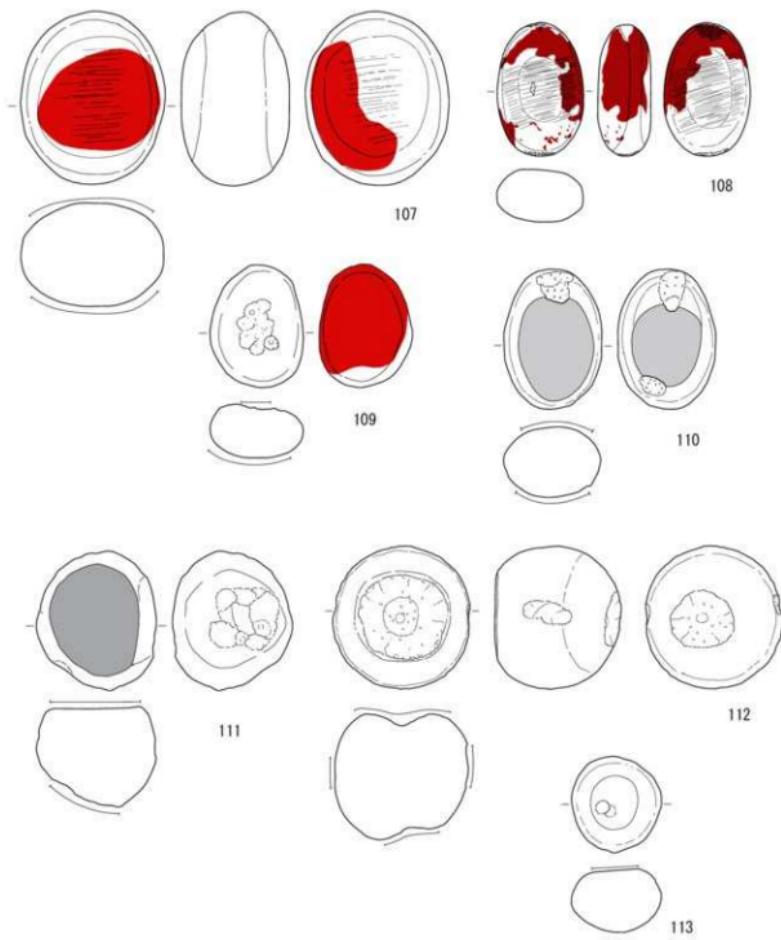


図 248 包3層出土 石器 (18)

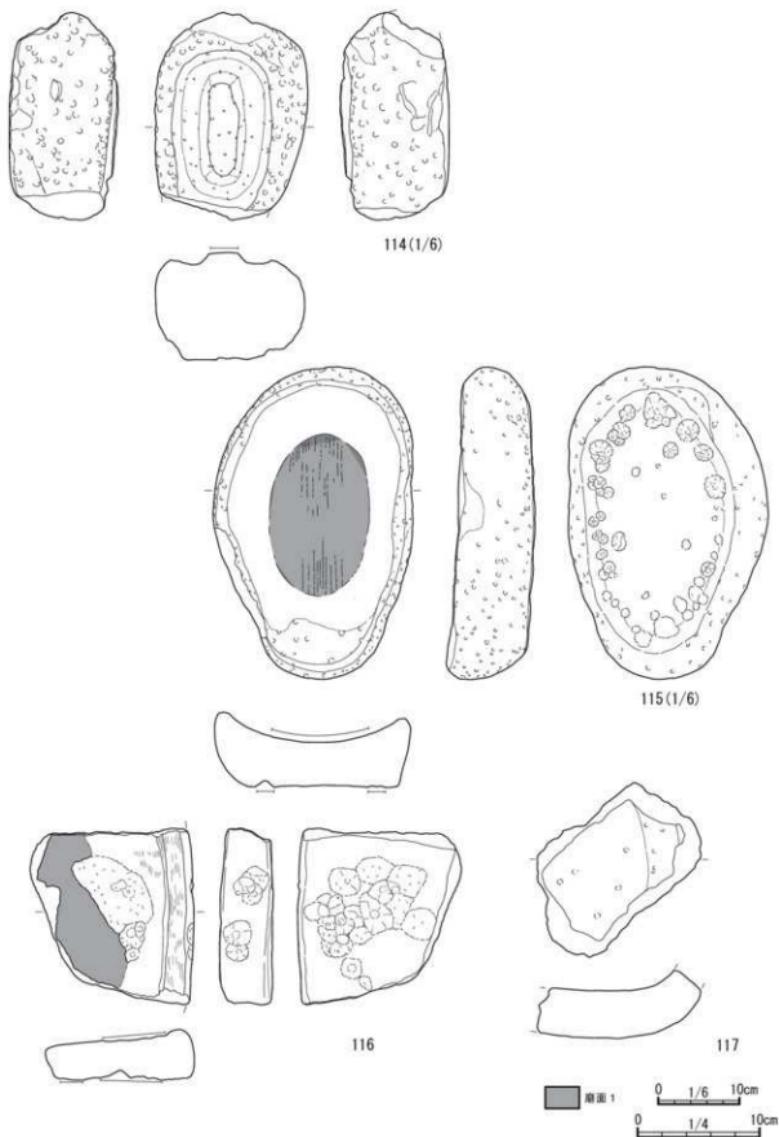


図 249 包3層出土 石器 (19)

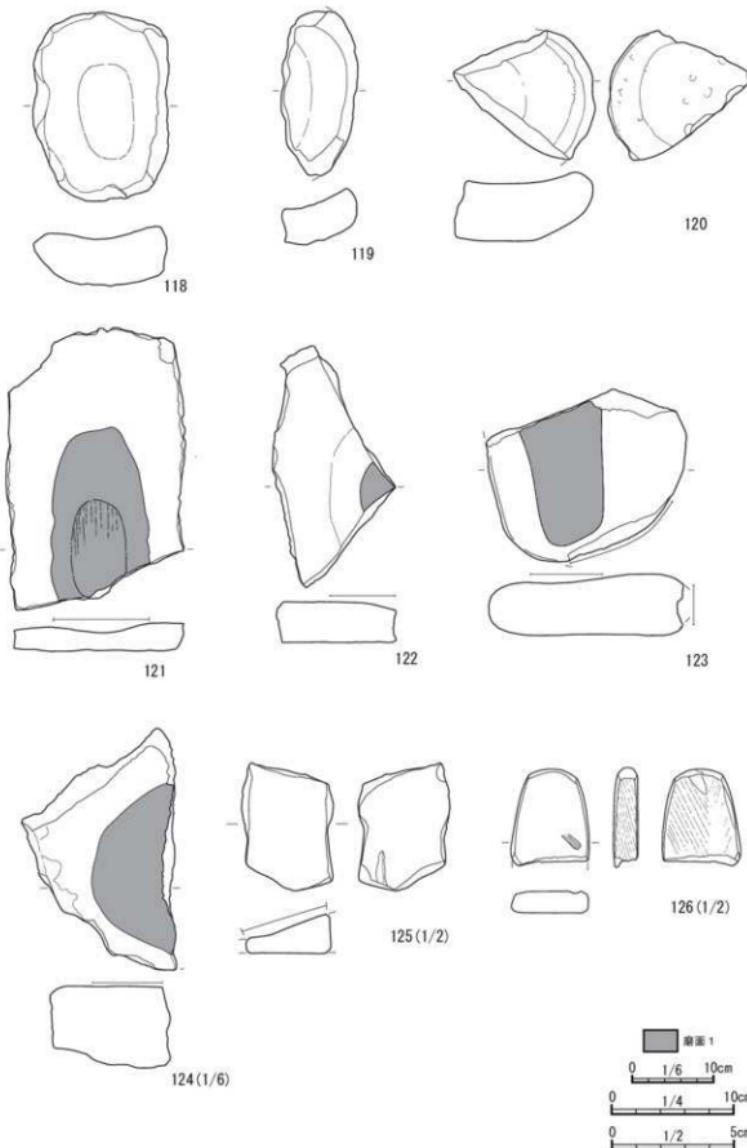
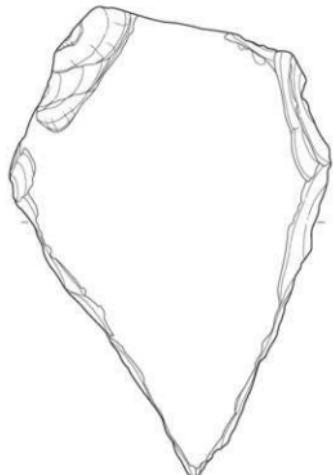
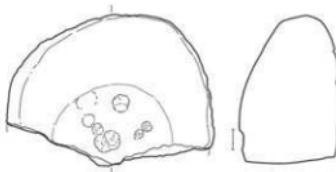


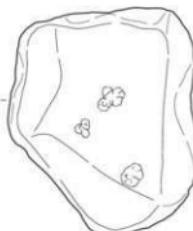
図 250 包 3 層出土 石器 (20)



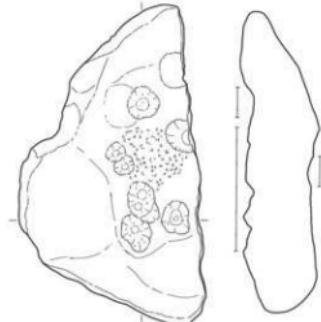
127



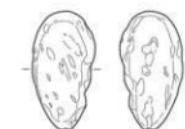
128



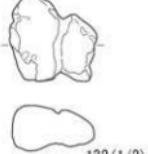
129



130



131(1/2)



132(1/2)

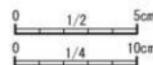
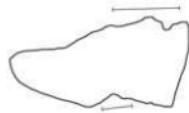


図 251 包3層出土 石器 (21)

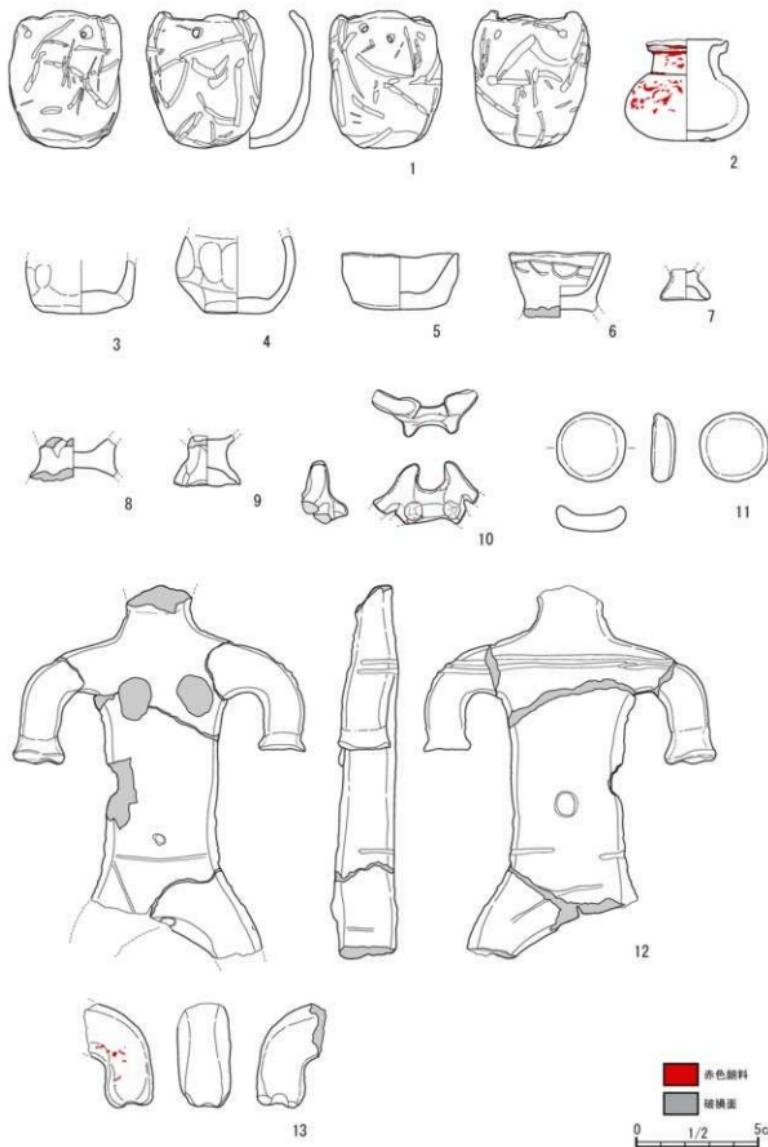


図 252 包3層出土 土製品(1)

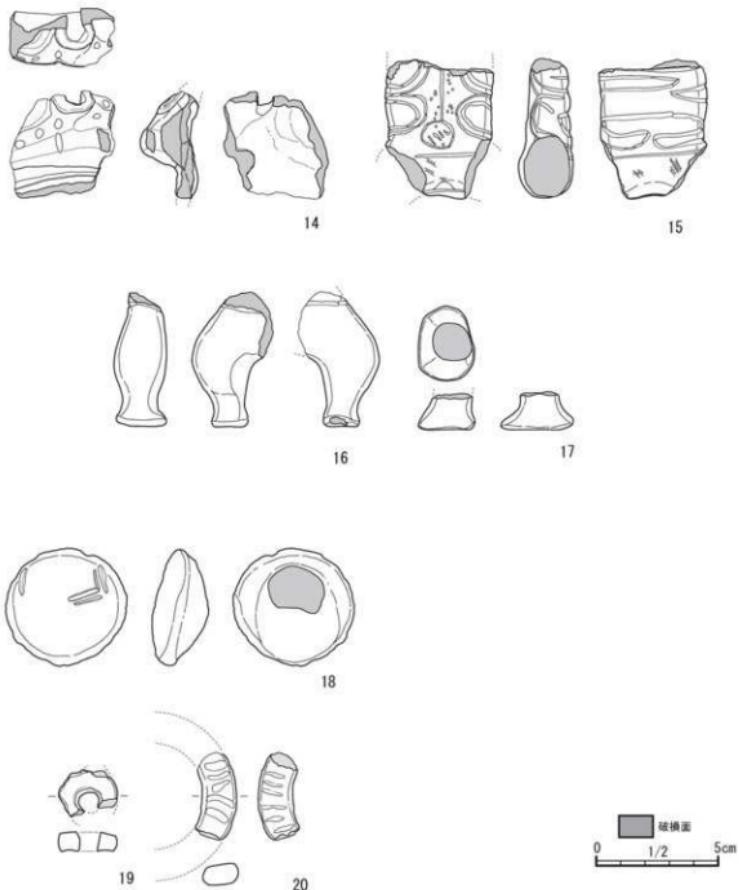


図253 包3層出土 土製品(2)

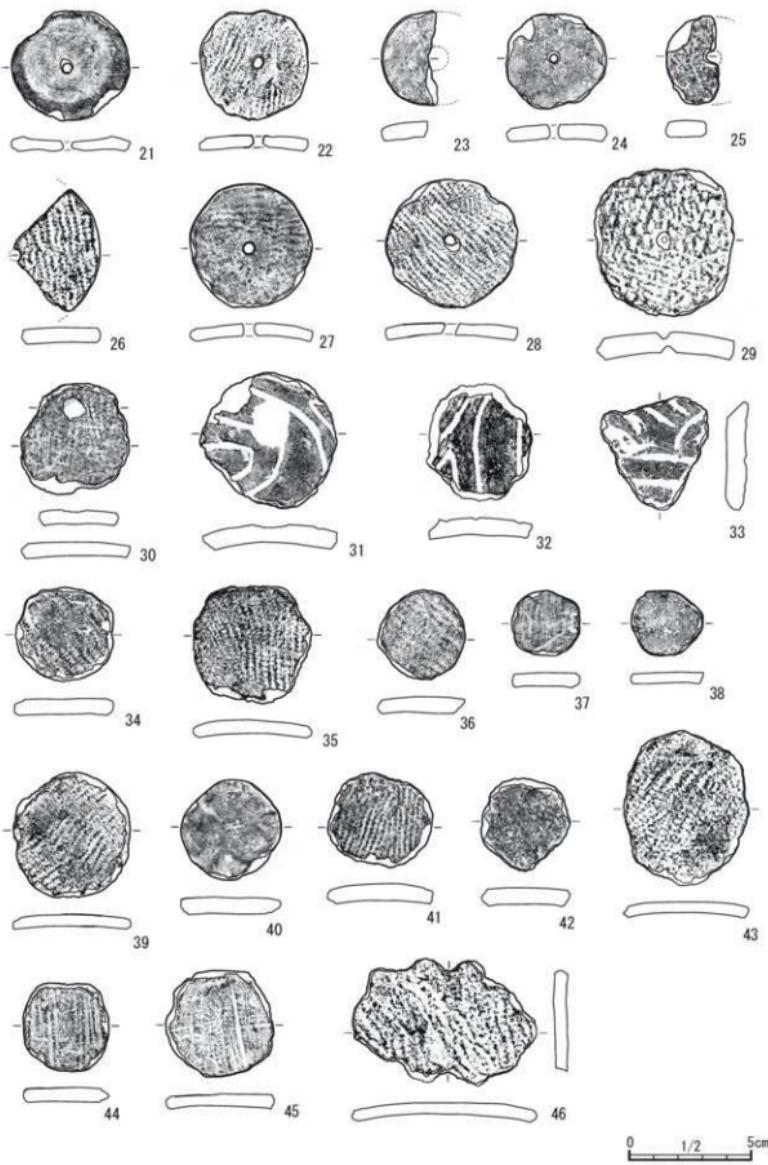


図 254 包3層出土 土製品(3)

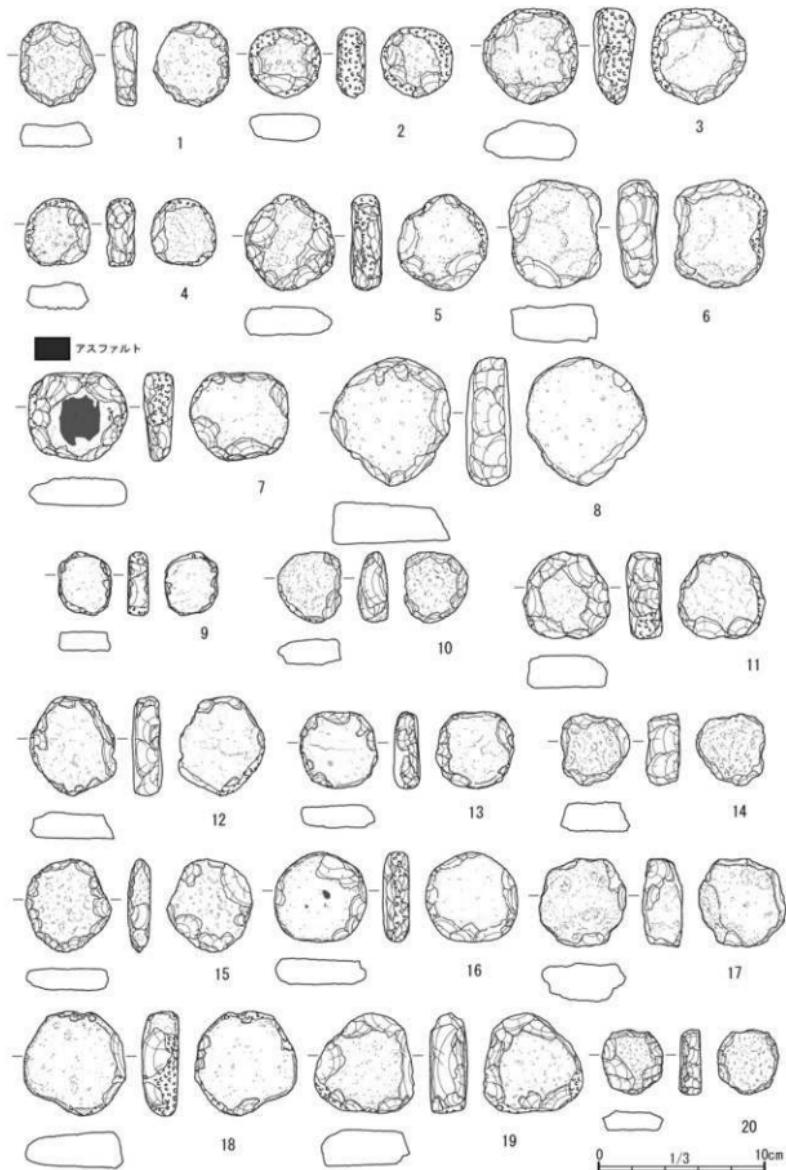


図 255 包3層出土 石製品 (1)

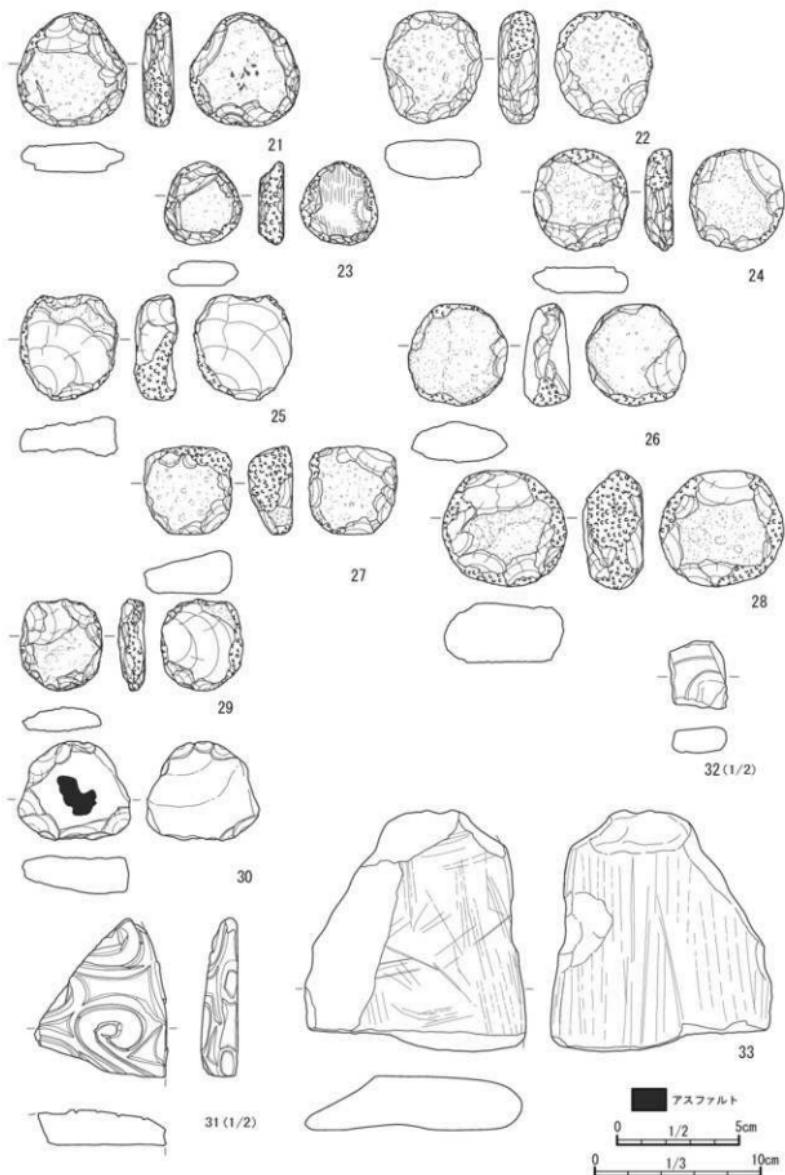


図 256 包3層出土 石製品(2)



図 257 包3層出土 石製品(3)

第3節 第Ⅲ層出土遺物

第Ⅲ層は人間の営みの影響を強く受けていない土層で、若干の遺物は包含するが自然に形成された側面が強い遺物包含層である。縄文時代晚期前半の遺物が主体である。

(1)土器

第Ⅲ層から出土した土器のうち、縄文時代前期の土器5点、後期の土器1点の他は、晚期の土器を掲載した。

【縄文時代前期】(図259-1～5) 1・2は縄文時代前期の鉢、3は深鉢、4は円筒状の胴部下半から大きく開く器形の深鉢である。5は台部片である。

【縄文時代後期】(図259-6) 6は後期中葉頃の土器口縁につく把手部分と思われる。

【浅鉢】(図260-3・4) 3・4とも内湾する口縁に平行沈線と刻み目を施し、雲形文である。

【鉢・台付き鉢】(図260-1・2、図260-5～16) 図260-1・2は三叉文がみられる大ぶりな鉢である。図260-5～7は地文縄文の鉢で、5口縁にはB突起がみられ、7口縁は稜線をもって無文帯としている。8は口縁に平行沈線がめぐる小鉢で、9は変形工字文を有する大型の鉢である。図260-10～16は台付き鉢と思われる。10は刻み目を有する口縁に突起がみられ、口縁を巡る平行沈線が突起下部で弧状となって一部入組文を形成する。11～13口縁には羊齒状文が、14・15には平行沈線と刻み目があつて、16は平行沈線に2個一対の小突起がみられる。12～14の台部には円形貫通孔を抱く三叉文がみられる。

【深鉢・片口深鉢】(図261-1～図262-3) 図261-1は片口土器で、外面は炭化物が覆っている。口唇にB突起が付き、片口部分は口縁部に粘土を付け足して片口を作出している。2・4は口縁に3条の沈線が巡る深鉢で、3は2個一対の突起を有しており、口唇に2カ所、その中央下部にあたる頭部に1カ所ある。沈線で区切られる頭部は無文である。5は平行沈線中に突起がみられるものである。図262-1は直立する頭部に平行沈線が巡り、胴部上端に最大径がある器形の深鉢である。口縁は小波状をなす。2・3は小波状口縁の粗製深鉢で、3には輪積み痕明晰に残されている。

【注口土器】(図262-4) 4は平行沈線と三叉文がみられる注口土器である。

【壺】(図263-1～図263-11) 1は小型の壺で、胴部上部の区画としての直線沈線と、弧状文もしくは山形文のような沈線がみられるが、明確な文様とはなっていない。2は隆帶と突起がみられる地文無文の壺で、3は羊齒状文2段と平行沈線と刺突列1段が胴部にみられる精製壺である。4は下ぶくれの器形の壺で、5は球胴を有する壺である。6・7は広口壺で、8は地文縄文で口縁に突起がみられる壺である。9～10も地文縄文の壺で、縱長の器形である。

(2)石器

石鎌35点、石槍1点、石錐12点、石窓1点、両面調整石器3点、石匙15点、削器類26点、両極石器10点、二次加工剥片類16点、異形石器2点、微細剥片22点、石核23点、打製石斧1点、磨製石斧5点、抉入扁平打製石器8点、敲磨器63点、石冠1点、石皿類12点、加工疊3点が出土した。剥片石器の出土重量は9,762.6g、砾石器の出土重量は86,142.3gである。

【石鎌】(図264-1～31) Ata(1～14)15点、Atb(15～21)7点、Aa(22～29)9点、Az(30)2点、Ay(31)2点に分類でき、31点図示した。

【石錐】(図264-32～38) Ca(32～34)6点、Cb(35、36)2点、Cc(37、38)4点であり、8点図示した。敲き折り整形37がある。

【両面調整石器】(図264-39) 1点出土している。

【石窓】(図265-40) 横長剥片を素材とし、刃部は細かな二次加工がみられる。

【石匙】(図265-41~50) Fa9点、Fb6点である。42は片面加工の綫長剥片のFaで、肉眼でも光沢がみられる。形状的・使用痕的に円筒式期に属する可能性がある。47は横形の素刃である。

【搔器・削器】(図265-51~53、図266-56,57) Ga2が2点、Gb1が20点、Gb2が1点、Gb3が3点であり、56などは刃部両面である。57は安山岩製の素刃削器である。

【異形石器】(図265-54,55) 2点出土している。

【石核】(図266-58~63) 石核は23点、そのうち黒曜石製2点であり、6点図示した。打面転移が頻繁に行われた石核が多い。

【二次加工剥片】(図267-1) 二次加工剥片である。打製石斧の未製品であろうか。

【打製石斧】(図267-2) 刃部が欠損している。

【磨製石斧】(図267-3~6) 3、6は完形磨製石斧である。敲打整形の後、研磨で整形している。4、5は刃部が欠損している。

【半円状扁平打製石器】(図267-7~図268-13) 7点図示した。礫・剥片素材がある。

【(北海道式)石冠】(図268-14) 矶素材であり、ザラザラ磨面である。表裏に敲打痕がある。

【敲磨器】(図268-15~図273-60) Qa(15~49)50点、Qb(50,51)2点、Qc(52~60)11点であり、46点図示した。ⅢH-54・55一帯で大形の礫の他に、QbやQaが出土している。Qbは、長軸に直交して線状痕がみられる。52は擦切技法を持つ磨製石斧素材のQcである。

【加工礫】(図273-61,62) 61は扁平楕円礫の長軸に擦痕がある。62は側面の長軸に研磨がある。

【自然礫】(図273-63~65) 自然礫がある。敲磨器の素材と思われる。

【石皿】(図274-66~図275-73) Ta1が2点、Ta2が8点、Tbが2点ある。66は裏面に敲打で凹み状になっている。67は黒色の付着物が機能面に認められる。Ta2(68,69)には赤色顔料が付着している。他にも平滑な機能面を有するTa2の断片がある。72は白色の軽石素材の石皿であり、亀ヶ岡遺跡で同種石材を用いた石皿が出土している。

(3) 土石製品

土石製品は16点図示し、石製品は24点中18点図示した。

【ミニチュア土器】(図276-1~4) 1は文様が3単位の壺形である。入組文のモチーフである。壺の2は赤彩資料で、有文である。3は皿形、4は器種不明である。

【土偶】(図276-5~9) 5・6は顔部である。接合面を残し、隆帯と沈線で顔が表現されている。7は肩部で正面に隆帯、竹管状工具の刺突がみられる。8は髪飾り部分で、破損面に貫通孔がみられる。9は胴部片で文様がない。

【土面】(図276-10) 隆帯装飾がある。左辺の中央部に指圧で少しくぼませている。

【土製円盤】(図276-11~14) 11は有孔、3点は無孔である。

【耳飾り】(図276-15,16) 赤彩の耳栓である。

【石製円盤】(図277-1~6) 6点図示した。

【岩版】(図277-7) 滾巻き文風のモチーフである。

【石棒】(図277-8~10) 10は、頭部に沈線で四角形状に文様が施文されている。

【玉】(図277-11~18) 11が有孔石製品である。平玉1と2、玉の原石がある。

平成23年度 1mトレンチ出土石器(図275-74~79)

平成23年度の調査において設定した1mトレンチのうち、ⅢCラインよりも南側にあり、推定Ⅲ層から出土した石器を6点図示した。石槍(74)、石錐(75・76)、石匙(77~79)がある。

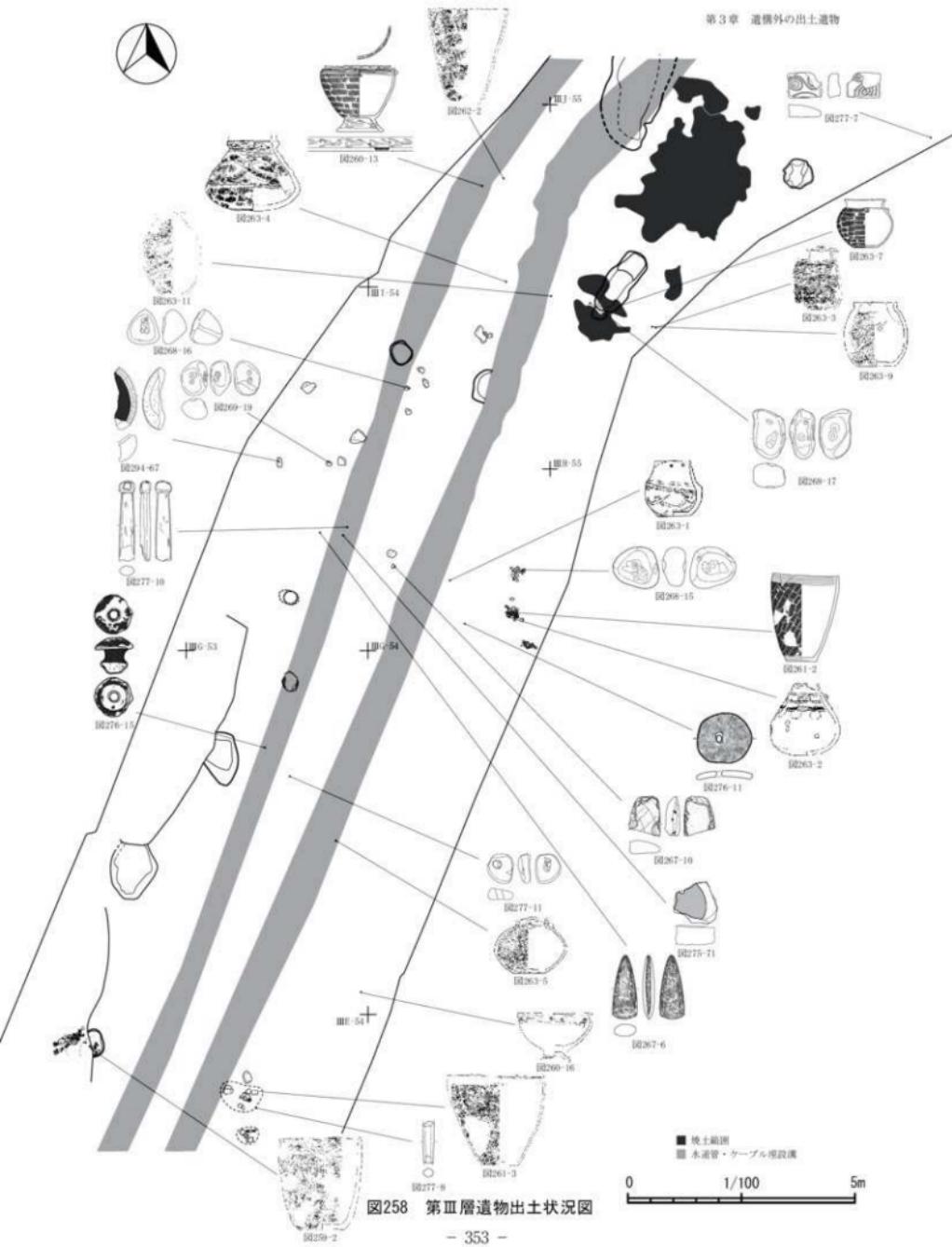


図258 第III層遺物出土状況図

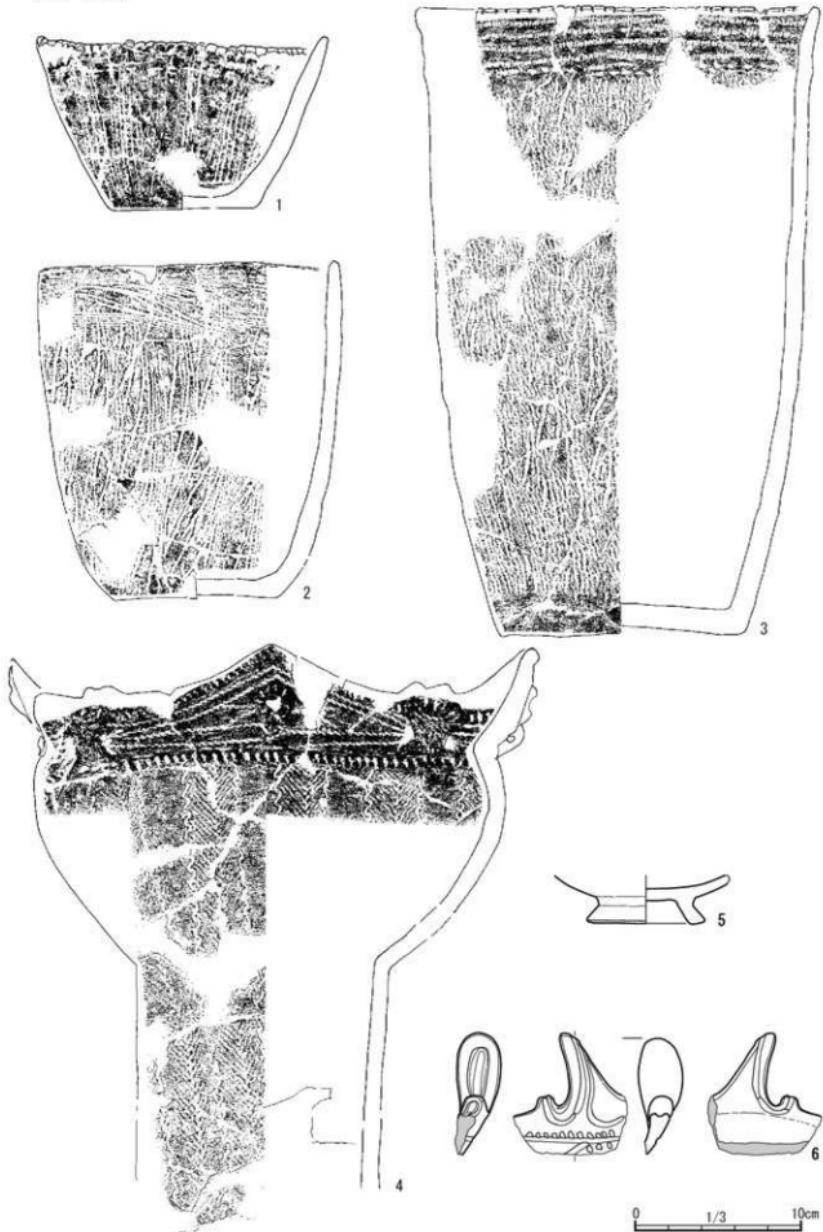


図259 第Ⅲ層出土 土器（1）

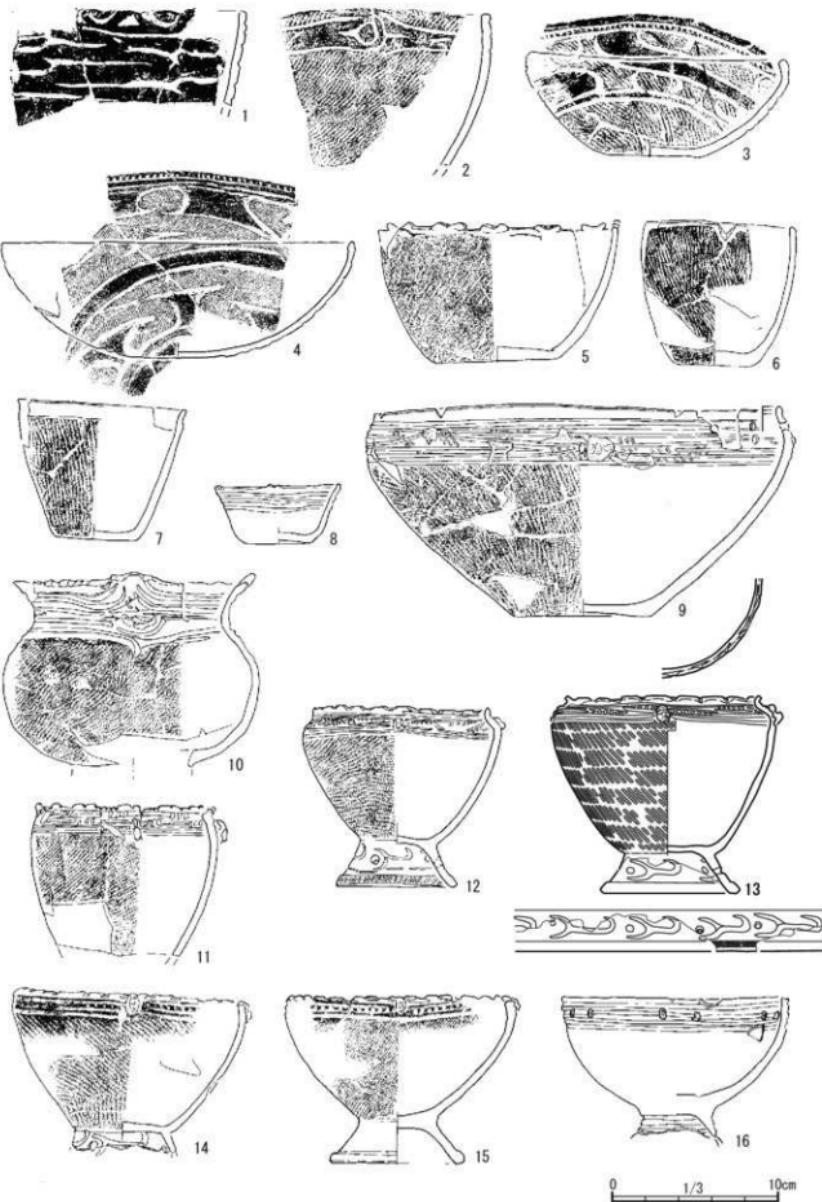


図 260 第Ⅲ層出土 土器 (2)

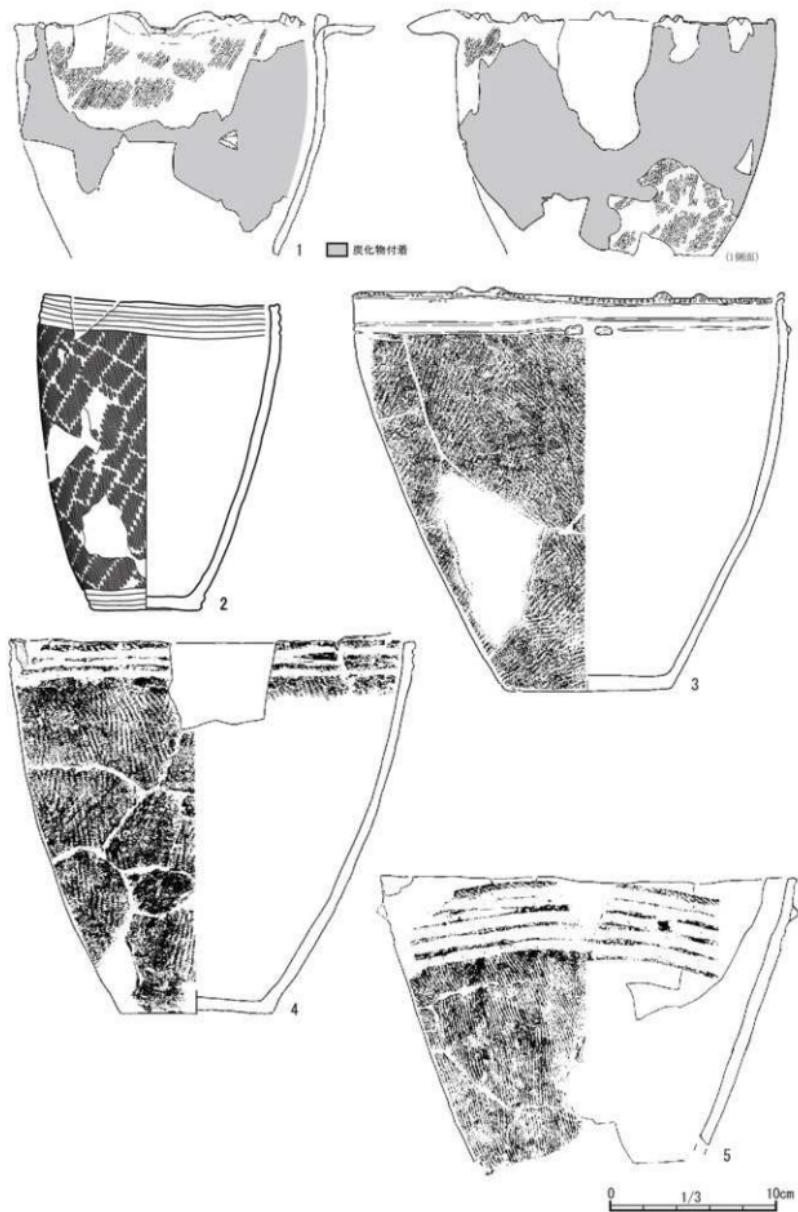


図 261 第Ⅲ層出土 土器 (3)

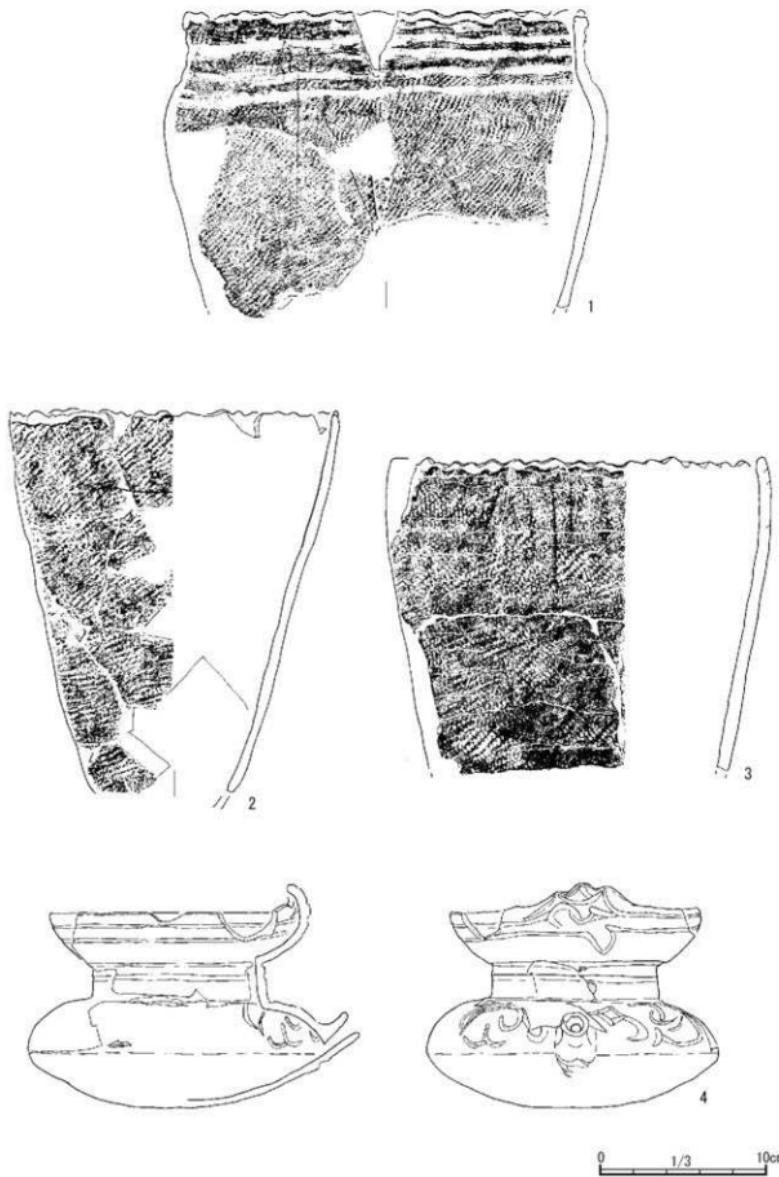


図 262 第Ⅲ層出土 土器 (4)

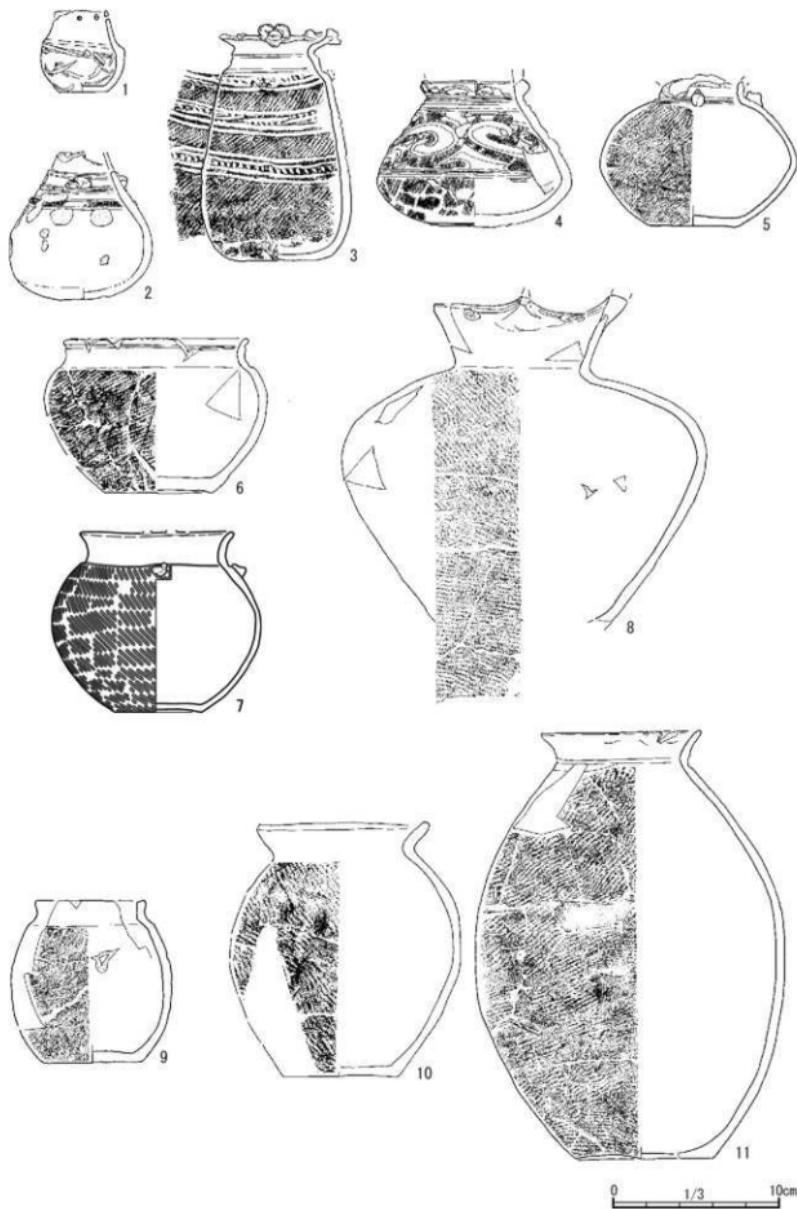


図 263 第Ⅲ層出土 土器 (5)

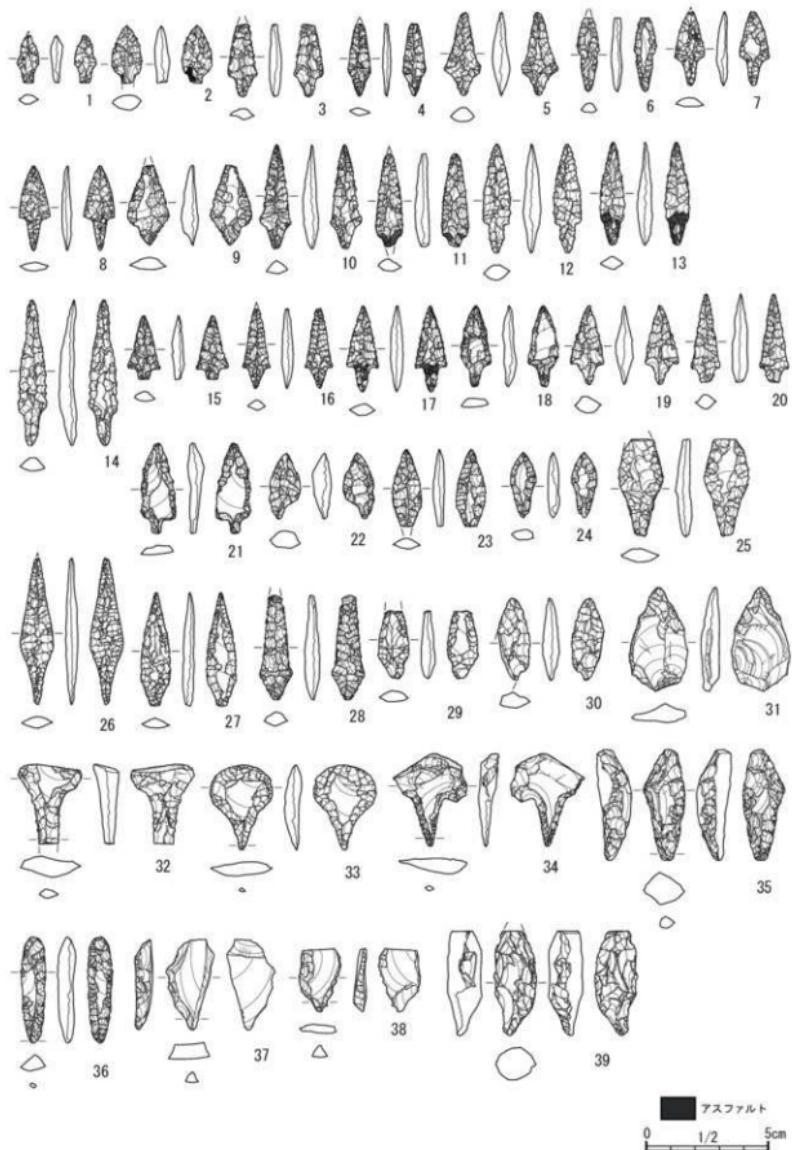


図 264 第III層出土 石器（1）

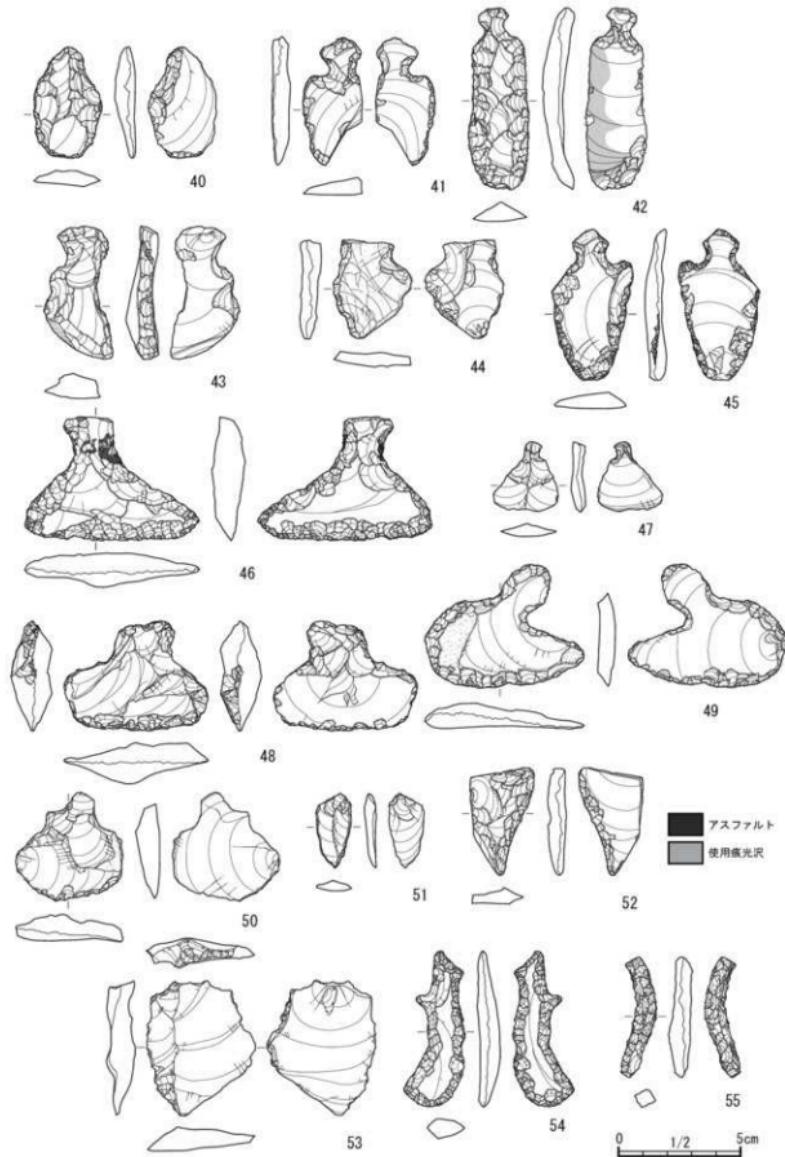


図 265 第III層出土 石器（2）

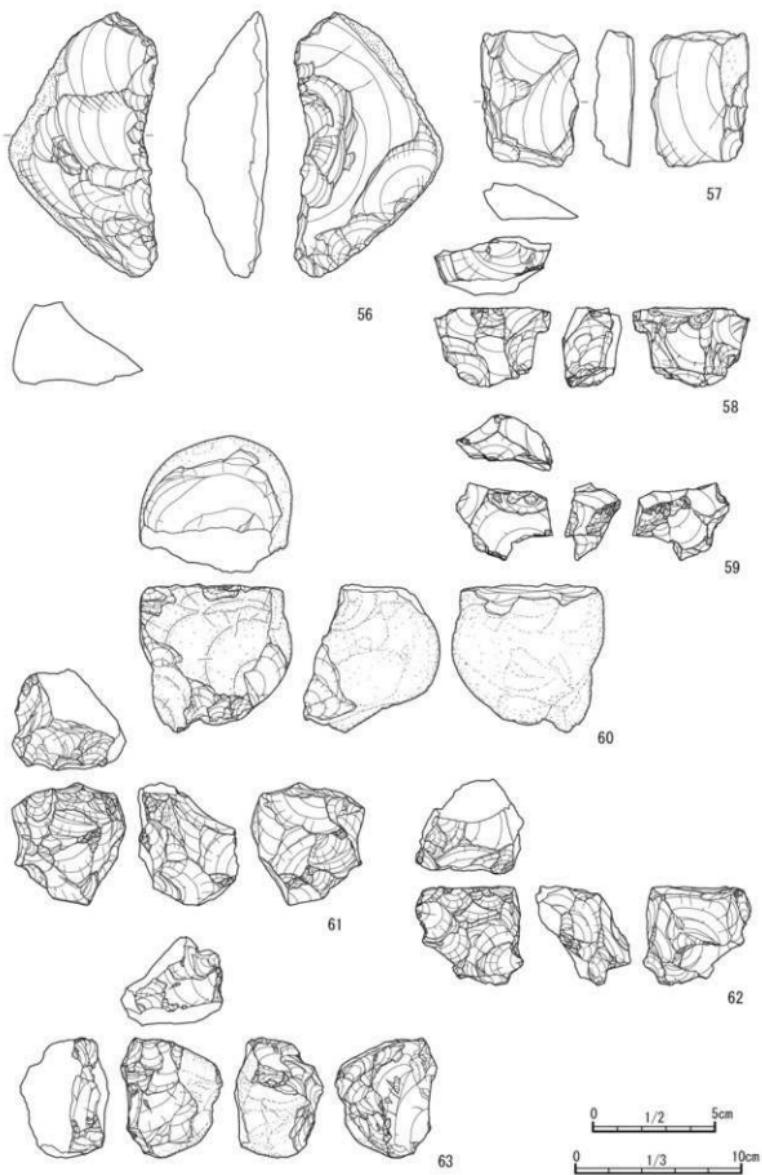


図 266 第III層出土 石器 (3)

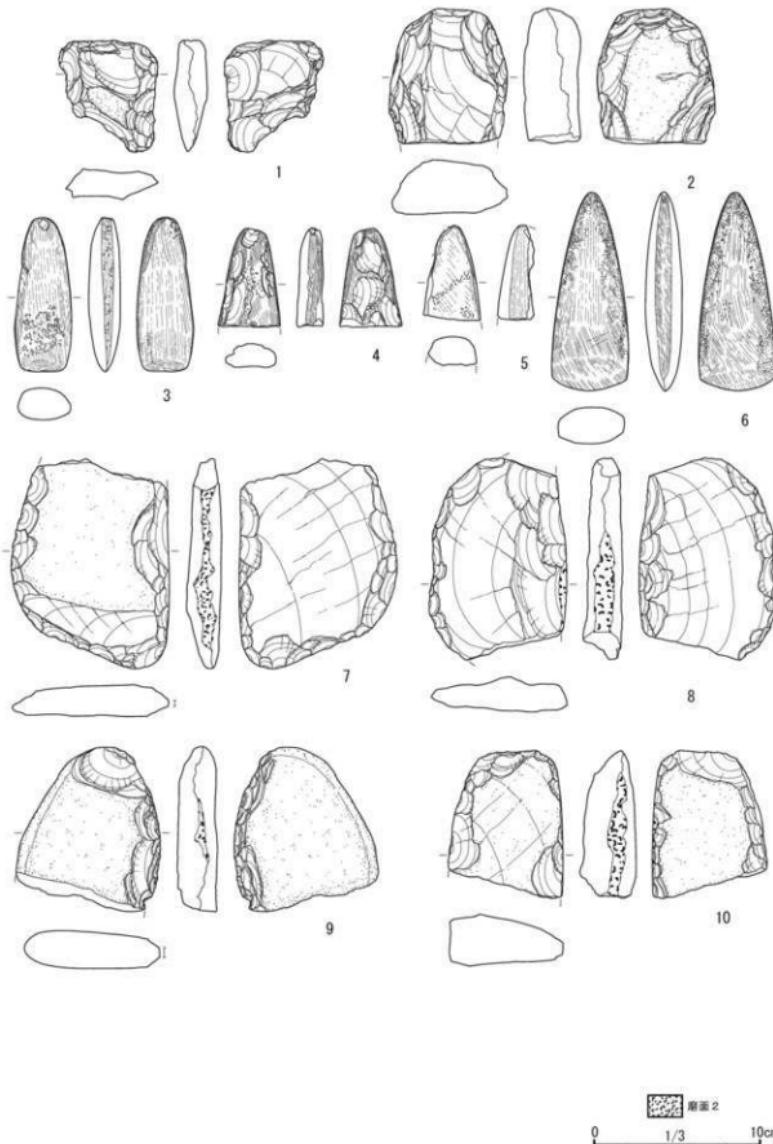


図 267 第III層出土 石器 (4)

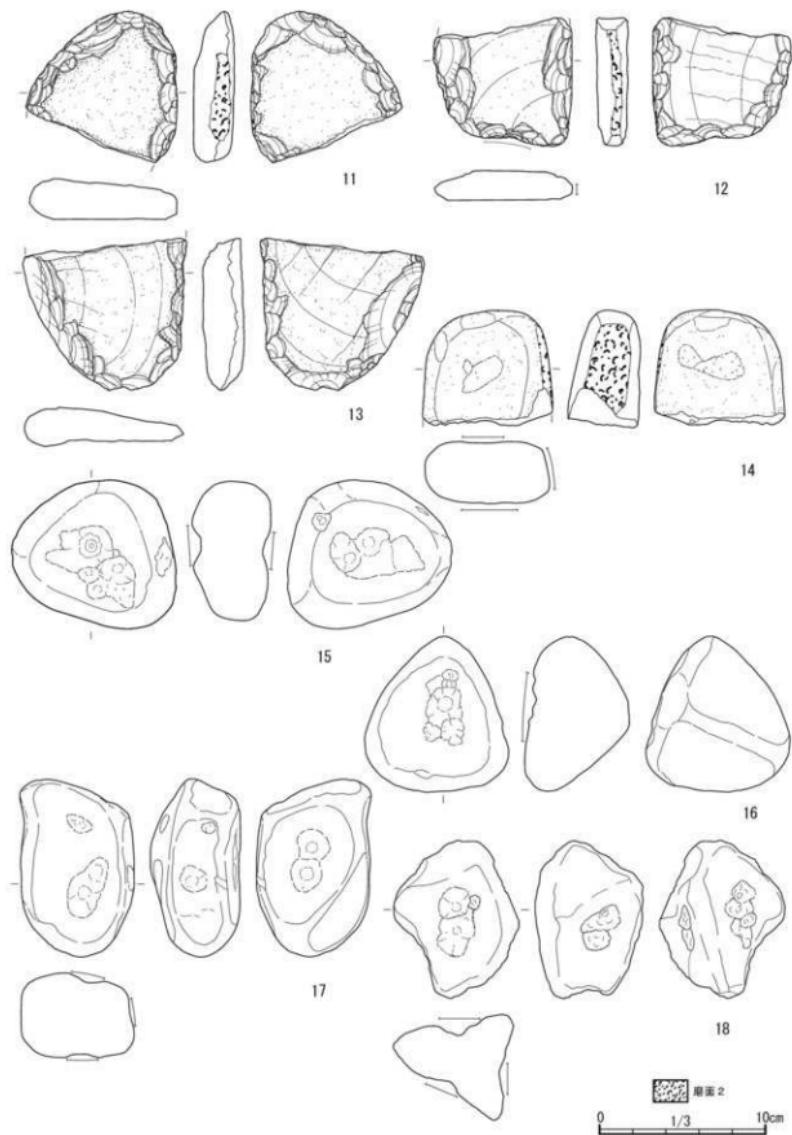


図 268 第III層出土 石器 (5)

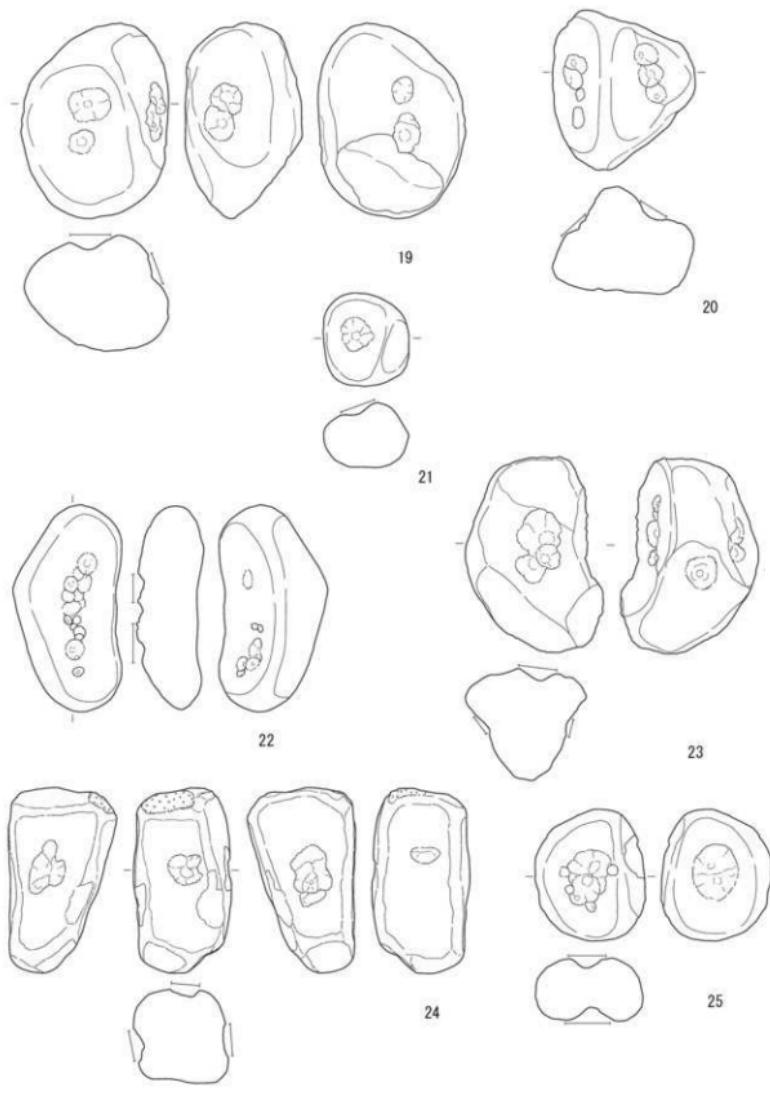


図 269 第III層出土 石器 (6)

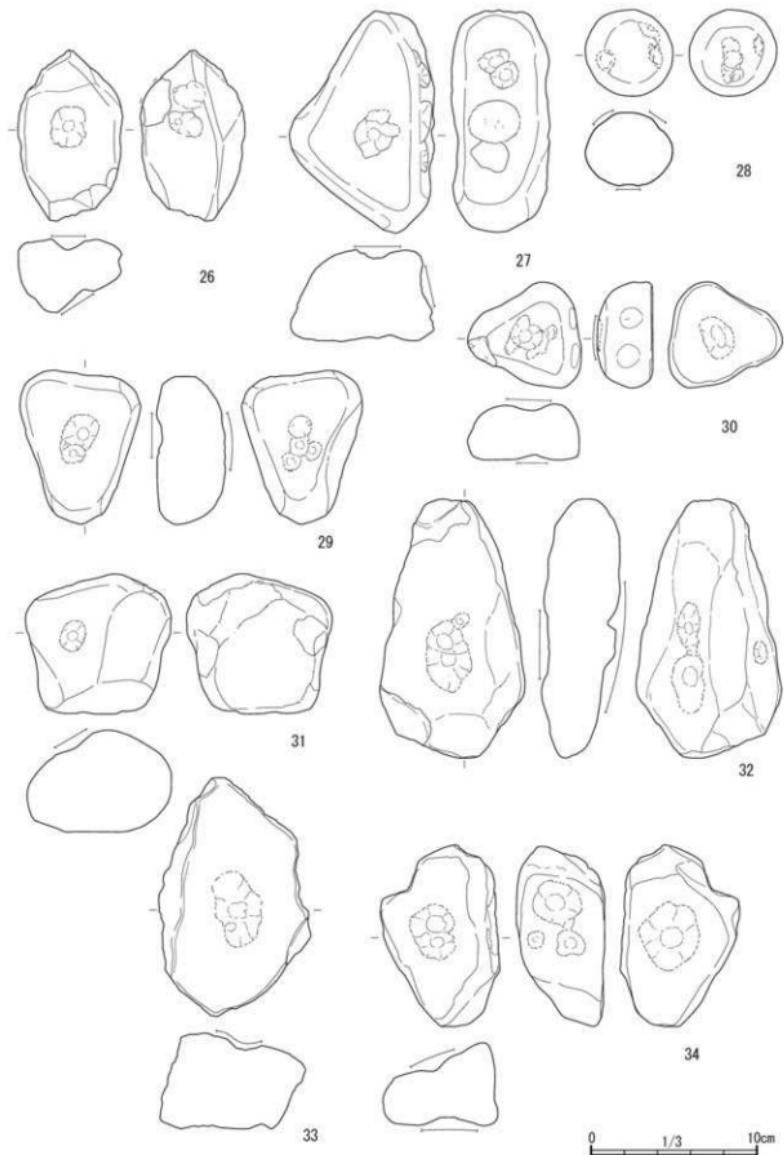


図270 第Ⅲ層出土 石器（7）

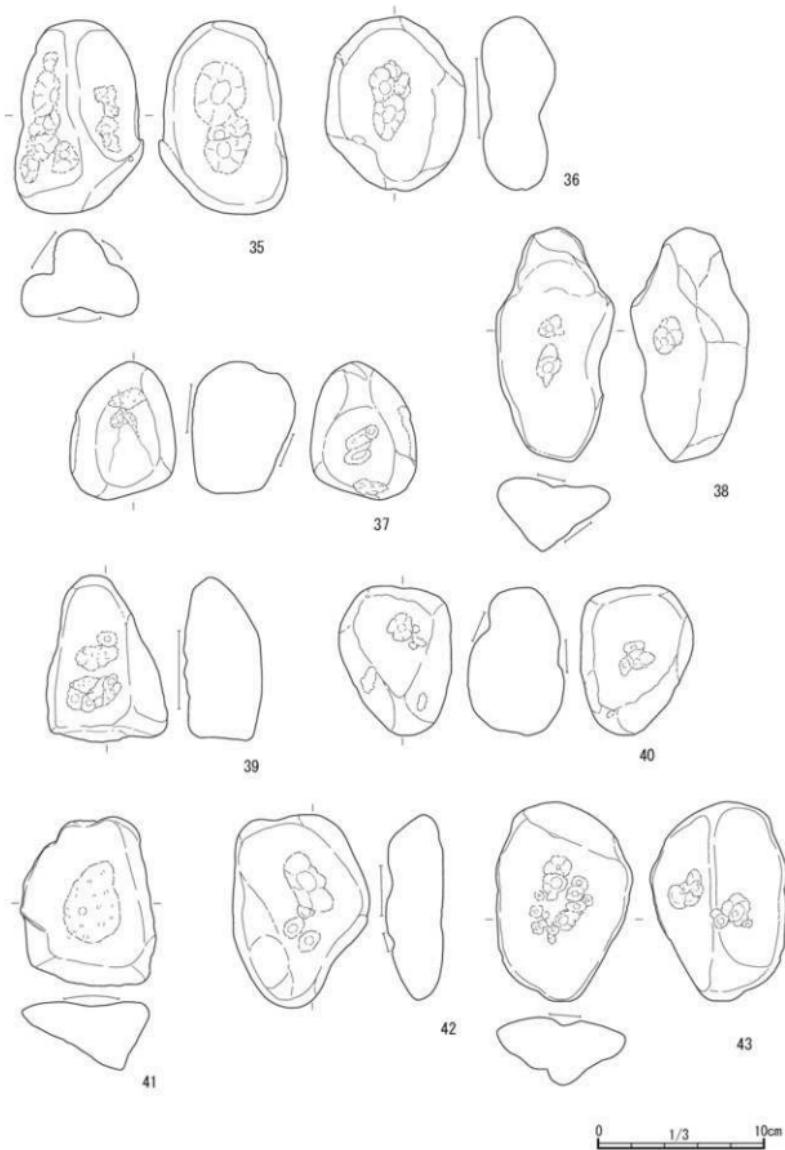


図 271 第III層出土 石器 (8)

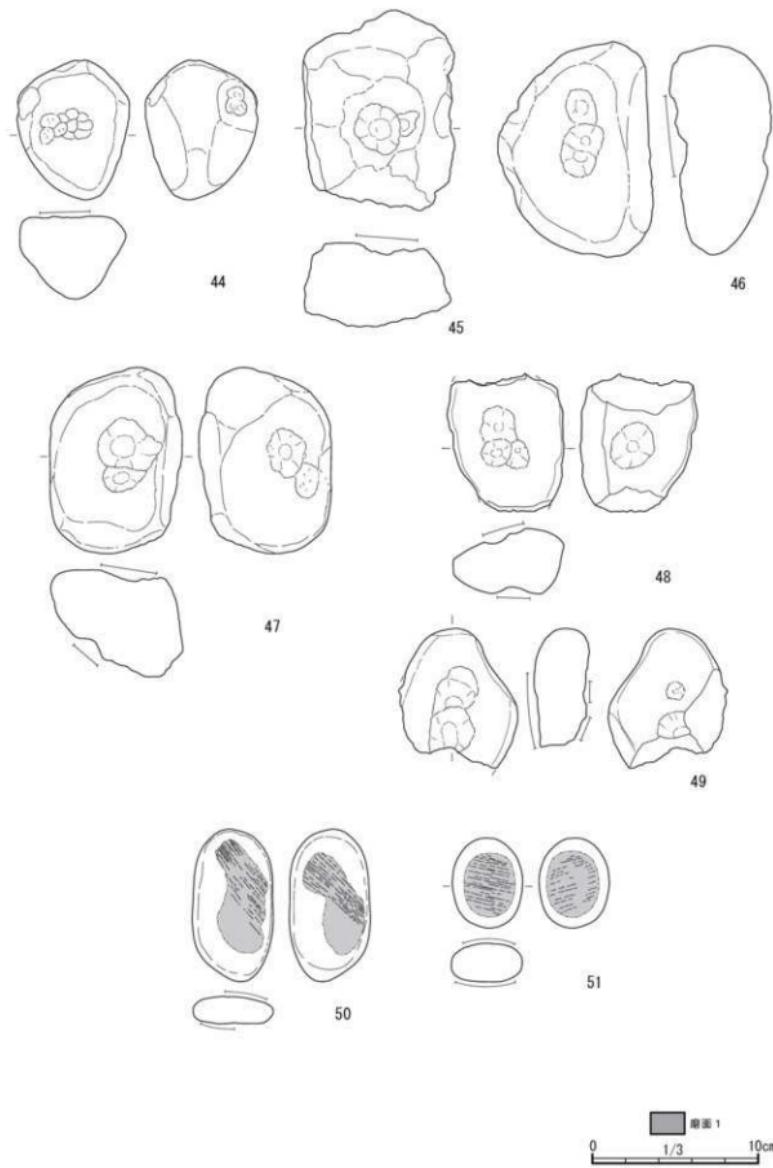
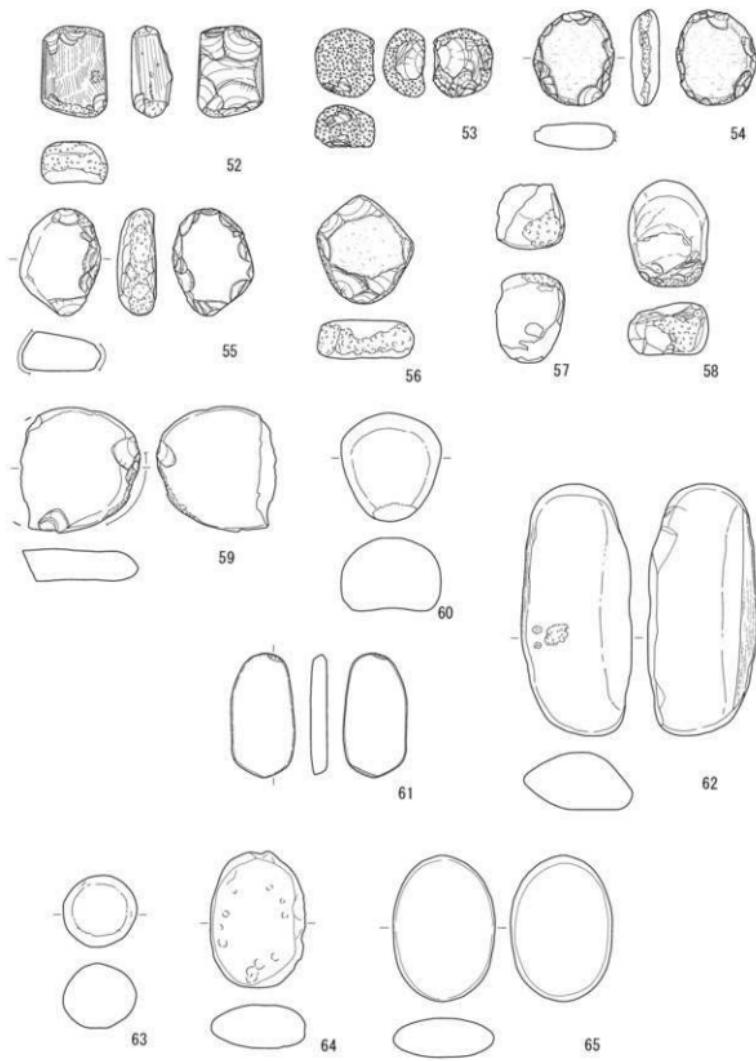


図 272 第III層出土 石器 (9)



0 1/3 10cm

図 273 第III層出土 石器 (10)

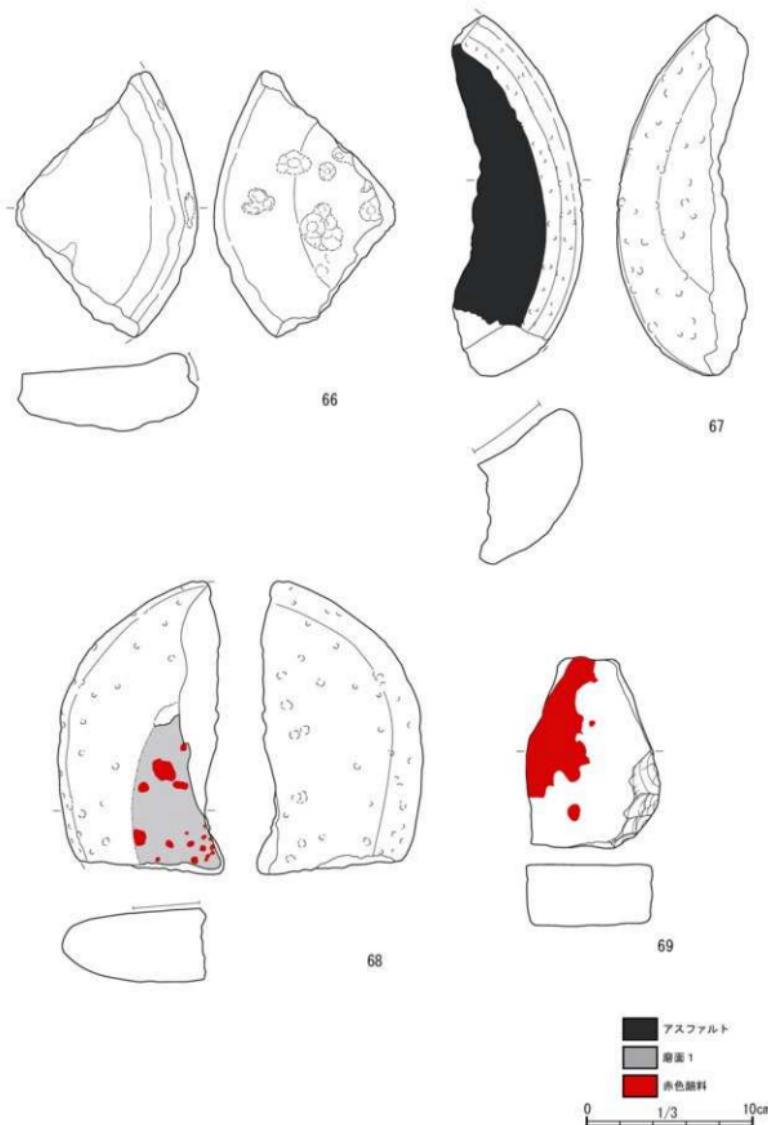
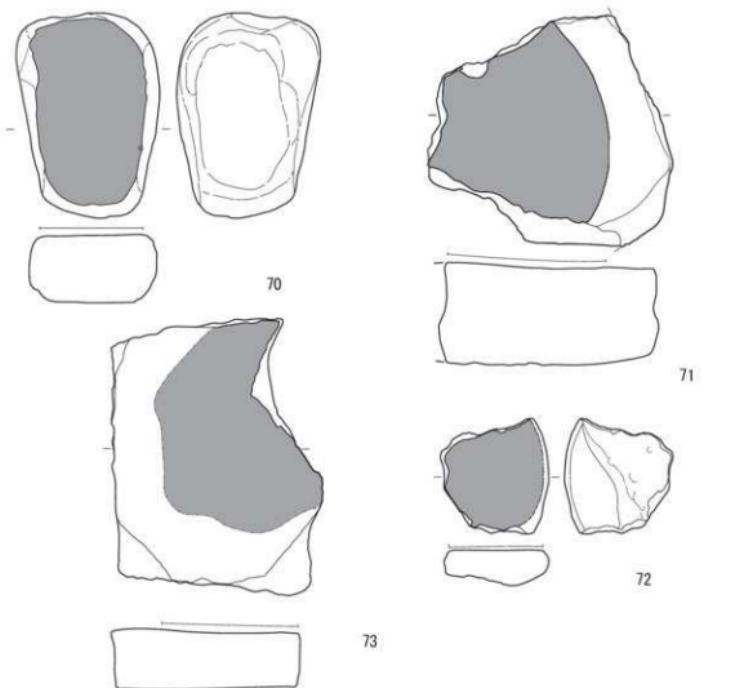


図274 第Ⅲ層出土 石器(11)



第III層(1mトレンチ・包含層)

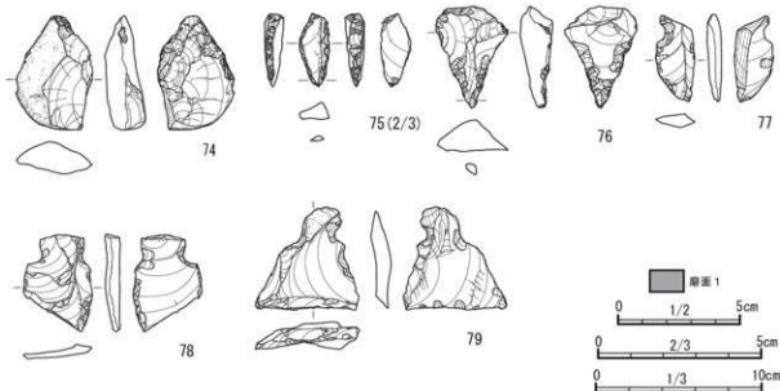


図275 第III層出土 石器(12)

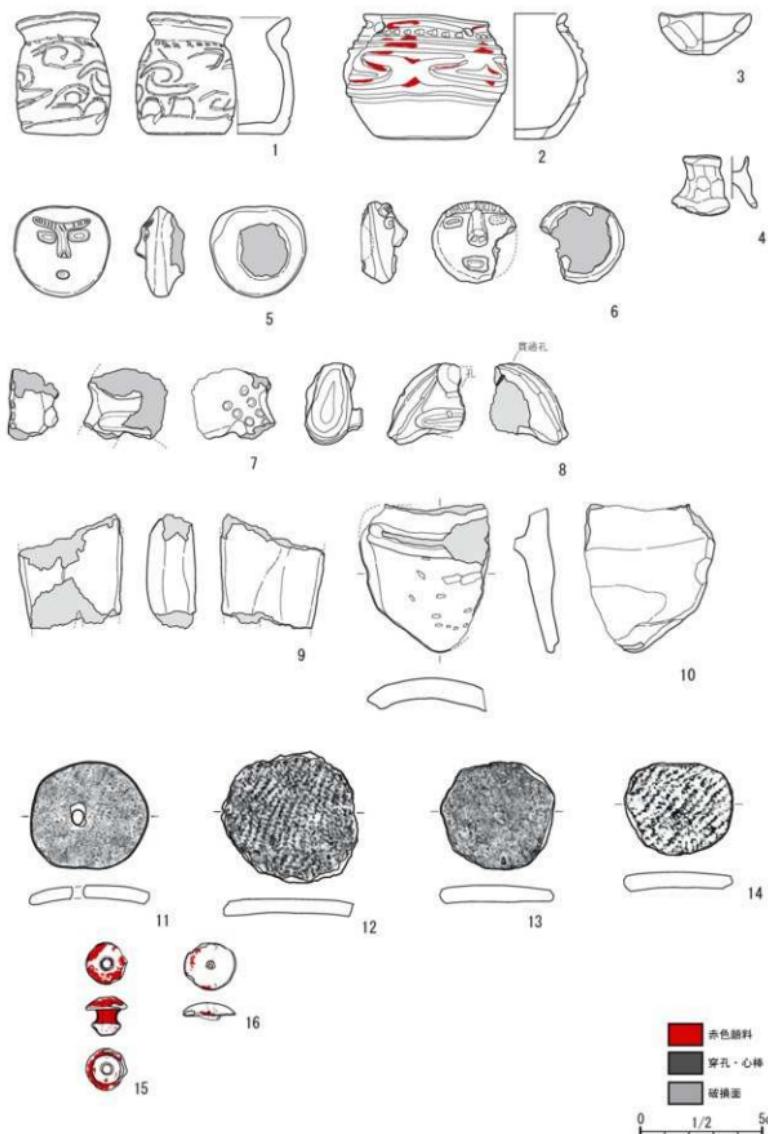


図 276 第Ⅲ層出土土製品

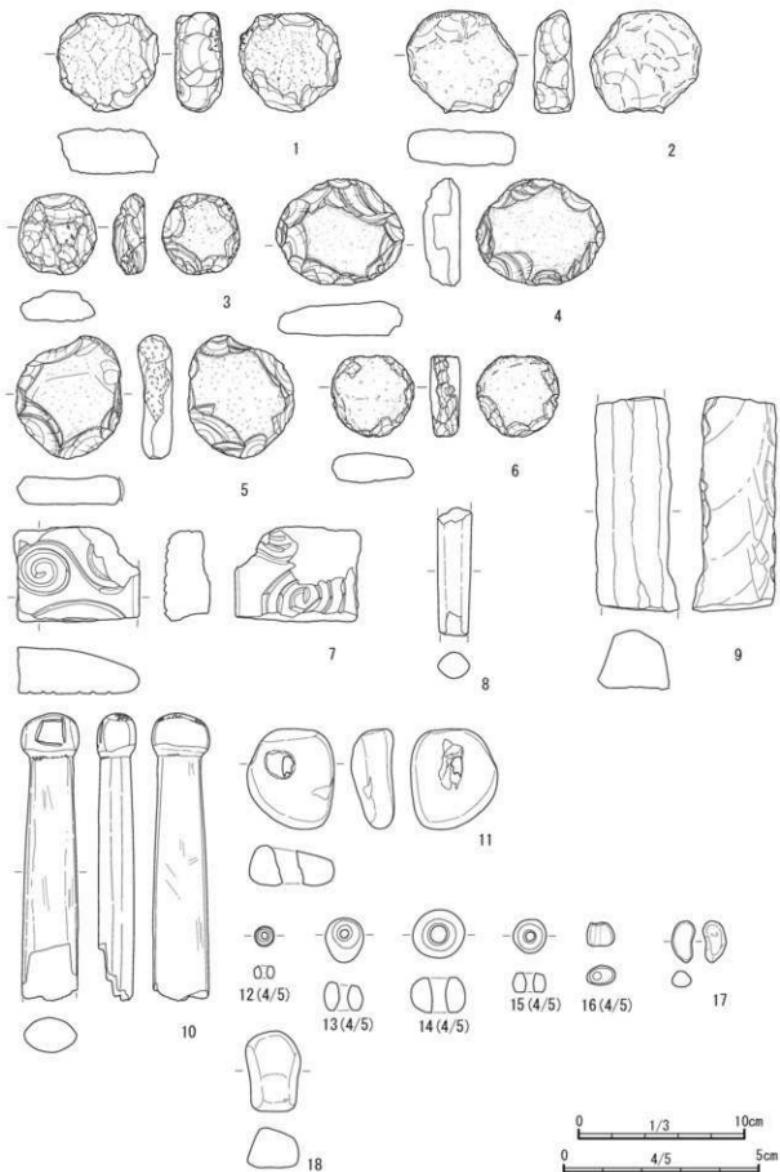


図277 第III層出土 石製品(1)

第4節 第IV層出土遺物

いわゆる漸移層で、地山ローム層の直上層である。縄文時代前期の遺物が主体で、当該期に形成された土層と考えられる。

(1)土器

第IV層から出土した土器のうち、縄文時代前期の土器5点を掲載した。

【縄文時代前期】(図278-1～5) 1・2・5は平口縁で口縁部に側面圧痕を施すものである。5には口縁に縦位に垂下する区画の側面圧痕がみられる。1・2には結束第1種の羽状縄文が頭部に巡るが、5では結束第2種回転文が横位に施文され、さらに胴部にも3条単位で縦位施文される。3は微隆帯が口縁直下に巡り、隆帯上には刺突がみられる。4は底部近くで抉りを有する底部片である。

(2)石器

石槍1点、石鎧1点、石匙1点、削器1点、二次加工剥片類3点、微細剥片1点、石核2点、磨製石斧1点、半円状扁平打製石器1点、敲磨器20点、石錘1点、石冠5点、台石2点が出土した。

【剥片石器】(図279-1～3) 1は両端が尖頭状の石槍である。2はバチ形の石鎧である。3は両面加工石器素材の剥片である。図正面に主要剥離面を展開し、主要剥離面はウートルバッセで剥離が抜けている。

【礫石器】(図279-4～図282-28) 4は偏刃の磨製石斧である。基部側を再加工している。7は剥片素材の半円状扁平打製石器である。5・6・8・9は(北海道式)石冠である。デイサイト、凝灰岩、安山岩を素材としている。ザラザラの磨面2を有する。9は下端に敲痕がある。Qa16点、Qb1点、Qc2点、Qab1点ある。10～24はQaである。デイサイト、凝灰岩、安山岩を素材としている。25は珪質頁岩製のQcである。26は扁平の楕円礫を素材とした石錘である。27は流紋岩の棒状礫である。28は接合した大形の礫である。各破片の出土位置は、同一グリッド内で近接していた。

【石製品】(図282-29, 30) 29は石棒断片であり、研磨痕がある。30は石製円盤である。全面平滑であるので、研磨整形と思われる。

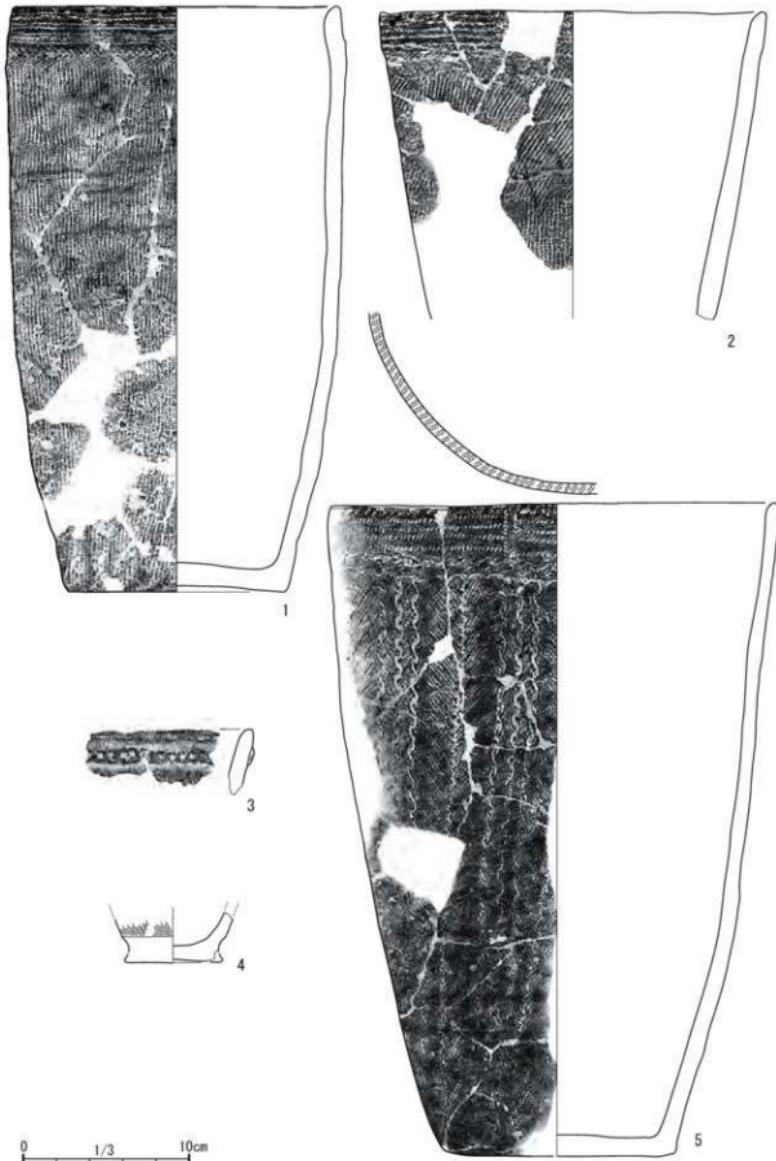


図278 第IV層出土遺物（1）

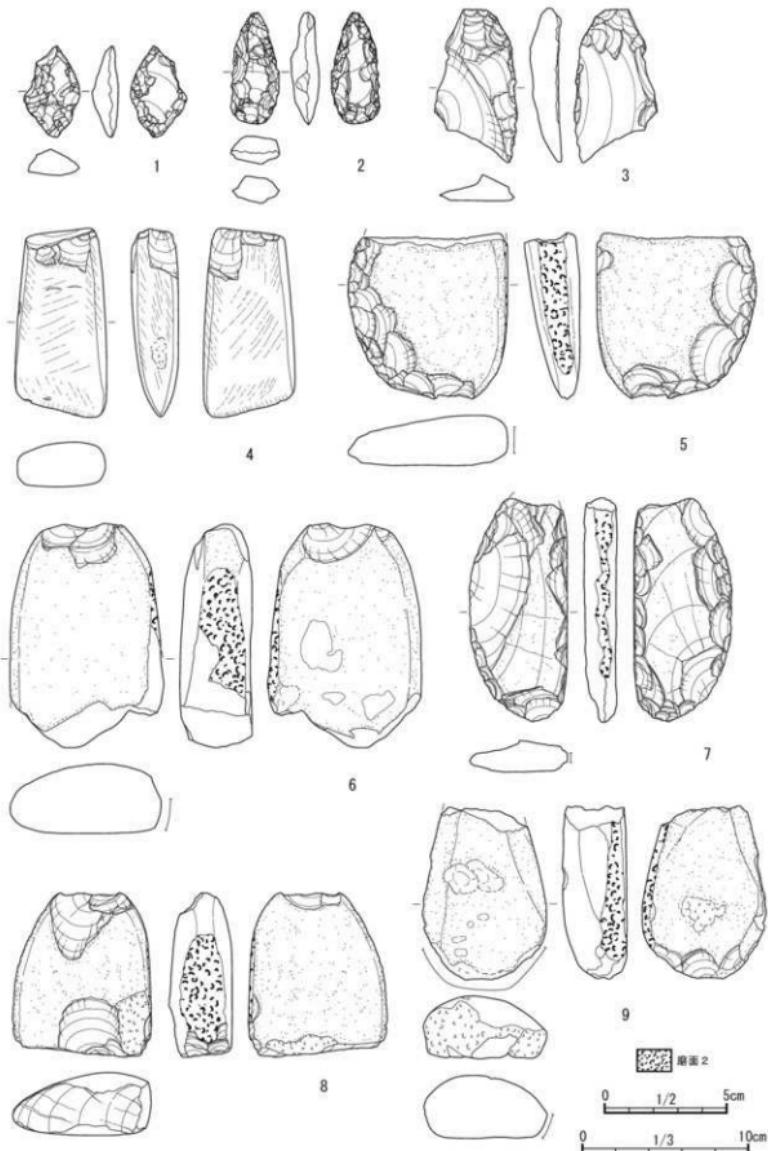


図 279 第IV層出土 石器（1）

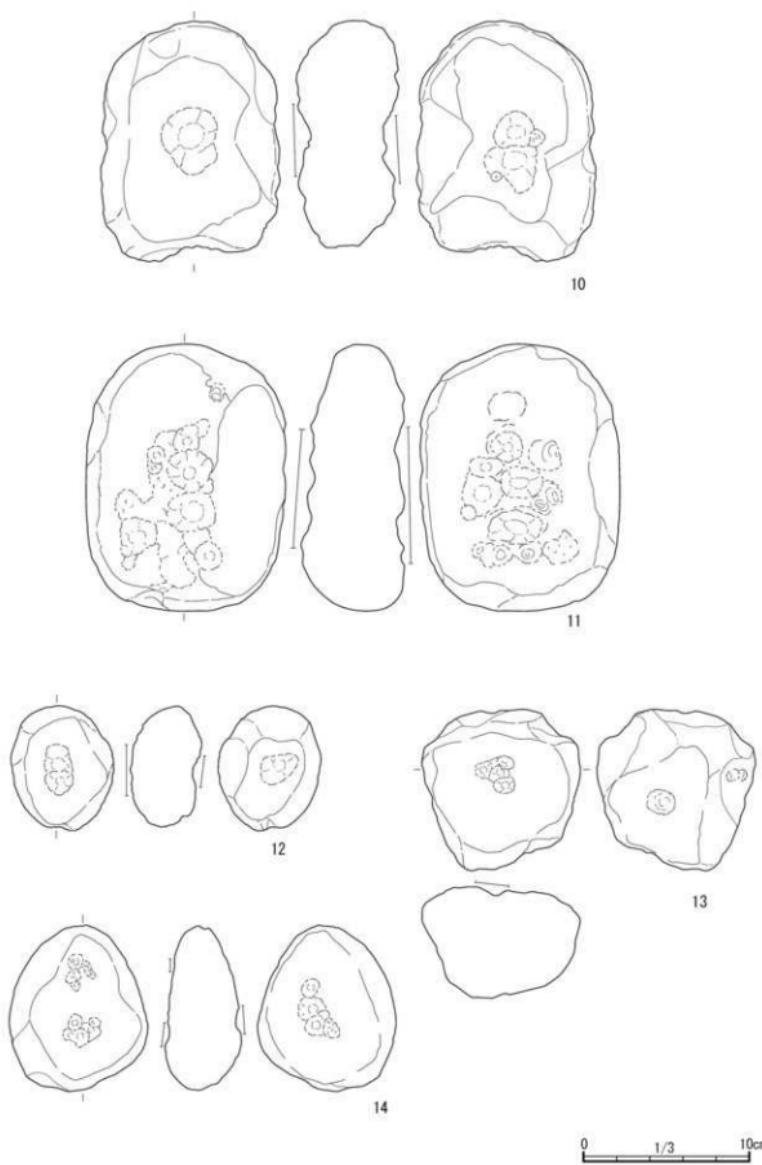


図 280 第IV層出土 石器 (2)

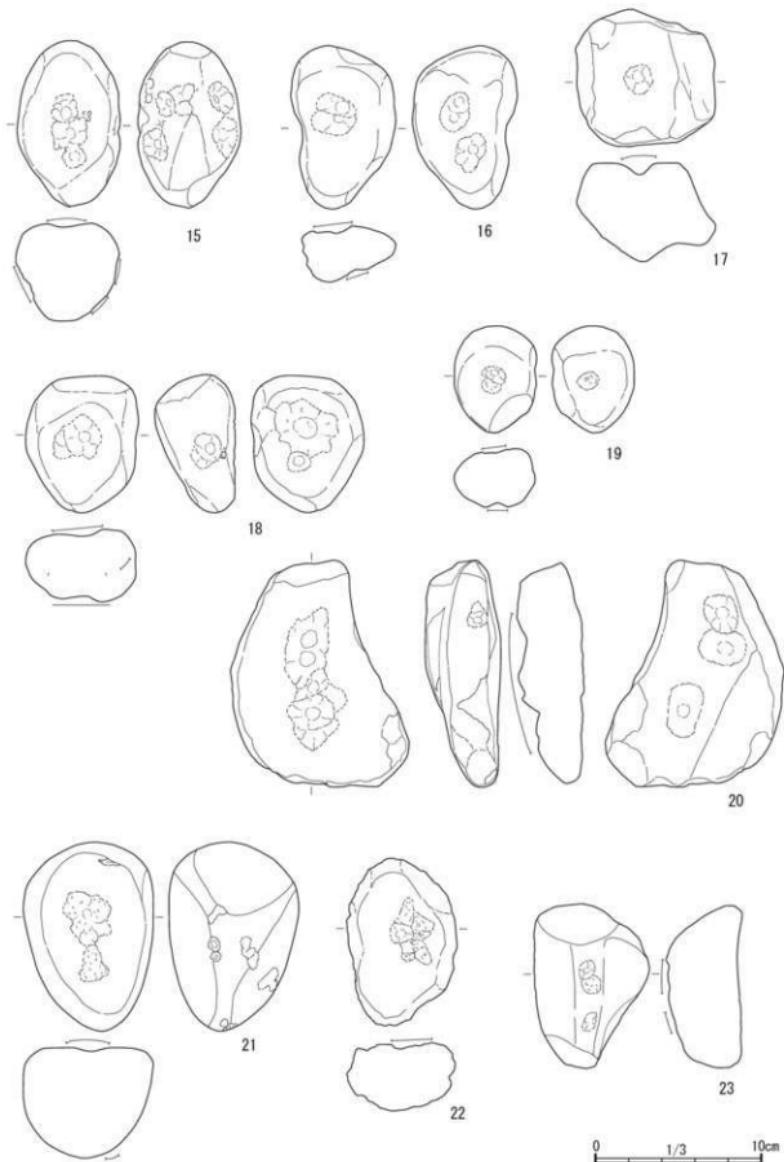


図 281 第IV層出土 石器 (3)

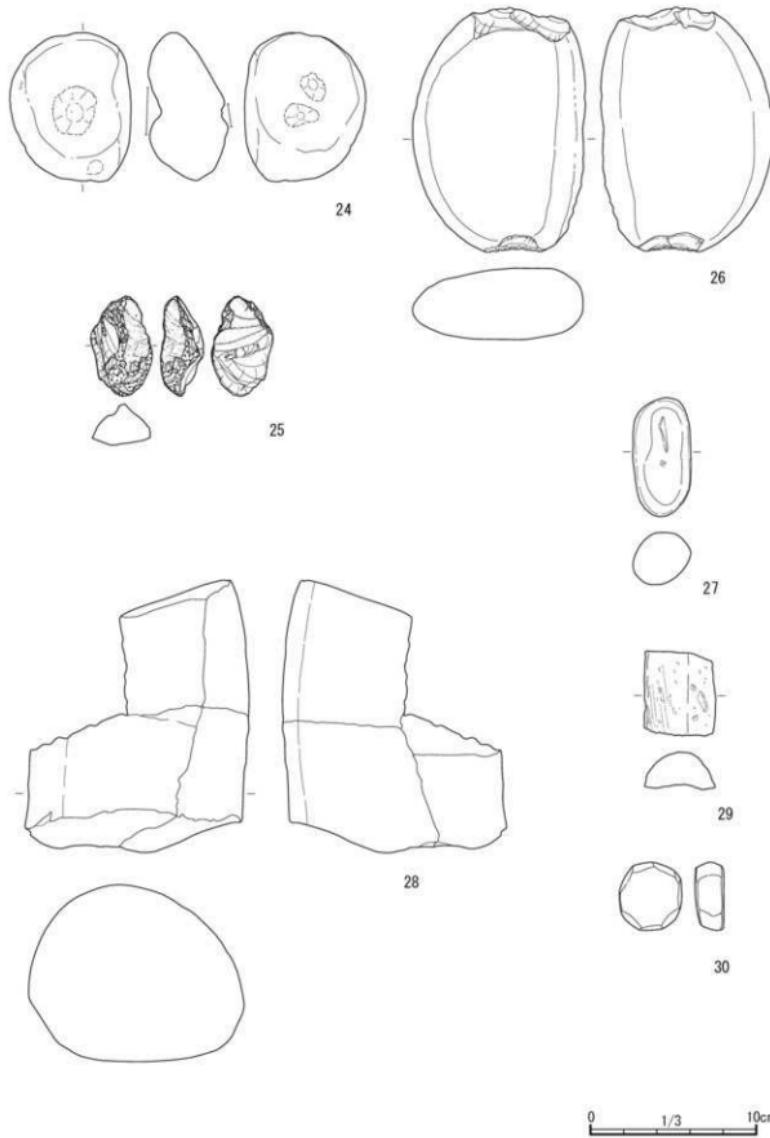


図282 第IV層出土 石器(4)・石製品

第5節 第I層出土遺物

縄文時代晚期の遺物が主体であるが、本土層は近代以降に形成されたものである。

(1)土器

第I層出土土器のうち、縄文時代後期1点、晚期3点、弥生時代6点、平安時代1点を掲載した。

【縄文時代後期】(図283-1) 1は図124-1、図208-2と同一個体とみられる壺もしくは注口土器の胴部片で後期後葉のものとみられる。

【縄文時代晚期】(図283-2～4・7・8) 2は口縁に平行沈線が巡る浅鉢である。3は口縁に2個一対の突起を有し、平行沈線と突起、工字文が施文される鉢である。底部近くには2条の沈線が巡る。4は接合していないが、同一個体とみられる深鉢で、口縁部に沈線、口唇に刻みがみられる。7は変形工字文がみられ、丁寧に磨かれている。8は山形突起と平行沈線の施文されるものである。

【弥生時代】(図283-5・6・9・10) 5・6・9は鉢もしくは浅鉢とみられるものである。5・6は太い沈線で丁寧なミガキがほどこされている。9には平行沈線で区切られた部分に二重の山形文が2段施文されている。10は壺で変形工字文と刺突を組み合わせており、頸部内面にも2条の平行沈線がある。

【平安時代】(図283-11) 11は須恵器壺の胴部片である。

(2)石器

I層において出土した石器は、石鎚27点、石槍1点、石錐15点、石箋1点、両面調整石器1点、石匙9点、前器類72点、両極石器33点、二次加工剥片類67点、微細剥片47点、石核36点、磨製石斧2点、抉入扁平打製石器1点、敲磨器14点、石皿4点、軽石製品1点が出土した。これ以外に剥片や自然砾が出土している。剥片石器の出土重量は9,195.4g、礫石器の出土重量は23,091.3gである。

【剥片石器】(図284-1～25) 石鎚は7点図示した。Ataが15点と大半である。7はAtcの茎部分が折れ、その部分にアスファルトが付着している。石錐は4点図示した。8のような小形品や9の棒状形態がある。10は先端部が磨滅しているので石錐に分類した。前器もしくは石匙の先端部の可能性もある。11は側面に突起をもつ石錐である。石匙(12・13)、搔器・前器(14～18)がある。16は背部にアスファルトが付着しており、Gb2である。他に二次加工剥片(19)、石器断片(20)、は微細剥片(21～25)がある。

【礫石器】(図285-26～30) 磨製石斧は、26は刃部が欠損している。27は基部が敲打整形されている。敲磨器として、Qaが2点(28,29)と、Qb1点(30)を図示した。

(3)土石製品

【土製品】(図285-1～5) 1は匙形土製品の柄の部分である。土偶として、2は結髪土偶の上半身である。髪飾り部分が破損し、顔はつぶれている。3・4は土偶の顔部分である。接合面はなめらかであり、パーツを作ったあと、胴体部に張り付けた不連続面であろう。隆帯や沈線で顔を表現している。5は土版である。抉りのはいった分銅形状である。中心の正中線を挟んで両側の上下にコの字状に沈線を2単位で同心円状に重層化させている。側面に1条の沈線がみられ、抉り部分には刺突が施されている。

【石製品】(図285-31～33) 31は石棒である。32は勾玉状で、両面穿孔がある。33は緑色凝灰岩製のひょうたん形の玉で、類例は旧浪岡町源常平遺跡で出土している。

第6節 搅乱層出土遺物

薬師遺跡では、一般的な搅乱や盃掘坑とみられる搅乱も多数見つかっているが、調査区を縦貫するように水道管やケーブルの埋設溝が数条掘削されている。これらは深いところでは地表面から約1.5m以上掘られていて、盛土遺構や包3層などを壊し、水道管・ケーブルを設置してすぐにその土で埋め戻されたものと思われる。したがって、搅乱層出土でも盛土遺構や包3層からの出土遺物に接合したものも少なくない。

(1) 土器

搅乱層出土土器のうち、縄文時代後期1点、晩期2点、弥生時代9点、平安時代2点を掲載した。

【縄文時代後期】(図283-12) 12は後期初頭の深鉢口縁部片で、沈線文がみられる。

【縄文時代晩期】(図283-13-14) 13は頸部に隆帯と突起が付く地文無文の小型壺である。14は口縁部に工字文が巡る鉢である。

【弥生時代前期】(図283-15~23) 15は頸部が無文で、平行沈線で区画された胴部に変形工字文が施文される鉢である。16~18は同一個体とみられる広口壺、16-17が口縁部、18が肩部である。口縁には変形工字文がみられ、胴部には多重沈線で区画と鋸歯状文を施文するようである。19-20は広口壺の頸部附近の破片で、多重沈線がみられる。SK66出土(図71-13)、弥包層出土(図201-9)、包1層出土(図210-9・11)と同一個体と思われる。21は変形工字文に刺突文を充填している広口壺頸部片である。22-23は小型壺口頸部片の同一個体である。21と同様変形工字文と刺突文が施文され、23には貫通孔がみられる。

【平安時代】(図283-24・25) 24は土師器甕底部で、25は須恵器甕の胴部片である。

(2) 石器

搅乱からは石錐59点、石槍1点、石錐9点、石箇1点、両面調整石器7点、石匙16点、削器類33点、両極石器8点、二次加工剥片類28点、異形石器1点、微細剥片10点、石核36点、磨製石斧4点、半円状扁平打製石器4点、敲磨器39点、石皿7点が出土している。これ以外に多量の剥片や自然礫が出土している。剥片石器の出土重量は8,112.1g、礫石器の出土重量は46,799.2gである。主に水道管やケーブルの掘方から出土しており、包2-B層、包3層や盛土に帰属する資料である。

【剥片石器】(図286-1~9) 石錐は、Ataを2点図示した。3は石錐形の異形石器である。4は削器、5・6は微細剥片、7は剥片、8・9は両極石器である。

【礫石器】(図286-10~図287-23) 10は磨製石斧の刃部断片、11・12は小型の磨製石斧であり、全面研磨整形である。13は刃部欠損の擦切の磨製石斧である。右辺に擦切痕が明瞭に残る。14は半円状扁平打製石器、15~20は敲磨器である。21はTa1、22はTa2である。23はTcである。

(3) 土石製品

【土製品】(図288-1~18) 1は突起のある鉢形ミニチュア土器である。2は四脚形土器である。3は土偶もしくは香炉形土器の頂部の角状飾りである。

土偶として、5は良好な胎土を用いた中実土偶である。沈線や縄文で文様が表現されている。4・6は角状突起をもつ頭部片である。他に胴部、腕、脚部の断片資料が出土している。12は土版である。コの字状に沈線を2単位で同心円状に重層化させている。裏面には文様がない。13は臼形の耳飾りである。土製円盤は、14は有孔、16は条痕文素材、残りは縄文のみである。

【石製品】(図287-24~30) 24-25は雨垂れ石である。亀ヶ岡遺跡の雷電地区や觀音林遺跡第七次調査などで類例が確認されている。26は環状石製品、27は有孔石製品である。28はチャートの自然礫、29・30は平玉1と2である。

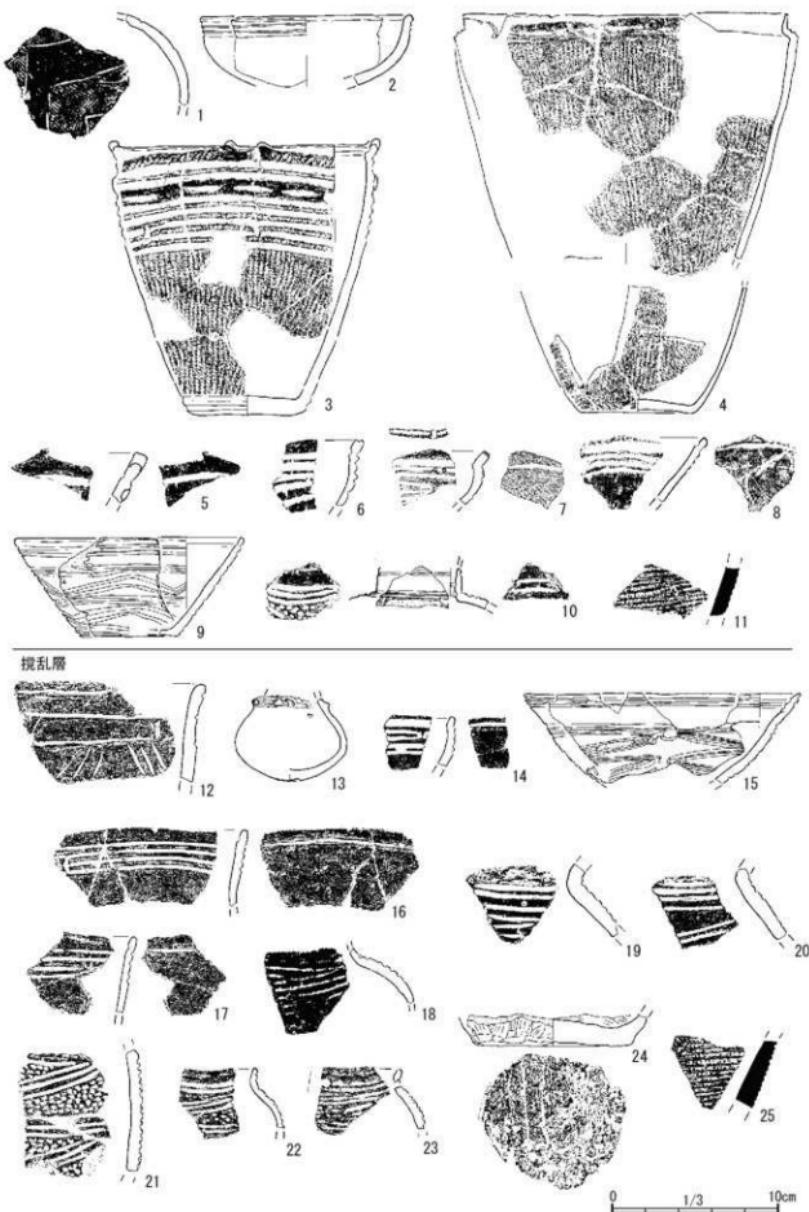


図 283 第I層・搅乱層出土 土器

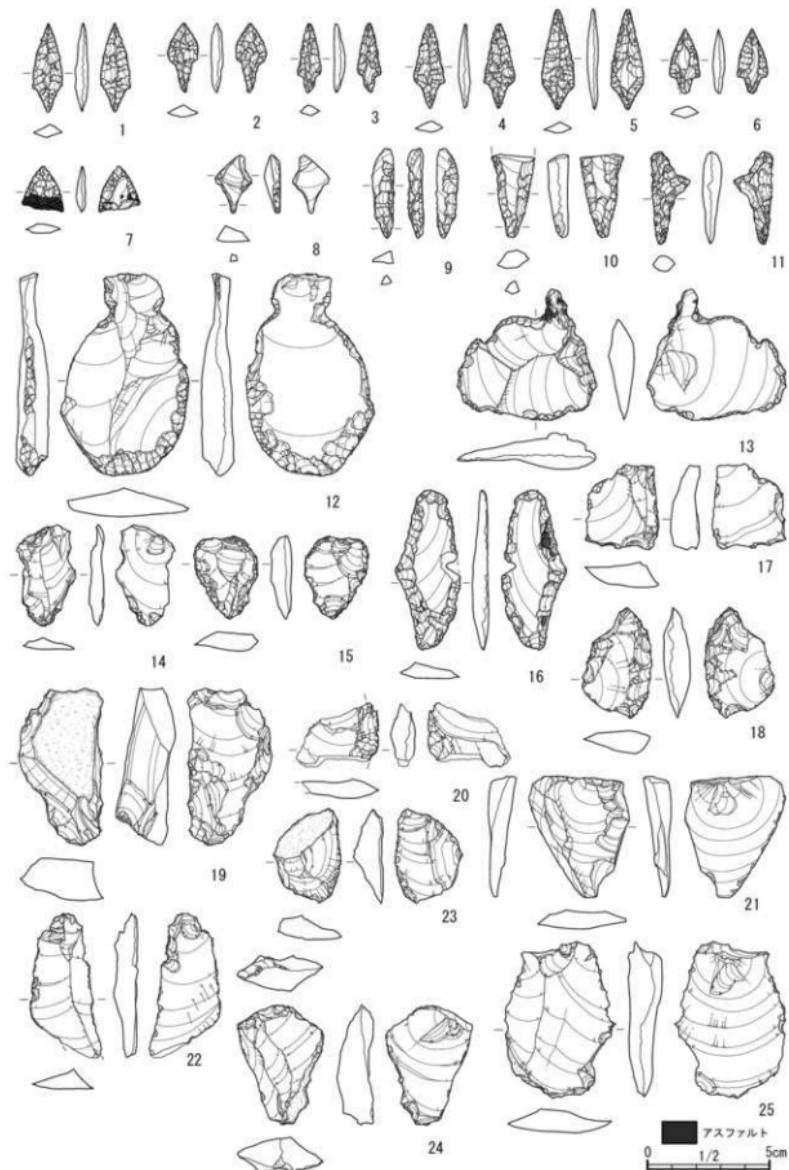


図 284 第I層出土 石器(1)

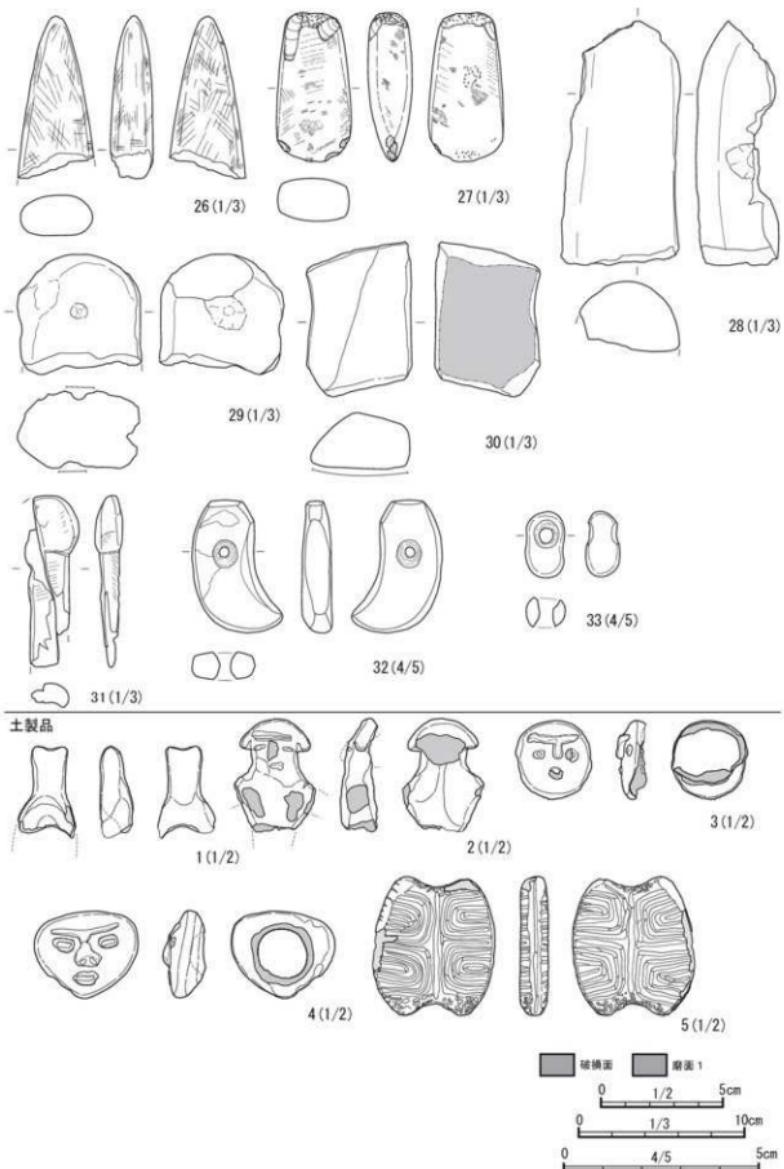


図 285 第I層出土 石器(2)・土石製品

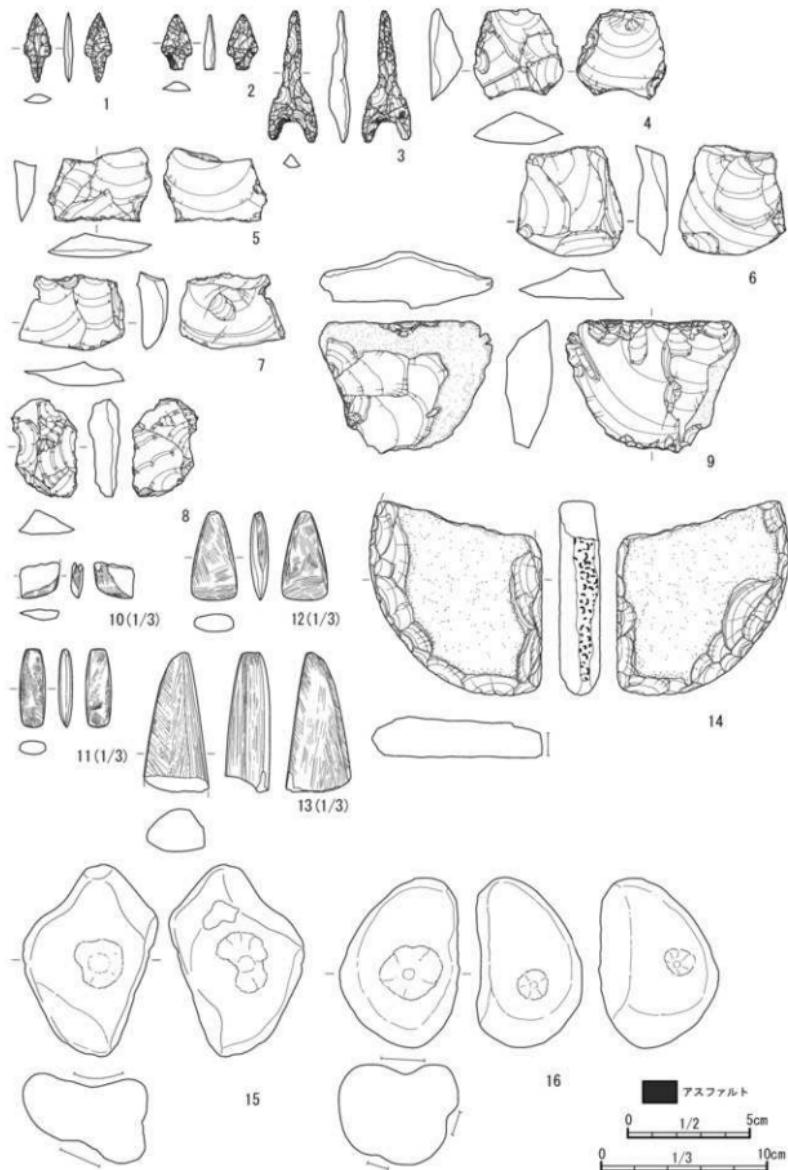


図 286 搗乱層出土 石器 (1)

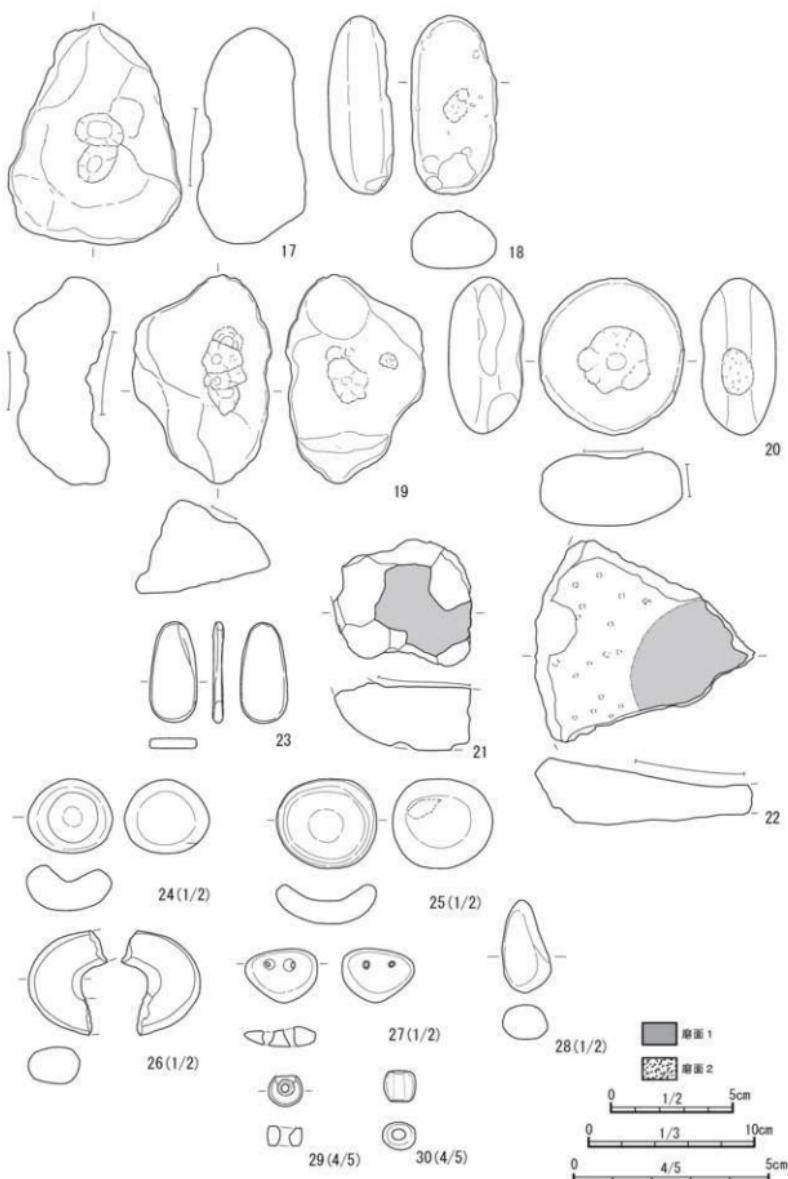


図 287 撹乱層出土 石器 (2)・石製品

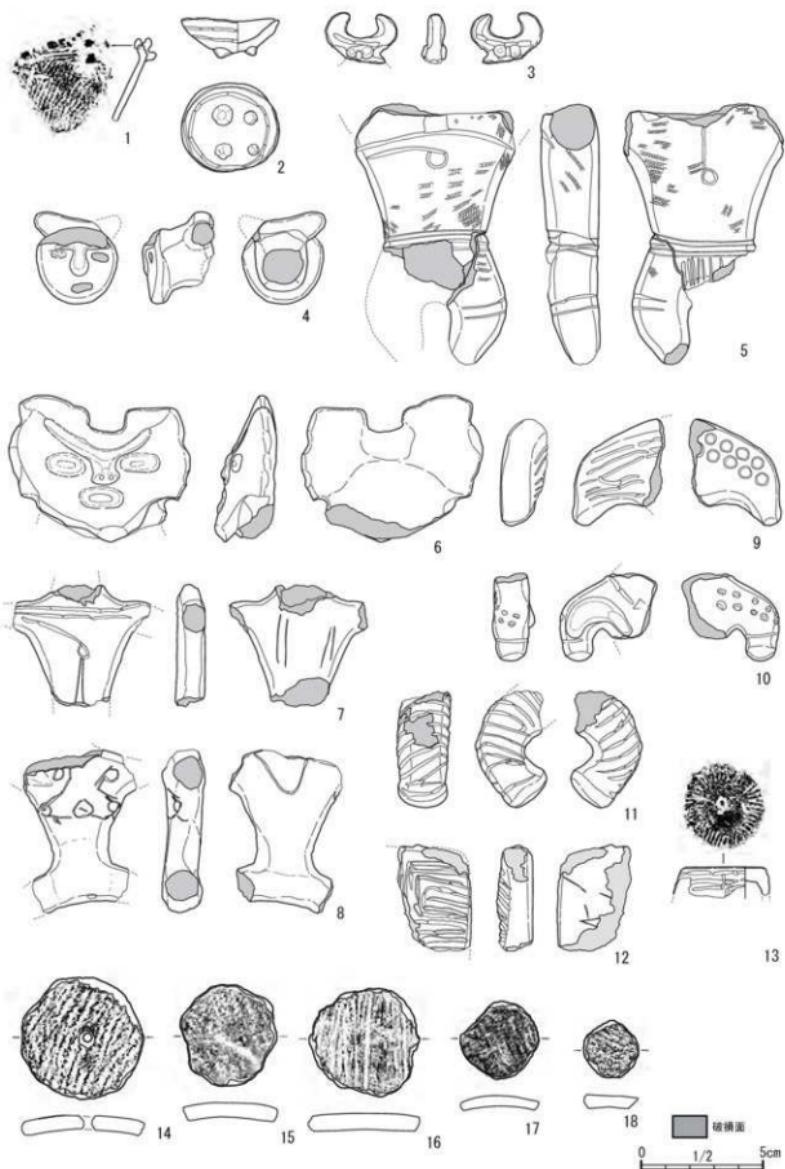


図 288 摂乱層出土 土製品

青森県埋蔵文化財調査報告書 第545集

上 新 岡 館 藥 師 遺 跡

- 県営一般農道整備事業(山村振興)に伴う遺跡発掘調査報告 -

(第1分冊)

発行年月日 平成26年3月26日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

T E L 017-788-5701 F A X 017-788-5702

印 刷 所 ワタナベサービス株式会社

〒030-0803 青森県青森市安方二丁目17-3

T E L 017-777-1388 F A X 017-735-5982
